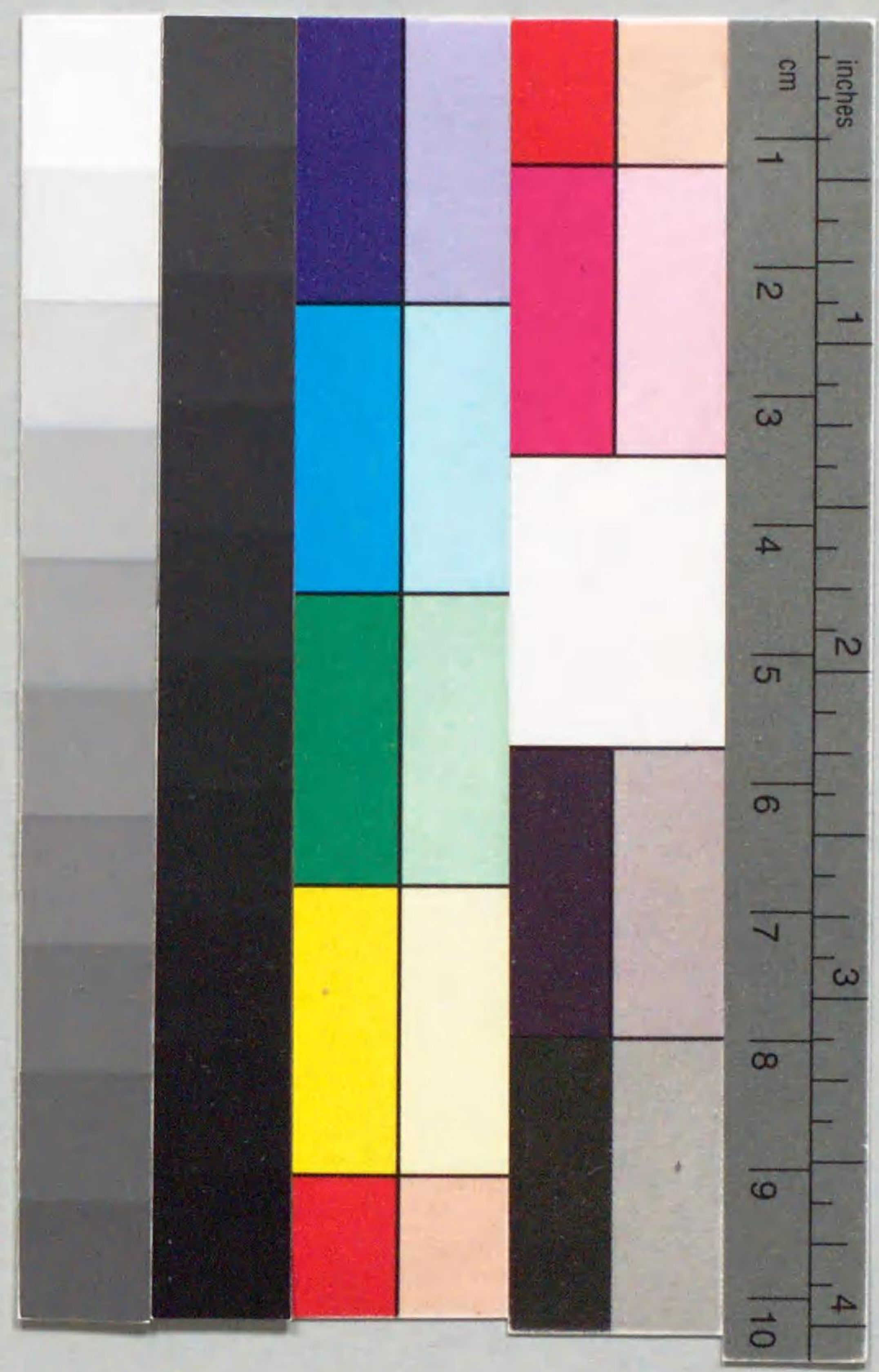
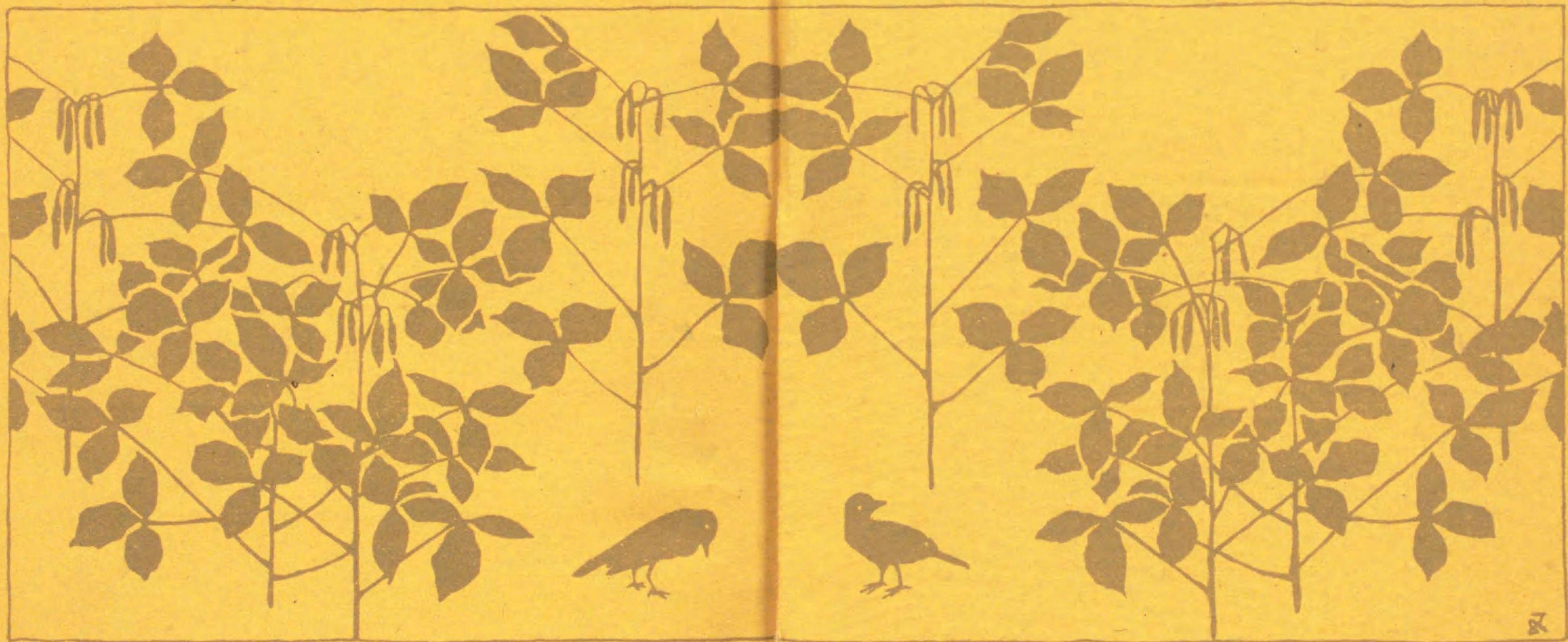


081
Y978
T



00261320





先哲像傳
近世畸人傳
百家琦行傳

全



261320

緒言

先哲像傳四卷(弘化元年序)江戸の儒者得齋原義胤の編する所、徳川時代の儒者數十家を擇みて、其肖像と筆跡とを影寫し、其の立つる所の傳、勉めて金石の文字若くは前人の筆述に據りて叨りに私意を加へざらん事を期せり。編者が前賢を景仰するの篤き、以て想見するに堪へたりといふべく、後人の徴を取らんとする者の爲にも、亦其用意の頗る欽すべきものあるを見るべし。之を著者の父念齋善氏の名著先哲叢談に比するに、洵に好箇の姊妹篇にして、或る意味に於ては本篇の確に一步を進めたるものあるを見る。

近世畸人傳正續十卷(寛政十年刊)近古に於て蘆菴、澄月、大愚と共に京都和歌の四天王と稱せられたる閑田子伴蒿蹊が、其の友三熊花顛子の蒐集せる材料を刪補して作る所、其の旨とする所は、名君、賢相、碩儒、文豪等の、聲名生前身後に嘖々たるに反し、性行の奇、操守の高、傳ふるに足るべくして而も傳へられざるを悼みて、之が事蹟の堙滅を防がんとするにあり。正篇の挿圖は花顛之を畫き、續篇の挿圖は花顛の妹露香之を畫けり。

百家琦行傳五卷(天保六年刊)は江戸の戯作者八島五岳の編述する所、此篇傳する所は眞に奇人の奇行と稱すべきもの多く、以て後人をして發憤せしむべからずと雖も、酒間茶後の談柄を供するに於ては、蓋し好箇の資料たるを失はざるべし。
 以上、三書三様の面目、之を一冊の中に併看せば、其間亦自ら一種の趣味を感ずるものあるべし。

本篇を成すに方りては、文學士渡邊徹氏の手を煩はして、三書いづれも原本に據りて校訂を加へ、間、頭註を施し、以て聊か讀者に便せんことを期せり。其他翻刻につきての用意は、一に他の本文庫本に同じ。

大正二年十二月

校訂者 武笠 三

目錄

先哲像傳……………	一—一四	卷之二……………	四五七
近世畸人傳……………	一四五—四〇六	卷之三……………	五二九
卷之一……………	一五九	卷之四……………	五六六
卷之二……………	一九七	卷之五……………	六〇九
卷之三……………	二五三	百家琦行傳……………	六五五—八二四
卷之四……………	三〇七	卷之一……………	六五七
卷之五……………	三五七	卷之二……………	六九一
續近世畸人傳……………	四〇七—六五四	卷之三……………	七二五
卷之一……………	四三二	卷之四……………	七五七
		卷之五……………	七九三

先哲像傳
近世畸人傳
百家琦行傳

内容細目

青木長廣	二四三
芥川貞佐	六三〇
安藤菅江	七四四
安藤東野	一三三
安藤年山	三六一
雨森芳洲	五七九
新井白石	八九
有難與一兵衛	八〇
有馬涼及	三八三
粟田口善輔	五九
池大雅	三〇九
池大雅妻	三三
石川丈山	六四二
石野市兵衛	三三
石野權兵衛	三三
市川柏筵	七八一
稻生若水	四八六

一 神梨一	五〇〇
伊藤介亭	一八一
伊藤仁齋	六
以登女	四九
伊藤東涯	三
惟然房	三四九
井上通女	三八二
猪之助	七九七
今井似閑	二六三
位田儀兵衛	二七四
宇佐美瀧水	一三六
氏家伯壽	五二
宇野醴泉	六二
裏住(狂歌師)	六四四
叡山源七	五三
惠潭(僧)	三四一
惠南(僧)	六二七
江村剛齋	二六六
江村專齋	二三五
烟曲彌平	八〇〇

圓空(僧)	二四六
圓通(僧)	三九二
大石氏僕	二〇六
大島屋彦兵衛	六八三
太田見良	二九三
大橋(遊女)	二六
大橋東堤	六二四
淡海狂僧	三五二
近江新六	一九二
近江長女	五九三
岡周防守	二四三
岡野左内	四六四
萩生徂徠	一〇二
奥田三角	四九二
御師匠良助	七〇七
小野寺秀和姊	二一
小野寺秀和詠歌	二二
小野寺秀和妻	二〇八
帶吉兵衛	六八三
阿雪(烈婦)	八〇五

甲斐粟子	一七六
甲斐徳本	三八
貝原益軒	八二六
海北若沖	二六四
栢原捨女	五九
加々見櫻塙	四九七
覺芝(僧)	二九五
學信(僧)	五三
隱家茂睡	三三四
霞谷山人	五八
加島宗叔	二八三
鍛冶屋某	五五
荷田春滿	二六四
荷田在滿	二六六
加茂真淵	二六七
神田菴小智	六七四
龜田久兵衛	一九三
龜田窮樂	三九二
川谷貞六	五四〇
河内清七	一八九

河内屋太郎兵衛	七五七
川村瑞軒	七六五
木揚利兵衛	一八八
久兵衛(樵者)妻	一八〇
祇園梶子	三四五
桔梗屋阿園	八〇一
義觀(僧)	五三七
義齋明神	七三五
岸玄知	六三五
幾多女	五三七
北村雪山	三八九
北村篤所	二二七
北村(堅田)祐庵	三〇六
北山友松子	三〇六
木下長嘯子	六四〇
金蘭齋	二八〇
狂歌坊主	七七七
行水政右衛門	八六
行人七兵衛	七八
曲翠	二五

空蓮(僧)	五四一
久隅守景	三三一
熊澤蕃山	五九一
栗山覺左衛門	七四三
車海老の老爺	七三
花顛子	四一九
桑原爲溪	四八八
契沖(僧)	二五六
月舟(僧)	五六六
幻阿(僧)	五三
玄砂(僧)	五四八
元政(僧)	四三九
公慶(僧)	五六六
孝子祿助	七九五
郷谷老夫婦	七三九
小西來山	二八二
子松源八	四六六
小萬女	五八四
米屋與右衛門	二〇一
佐川田喜六	四三五

笹岡市正	六〇	駿府義奴	一八七	少佃房	二九六
佐々木志津摩女	五九	七石臥(隠士)	三三五	津田一清	六三七
里村紹巴	四七	相者龍袋	二八九	津和野清六	五九五
山中奇人	三五	園木覺郎	五三三	手車翁	二七五
澤井智明	三六	其鯛庵杜口	五〇五	手島堵庵	三三四
澤村琴所	三六	求大雅僧	三三五	鐵眼(僧)	一九九
似雲(僧)	三六	高倉街乞丐	二七三	天愚孔平	六六一
七兵衛(樵者)妻	一七九	高田敬輔	六三三	寺井玄溪	二〇三
芝山某	六四	高戸善七	四五〇	土肥二三	三三三
鳥の勘十郎	六八〇	高橋圖南	三七七	唐齋	六七三
下村道瑞	四八九	高森正因	五〇八	桃水(僧)	一九九
峻山和尚	八一	瀧野瓢水	五〇五	董堂敬義	六九九
俊乘(僧)	二四八	瀧夢輔	七三四	藤堂樂庵	五五〇
丈草(僧)	三七八	太宰春臺	二一〇	戸田旭山	三三三
狸々庵	二九四	建凌岱	六三五	外山成山	六七七
祥藥和尚	六六	田中丘隅右衛門	七六一	内藤平左衛門	二〇二
菅浦皮馬肝	六七七	谷風棍之助	七〇五	中江藤樹	四六一
杉山檢校	四七三	狸の卜者	七四七	中倉忠宣	二四九
角倉玄之	四七六	煙草屋吉兵衛	六八二	長崎俄人	二八八
角倉了意	四七三	端文仲	五二〇	永田觀鷲	六二五

中村惕齋	七六	林讀耕齋	三三	某尼(遊女)	二九六
長山宵子	一七五	林羅山	二〇	朴翁	三八二
浪花鶴女	五九	原田長兵衛	四九	細井廣澤	五三四
並河天民	三五七	樋口圭水	二六四	佛佐吉	四八
南谷(僧)	五七〇	髭の亦四郎	七三六	本阿彌光悅	四六一
檜林由仙	五三	日雇八兵衛	五九四	堀部金丸女	五八九
苗村介洞	三三	表太	三三三	馬郎孫兵衛	四三
苗村介洞妻	三三	廣澤長孝	三三五	馬杉亭安	三五九
西生永濟	三三九	廣瀨才二	五九	松岡恕庵	四八二
日經(僧)	五七	不二行者藤四郎	七四	松下豐長	五七七
日初(僧)	三九	藤原惺窩	一一	松任千代女	五九〇
能順	四七	佛行坊(僧)	二九七	松本駄堂	三九八
野田忠肅	二六四	文展狂女	二八五	窓の村竹	七八三
賣茶翁	三六	古谷久語	五二七	巳山(僧)	五六六
灰屋某	五五	平金華	一三	見返り醫者	七三三
破鏡(尼)	三四	別首座(僧)	二四五	三組町與三右衛門	七〇〇
萩原榮輔	六七一	蛇隱居	七四八	三國歌川	五六一
白幽子	四一	蛇喰八兵衛	七五〇	三井親和	六六一
服部南郭	二九	望玉蟾	六二	三井養安	六三八
英一蝶	六〇六	法眼(僧)	五三〇	美濃隱僧	三九九

宮筠圃	一八三
三宅尙齋	一七九
三宅尙齋妻	一九一
三宅石庵	四八七
宮津某	六三〇
妙船(尼)	五九六
女夫鍛冶	七九三
三輪執齋	九四六
無能(僧)	一七三
村上等詮	四七
室町宗甫	四八
室町婦と本頭	六六〇七
望月立三	六四
百井塘雨	五〇三
桃山隱者	二七三
森金吾	二九一
森島中良	七三
奴の小萬	八〇七
柳澤淇園	三〇七
矢部正子	三三三

山縣周南	一三七
山崎庄右衛門	四三
山崎闇齋	五
山科農夫	二七六
大和伊麻子	一九一
山村通庵	三九五
熊斐	六〇
百合子	三〇八
涌蓮(僧)	三〇〇
横井也	五五
吉野(傾城)	五五
要助(雇人)	五九
龍造寺平馬	四七
若狹綱子	一七八
若狹與左衛門子兄弟	四四六

右細目は主要人名を採り發音に從ひ五十音に排列せるものなり

先哲像傳 内容細目終

先哲像傳序

古人嘆民情之衰薄曰。生相憐死相捐。嗟夫世道之益下。至於死相倍。不翅相捐也。其可不浩歎也。予先子念齋。嘗著史氏備考。上自縉紳衣纓之家。下迨閭巷小技之士。苟有名於世者。行狀墓誌。家乘譜牒。無不具備焉。蓋欲使其名永不湮滅焉。可謂生相憐死亦不相捐。予披覽之。深欽其言行之儼存於今矣。因又惜其丰彩之難得而仰也。於是百方奔走。索其遺像。或乞之其家。或訪之其友。幸而得之。則十襲珍藏。有年於茲。幾將千數。思欲以繼先子之志。且使其人々不死於宇宙間也。或誥予曰。凡物經數傳。則白爲黃。黃爲碧。碧爲黑。終至失其真。況一髮不似。乃非其人乎。子之有此舉。不如點鬼簿之爲真率也。予答曰。書不云乎。乃審厥像。俾以形旁求于天下。說築傳巖之野。惟肖。當此時。不論一髮之肖否。而遂以得其人。然則取其形似之大槩。而

足矣。今景仰之餘。取之於彷彿。雖不中不遠耳矣。客領而去。是爲序。

弘化甲辰之夏竹醉日

江都德齋原義

正道甫題



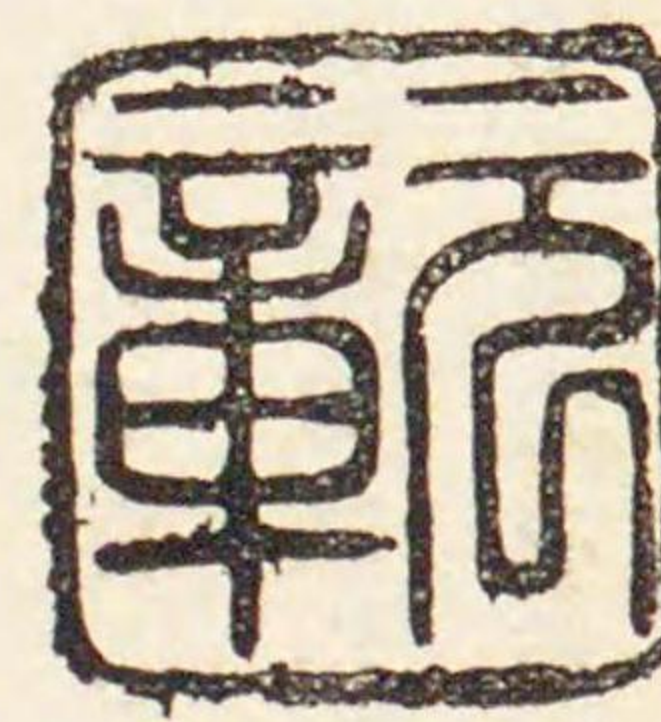
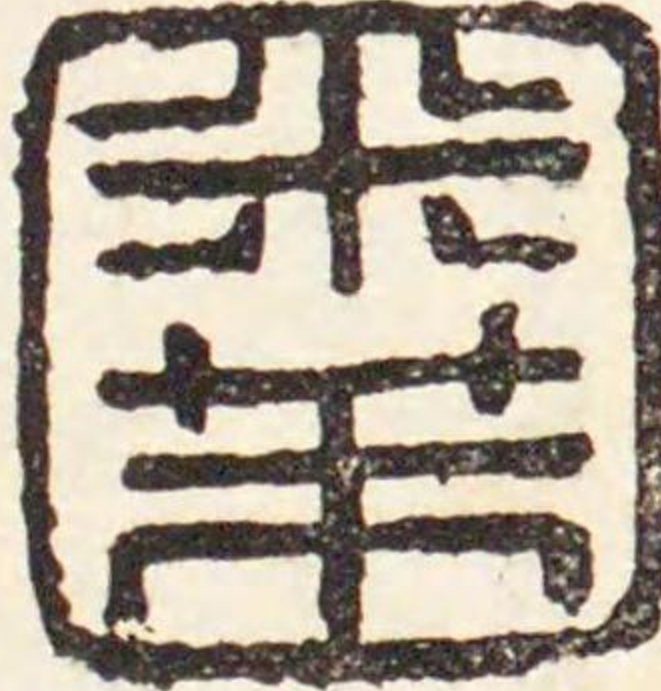
雲波

月滿

道傳

在在

卷第
書



此に載る米芾の書は竹聯に鐫りたり。何人の好事にて製りしや。嘗て骨董店より購得て文房の坐右にかよぐる事久し。憶ふに遺像在此の一語暗に予が擧を促して、襄陽子新に筆を潤すに似たり。はた千歳の奇遇とも謂ふべし。よりて自ら摸寫して首に辯す。抑肖像遺像の世に益ある少からず。はやく唐土にて殷の高宗は肖像をもて、賢相を得ること尙書に歴然たり。後漢の光武は物色して、嚴光を尋ること漢志に載す。肖像をもて、先聖を祭るは唐の開元八年に始ると學山錄にいへり。孔叢子の孔子無鬚、程子の一髮不肖の論は姑く置く、何れ孝子順孫追遠の便り無きにあらじと云爾。

凡例

一予古人を尙友するの餘り、上は王侯大夫より、下は山老野叟に至るまで、いさゝか名あるもの有れば、其の像を輯めて展觀して追慕の情を慰す。今その儒林中より僅に拾摘して初編とす。餘は嗣刻に充つる。

一此の書像を主として傳は賓なり。たゞ生卒ならびに一二條を擧げて止む。それも必しも遺文逸事を記すといふにはあらず。先子の叢談、或は畸人傳、その外諸書より抄記す。また碑誌正傳を附くるは文士作家の軌範を見るを要す。

一小傳平假名もて記すは童輩に示して、古人の言行を見て自勵の志を勸むを欲す。各家の著書目を記すは其の書に就きて學ぶの便りとす。文華を飭るは實を過るに嫌あり。幸に予が不文を咎むるなかれ。

一上標に半語隻字の眞蹟を摹寫するも、心畫の存する處、一斑をもて全豹を知るを欲す。印章花押は餘韻に備ふるのみ。

一次序は必しも年代をもて置に非ず。頗る類從附載して、搜索に便なるを主とす。

先哲像傳初輯目録

文 林名儒師傳
故老之屬

平	安	太	三	貝	伊	熊	中	林	藤
金	藤	宰	輪	原	藤	澤	江	讀	原
華	東	春	執	益	東	蕃	藤	耕	惺
	野	臺	齋	軒	涯	山	樹	齋	窩

宇	山	服	荻	新	中	伊	山	石	林
佐	縣	部	生	井	村	藤	崎	川	羅
美	周	南	徂	白	惕	仁	惕	丈	山
瀨	南	郭	來	石	齋	齋	齋	山	山
水									



先哲像傳

藤原惺窩

惺窩姓は藤原、名は肅、字は斂夫、惺窩は其の居所の號、また北肉山人と號するは、後鞍馬の邊、市原野に棲みし時、その近きわたりに妹背山と云ふ山あれば、よつて字を分ちて號とす。其の外柴立子、廣胖窩の號あり。初め僧たりし時、名は彝といひ、妙壽院と號す。中納言定家卿より十二世の孫なり。父を爲純といひ、世々播州細川村に食邑す。父兄共に戰死す。惺窩は永祿八年に其の地に生れ、幼より神童の稱あり。一旦髮を剃りて僧となり、洛の相國寺に入り、博く佛書を讀み、後其の非を悟り、遂に儒となり、専ら朱陸の説を奉ず。吾邦宋學の行はると、此の師に始まれり。名下空しからず、林羅山、松永昌三、那波活所、堀杏庵、菅得庵、その他諸賢みな此の門より出づ。また當時の權豪關白秀次を始め、金吾秀秋、直江兼續、石田三成等の軍將もみな、惺窩を師尊する事は德行

藤原惺窩

藤原惺窩肖像



藤原惺窩

藤原惺窩之章



北内山人



學力兼備の名賢なればなり。また和歌を善せり、次に一二を記す。後、元和五年九月十

二日卒す。享年五十九歳、洛の相國寺中に葬る。

○林羅山嘗て若かりし時、初て見えしに、惺窩和歌を詠じて與へられし、此の歌みな人の

知る處なれど、こゝに記す。都て儒者の詩文は常の事なれば、多くは略之、たゞ和歌

の如きは、調の高下はしらざれども、各家の傳下に見るまゝに記す。

なれよふじ雲の上までいや高き名のまことをもしかれとぞ思ふ

また元和五年惺窩卒年の春、夕顔巷と羅山別號を稱せし時、奇なる文字なりとて、假名

序并に歌を送らる。其の歌に、

たねしあれば心はおなじやまともからのうたにもゆふがほの花

なにかいやすいやしきちまた夕顔の花さへみさへ名さへなつかし

また赤松左兵衛佐廣通を悼む三十首の中に、

壁の中石のはこにもかくすべき世はなき道に文の名もうし

また石田三成母の喪に居るを弔ふ詩に、

一別靈蹤何處尋。壯夫亦是淚難禁。慈顏猶見屋梁月。涕慕秋深孝子心。

壁の中の歌
古文孝經の
故事、孔
安國の序、
魯恭王使
人壞夫子
講堂、於壁
中石函得
古文孝經二
十講章、云
々々

秀信、清洲の會議によりて信長の嗣となれる三法師
亞相、大納言の異稱
大佛、方廣寺の大佛
後、徳川氏との争因、豊臣氏滅亡の本となれるもの

○惺窩嘗て豊太閤を評して、「秀吉は大膽なる人なれども、大心なりとはまをすべからず。朝鮮より明に攻入らんとは誠に大膽なれども、秀信を信長あつと仰せられず、自立して日本を掌握せられしは大心にあらず」とまをされけるが、後にこの事を四辻亞相公理卿に語る人あり。亞相云く「吾も其の論尤なりと思ふなり。大佛建立は彼の猿ごころの離れぬなり」といはれしとぞ。

○惺窩の系圖因に此に掲ぐ。

御堂關白道長公第五子

長家 正二位權大納言康平七年十月九日薨年六十

忠家 正二位大納言寛治五年十一月朔日薨年五十九號三小野宮

俊忠 初名親家從三位權中納言保安四年七月二日薨年五十三

俊成 初名顯廣正二位皇太后宮大夫保元二年奉勅撰千載集安元二年九月廿八日出家法名釋阿元久元年十一月晦日薨年九十一

定家 正二位權中納言民部卿元久三年奉勅撰新古今集貞永元年奉勅撰新勅撰集法名明靜仁治二年八月二十日薨年八十三或云八十

爲家 正二位權大納言實治二年奉勅撰續後撰集正嘉三年奉勅撰續古今集建治元年五月朔日或云四月廿九日薨年七十九法名融覺

女子

爲相 正二位權中納言號藤谷

爲秀 正三位權中納言

爲尹 實家兄爲邦男正二位權大納言

持爲 初名持和從三位權大納言

政爲 正二位權大納言

爲孝 正二位侍從中納言

爲豊 初名爲名從三位侍從

爲純 初名爲房又爲能參議從三位

爲勝 初名俊孝正五位下左少將

爲將 從四位下左少將

爲景 正四位左中將實肅第一子爲將子承應元年三月十五日卒

肅 是乃惺窩也

嘉遜、隱遁の義に協へるをいふ
東邦、日本
冷泉、爲相の家
蟬蛻、蟬のけいづに脱し如く超脱し

○秋山玉山惺窩の肖像の贊あり。玉山集卷八に出づ、こゝに擧ぐ。

先生姓藤原。定家十二世之裔。名肅。字歛夫。後隱妹背山。因稱北肉山人。林信勝。那波道圓。堀正意。石川四。皆出於其門。有文集。行于世。北肉嘉遜。東邦儒先。質抱大器。派分冷泉。蟬蛻異教。喬木是遷。韓使奇相。前修比肩。

徵辟—任官
遡洞—歸向

門風高峻。群英萃焉。進退無恥。孰如厥賢。
また一齋先生、惺窩の像贊あり。愛日樓集に出す。

謝華胄而遐蹤。望白雲而獨臥。其衷也介然。而和沖。其貌也栗然。而溫藉。身辭微
辟。彭澤之儔。門出俊英。河汾之亞。矧乃開先于性天之學。與世而俱新。貽後乎典型
之言。歷年而遂化。於戲源深而流遠。俾人遡洞而上下。雖然誰能真遡洞哉。誰能真上
下乎哉。

○惺窩著述書目因に記す。學識のごときは成書に就て見るべき便ならんを欲するなり。
煩はしけれども、各家の著書傳下に載するはこれが爲なり。

- 四書大全頭書
- 勅板惺窩文集編集
- 惺窩續集編集
- 文章達德錄
- 假名性理
- 千代もと艸

惺窩文集編集

文章達德錄綱領

列子點

此の外なほあるべし、知る人に問ふべし。

○惺窩の事實は林羅山撰の行狀記あり。また某氏撰の系譜あり。其他先人の著す先
哲叢談等の書に詳なり。今長章は載るに暇あらず。宇都宮由的の略傳をもて左に記す。
前に出す假名もて記す生卒略傳は童子の看に供ふるのみ。重複を咎むるなかれ。

浮屠—僧侶
溟渤—大海
源君—徳川
家康
易簀—死す

先生姓藤原。諱肅。字斂夫。播州細川邑之人。定家十二世之孫也。父曰爲純。所謂
冷泉家也。幼穎悟不常。一旦祝髮爲浮屠。名曰薺。弱歲來洛之相國寺。居妙壽
院。後歸播。赤松氏善遇之。雖讀佛書。志在儒。一旦奮發欲入大明國。直到筑陽。
泛溟渤。逢風濤。漂鬼海島。其盛志不遂而歸。朝鮮員外郎姜沆。來客赤松氏家。見
先生大喜曰。「朝鮮三百年以來。有如此人。吾未聞之也。」赤松氏遣童男婢奴奉
仕焉。先生不拒。本朝儒者博士自古唯讀漢唐註疏。性理之學識者鮮。先生自据程
朱訓點經傳。其功最大也。元和五年五十九而卒矣。先是再謁源君。讀貞觀政
要。漢書。十七史等書。源君知其才德。然不待時發。遂易簀焉。其用與不用。命

先哲像傳

也。先生容レシヤ意其間ノニ乎。幼好ヨリミ學ヲ出ニ入於釋老ニ。閱ニ歷于諸家ニ。而後棄テ異學ヲ而醇如也。本朝中興之明儒也。其所著有スリ達德錄綱領。寸鐵錄。逐鹿抄及經書和字訓解。平生詩文和歌號ス惺窩文集。行ル于世ニ矣。

羅山

亨

道春

拜



林文敏公

林文敏公肖像



林文敏公

文敏公姓は林、名は忠、一に信勝といふ。字は子信、通稱又三郎、幼名菊松磨といふ。後、薙髮して、道春と稱す。文敏は謚號なり。羅山と號し、また羅浮、浮山、羅洞、四維山長、胡蝶洞、夕顔巷、或は雲母溪、尊經堂、梅村、花顔巷、麝眠とも號せしとぞ。其の先は加賀の人、後に紀伊の國に移り、父信時にいたり、平安に住めり。文敏公は天正十一年八月京洛の四條新町に生る。幼より秀偉、且又讀書を好みたり。八歳の時、甲斐徳本の太平記を讀むを聞きて、即記憶誦誦する數十枚に及ぶと云ふ。後、長じて惺窩に從事して、性命學を修し、遂に神祖の恩遇に膺仕して、天下萬世儒宗の基を開き、國初創業の議事に、あづかり聞かざるなく、四朝に歴仕して、學殖德行世の人みな尊尙する處なり。今上野山王臺の社地は文敏公の賜莊にて、昌平坂の聖廟ももと此の地にありしなり。後に元祿年に林家三世正獻公岡の時、今の地に移す。上野に今林稻荷あり。文敏公明曆三年正月廿三日卒す。享年七十五なり。其の葬式は朱子家禮をもて大家の別野に葬る。私謚して文敏先生といふ。

性命學—程朱の性理學
神祖—徳川家康
四朝—徳川氏
の四代
別野—別墅

黄門—中納言の唐名

柳營—幕府

○羅山年二十二の時すでに讀得し書目、儒經、佛書、神典の部數四百四十餘部に及ぶ。書目録は文穆公山の三男、撰める年譜に詳なり。其の苦學の様想見るべし。幼より老に至る、一日として看書を廢する事なし。歿年明曆の大火遁れ出るにも、なほ輿中にありて梁書に朱點を施しつゝ別野に至られしとぞ。

○水戸黄門義公の御字を徳亮といふ。これ羅山の定むる所なり。徳亮説の文あり、文集に見ゆ。また上野賜莊の十二景を定む。因に記す。

神廟	神風	神杉	金城	初日	靈池	皓月	下谷	耕田
南鄰	菅祠	東海	征帆	武野	煙艸	淺草	花雲	
筑波	茂陰	隈田	長流	房陵	遠山	士峯	晴雪	

○惺窩、羅山の二先生、東藩をさして、柳營とし、將軍を稱して大樹といふ。名實相かなへり。誠に文字を識りし儒といふべし。余二十歳の時東にあり、世人唐詩選を讀むを知りてより、詞語宏麗をもて貴び、動もすれば丹鳳、城青、瑣闥等の語を用ゐて東藩のこととす。人の無知かくのごとき者ありと、原漢橘窓茶話に見ゆ。いかにも稱呼は名實にかよはりて後世の信をとるなれば、文華文華なくとも正しくありたきなり。近世は此の弊薄

物門一物祖
徠の學徒

し。予が曾祖父、雙桂先生も嘗て此の事を論じて云く、譯文筌蹄の題署などに武陵と書たり、左様の事甚非なり、定めて東都は武藏の内にて、武藏の武の字一字同じきによりて牽合し、借り用ゐて、題署せしならん、左あらば武陵の外にも武昌、武清、武平、武進、武宣、武城、武綠、武定、武邑、武鄉、武涉、武安、武功、武隆、武寧、武當、武岡、武康の類みな唐土の地名なれば、手前物好次第に借り用ゐてよろしからんや、面々の物すき次第に借り用ゐるば、江戸に定まれる名はあるべからず、左あらば亂名にあらずや、すべて物門の徒のなせる事多くか様のことなりと過庭紀談にあり

○羅山著す書籍の、目錄因に記す。

- 東鑑綱要
- 大學要略抄
- 四書五經要語抄
- 三略諺解
- 寛永庚午御即位記
- 儒門思問錄

- 群書治要補
- 大學大旨
- 論語摘語
- 貞女倭字記
- 陣法抄
- 姫君婚禮記

御入洛記

荒政恤民錄

聖蹟圖諺解

東照宮二十五回御忌記

増上寺法會記

武州王子社緣起

皇代系圖大綱

京都將軍家譜

豊臣秀吉譜

本朝編年録

御元服記

仙鬼狐談

老子抄

聖賢王談

倭漢法制

無極大極説

東廟新廟記

東照宮三十三回忌

大樹寺法會記

神代系圖

鎌倉將軍家譜

織田信長譜

中朝帝王譜

寛永諸家系圖傳

日本大唐往來

怪談

大學抄

愚惡王談

貞觀政要抄

歷代三十六名臣圖贊

論語解

三德抄

理氣辨

渾天儀考

周易手記

經典題說

古文孝經抄

格物端緒

歷代一覽

童觀鈔

攻堅從容錄

經籍和字考

漢魏六朝唐宋百人一首

大學解

中庸解

孟子養氣知言解

六義考

春秋劈頭論

性理字義諺解

經典問答

通鑑綱目首卷手抄

歷代系圖

卮言抄

格言隨筆

任筆百問

長恨琵琶抄

文選序表考

吳子抄

尉繚子抄

太宗問答抄

劍術諺解

棠陰比事抄

公言抄

袖裡唐絕

本艸序例注

南人言稿

蒙求龍頭

聯珠詩格抄

明人集略抄

羅山涉獵抄

白氏文集首卷注

孫吳摘語

司馬法抄

六韜抄

軍書題說

百戰奇法抄

鐸恤錄並摘語

折獄抄

百川學海抄

多識編

古文眞寶抄

後素說

陽明攢眉

漫筆

梅村載筆

朝鮮考

異國往來

駿府日記

二條城行幸私記

禁中故事

神社考

神書私考

神道傳授抄

伊勢内外宮勘文

筑波山緣記

日本祖師傳

倭漢詩歌合

野槌

日本考

朝鮮來貢記

東照神君年譜略

慶長以來法度

武家十九條法度記

裝束記

神社考詳節

中臣祓抄

神道祕訣

寺社證文

河越天神緣記

本朝一人一首

詩文機緣

職原鼈頭

職原抄神祇大政官注

惺窩集

宇多天皇紀略

明德軍志

鐘銘纂

日本事蹟考

武門姓氏考

源氏物語諸抄年月考

禪林家集年月考

四書集注抄

道統小傳

怪談全書

丙辰紀行

韓使贈答聯句

惺窩問答

倭鑑乘車

源平綱要

軍陣行列

庖丁書錄

倭雅

二十一代和歌集年月考

近代雜記

寬永私記

老子經首書

本朝書籍考

有馬溫湯記

癸未紀行

武將傳

百將傳抄

寸鐵錄

儒仙

蒙求官職考

七書講義私考

論抄

羅山詩集

此の外訓點を附けし書目は

四書集注

周易本義

公羊傳

國語

周禮

孝經

春鑑抄

詩仙

武仙

駿府政吏錄

二禮諺解

羅山文集

羅山集附錄

五經

書經集註

穀梁傳

戰國策

儀禮

老子口義

五經大全

古文眞寶

神道祕傳折中俗解

羅山集詩文ともに各七十五卷づつに定められしは、先生の年齢に準じて春齋先生の用意なりし。

○羅山下總の古河に至りし時、舊城主土井大炊頭利勝公を憶ふ詩あり。偶おもひ出すまま此にしるす。

三代執權名久垂。威風唯要斷謀貽。一時占得黃梁夢。蓋世大炊纔一炊。

○羅山の事歴は春齋撰める年譜、また先君子著す叢談、宇都宮氏撰ぶ羅山小傳、稻葉氏の墨水一滴、其の外の諸書に詳なり。長文なればこゝに擧げず。近年刻行の近世叢語の文を掲ぐ。角田簡撰著。

林羅山名忠。一名信勝。字子信。其先加賀人。後徙紀伊。及父信時來住平安。羅山生而神彩秀徹。年十四。讀書乎東山僧房。時屬喪亂。書籍甚乏。乃百方索借。諷誦每達曙。緇流碩學輩試問疑義。則娓娓剖析。厭厭飲其心。皆稱爲神童。及長英邁絕倫。有曠世之才。益馳騁百家。凡有字成冊者。無所不闕。究其浩瀚而反諸六經。

謀貽遺されたる謀
黃梁の夢
盧生、邯鄲の途上、黄
梁一炊の間
その榮達を
夢みたりと
の故事
緇流僧侶

洛閩之學—
程明道、周
濂溪の自唱
せる性理の
學

咨諏—事を
問ひ謀る

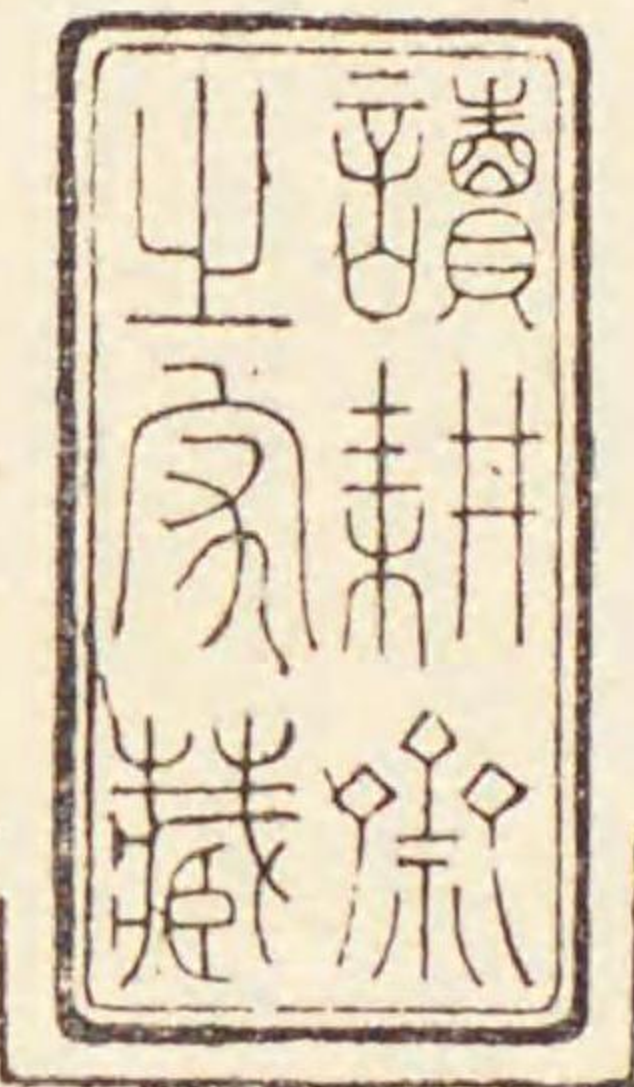
嘗言。「漢唐以來之文字皆有原。等而上之。大要歸乎六經。唯六經文字無所原。道固在此。」又言。「後世能得六經之旨者。唯有程朱之學。今日異端外說又壅塞之。是不可不力闢焉。」遂銳意以興洛閩之學。自任開門聚徒。說四書新註。從聽者雜選矣。是歲甫踰弱冠。有弟曰信澄。亦就受業。是時學湮日久。民間無挾册者。故遠近駭異。傳以為奇事。舟橋三位秀方詬羅山曰。「今匹夫而居師道之尊。叨倡朱學。其僭甚矣。」遂論列請罪之。廷議為然。以告東照大君。大君曰。「固哉舟橋氏。匹夫而倡道。實可嘉尚焉。且也學問以道通理明為主。何必固守古註。於是羅山之學大行。當是之時。有惺窩先生。隱于洛北。既倡理學。羅山景慕為弟子。惺窩亦以為得人。傾倒不遺。推為高足。東照大君雅聞羅山名。時邀咨諏。慶長十一年。使永井右近大夫直勝聘之。擢為博士。以備顧問。深嘉其博物焉。後薙髮稱道春。叙民部卿法印。羅山際國家創業之時。大被寵任。創朝儀。定律令。幕府所須文書無不經其手者。歷仕四朝。即位。改元。行幸。入朝之禮及宗廟祭祀之典。外國蠻夷之事莫不預議焉。正保中病在家。執政承旨寄書。或就論事。令官醫看病。是時有事日光山。召見便殿。特聽乘輿入城。有旨以其

祝髮—剃髮

齡漸高。令朝朔望。明曆三年。年七十五而卒。私謚文敏。羅山強記宏覽。自少注心於著作。到老不衰。所撰著編輯凡一百三十種。又有羅山文集一百五十卷。刊行于世。羅山有四子。長叔勝。次長吉。皆早夭。次春齋嗣。次靖。字彥復。祝髮稱春德。博學多著作。亦仕大府。寬文元年以病歿。年三十八。以下有春齋風岡二傳。今不錄于此。

林讀耕齋肖像

讀耕齋之家藏



林讀耕齋

讀耕齋林氏、初め名は守勝、字は子文、通稱右近といふ。後に名は靖、字は彦復、また祝髪して春徳と稱す。函三子、考槃過、讀耕齋、欽哉亭、靜廬はみな其の別號なり。羅山先生の四男にて、春齋先生の弟なり。母は荒川氏、寛永元年十一月二十一日、京都に生る。後江戸に來り、才徳父兄に減ぜず。春齋と共に幕府に奉仕す。羅山著書中、春齋、春徳の兄弟多く興りて功ある者枚擧に暇あらず。寛永二十年、朝鮮信使と筆語唱和する父兄と同じく、名を異邦に轟かす。正保三年十二月、別に召されて、俸祿を賜うて、兩林家となる。此の時二十三歳なり。羅山先生もこれを愛する春齋に齊し。初め伊藤氏を娶り、一男二女を生めり。後石川氏を娶る。一男を生む、また夭す。讀耕齋三十三年の時母荒川氏に別れ、翌明曆三年正月、父羅山先生長逝す。羅山行狀は春徳先生の撰文、年譜は春齋先生の撰文になる。又羅山文集百五十卷は兄弟二先生の搜索して上木する處とぞ。春徳先生の子、名は憲、後に春東と稱す。春徳先生寛文元年、病んで卒す。享年三十八、私諡して貞毅先生と云ふ。

○春齋先生二子あり。長子を春信と云ふ。勉亭とも、梅洞とも號す。次は鳳岡先生なり。皆讀耕齋の猶子なり。梅洞才學ありて、父祖に類すといへども、年二十三にして卒す。著述の書多し。然るに才學天性によるといへども、讀耕齋の教諭によるものなり。さればこそ朱舜水撰める勉亭林春信碑文に云へるあり。

就季父讀耕子學。季父視之猶子。勤勤督課。如秋題百品藝餘千題。或押難和之韻。或限刻燭而成。無不揮洒立就。時髦廢和。郵笥往來。於是聲名藉甚。とあり。勉亭もまた其の恩に感じて、讀耕齋の死後は其の孤子を撫養して、教諭の恩を報ゆる趣も同文中に見ゆ。

○讀耕齋の才學父兄に減ぜず。故をもて世人羅山を蘇老泉に比し、春齋を蘇軾、春徳を蘇轍に擬して、老林、中林、叔林と稱せしとぞ。因に云ふ、羅山の同母弟永喜東舟と號し、德行學術また高し。故をもて明道伊川兄弟に擬せしよし、先人の叢談に委し。國初文運の機に向ふといへども、かく藝學一家に起り天下の儒宗となる、また一奇ならずや。

○讀耕齋著書目

考槃餘錄

平聲廣韻略

本朝遼史

八人一筆

中朝帝王譜

本朝編年錄

靜廬客談

聞見錄

和漢補袞錄

甚齋漫筆

守處稿

讀耕齋文集

○讀耕齋の略傳系に

讀耕齋先生文敏公羅山先生之第四子也。寛永元年甲子十二月二十八日夜半強。生於京四條新町。乃祖名之曰右兵衛。母荒川氏。四歲始歩。且知正之字。文敏先生抱先生對門人曰。是膝上王文度也。文敏先生在東武。以荒川氏之慈育爲長。後稱右近。同十一年。移東武。雖幼不求仕官。十四歲潛志於學。其名漸著。同十六年己卯。文敏先生授名曰守勝字子文。授號曰函三。名亭曰欽哉亭。自號考槃。又號剛訥子。或稱靜廬。又甚齋。後專用讀耕齋之號。是乃文敏先生壯年之時。刻印押書之號也。正保二年文敏先生授一名曰靖。字彦復。同三年丙戌。膺召。雖不素志。官命無如之何矣。十二月九日。登營奉拜。猷廣賜宅地年俸二百俵。祝髮號春徳。慶安三年庚寅。娶水戸侯傳伊藤立蕃頭友立女吉子。承應二年癸巳。蒙命登日光山。明曆二年丙申十二月。敍法眼。同三年。加賜食祿。通前五百石。萬治二年己亥。繼室以石川氏。同四年辛丑。罹病。三月十一日卒。年三十八。謚貞毅先生。

王文度一晉の人、弱冠にして重名あり、都超と共に桓温の長史となる、時人語つて曰く、盛徳彬々都嘉賓、江東獨歩王文度と法眼一僧位法印に次ぐ

博文強記。舉世稱之。其性嚴毅。不枉屈人。對文穆先生。有悌。愛春信兄弟。如子。所著有八人一筆。平聲廣韻略。和漢補袞錄。聞見抄。本朝編年錄。中朝帝王譜。處守稿。讀耕集之書。水戶義公眷遇甚厚云。有二女二男。女及季子皆殤。男曰春東。幼名又助。文穆春齋先生名之曰勝澄。一名憲。字章卿。號晉軒。或號洗林。承應三年甲午四月七日。生于乃祖之宅。未幾喪母。以祖母順淑孺人之慈育爲長。萬治四年辛丑。喪父。文穆先生慈愛教育益厚。同年十二月十日。登營。賜父祿。繼業。寬文四年甲辰秋。奉謁。同九年己酉。預通鑑編修之事。同十年庚戌。畢事。賜官服。同十二年壬子冬。娶清水氏。延寶四年丙辰十一月九日卒。年二十三。平生虛弱多病。所著有梧右錄。拾葉餘錄之書。

通鑑本朝

石川丈山肖像



六六



日支山

六六山人



石川丈山

石川丈山

丈山石川氏名は四、字は丈山、初名は重之、俗稱三彌といひ、後に嘉右衛門といふ。號は數稱あり。六々山人、四明山人、凹凸窩、大拙、烏鱗、山木、山材、藪里、東溪、三足ともいふ。三州の人也。其の先は源義家公より出る。父を信定といふ。丈山天正十一年に生れ、幼より岐嶽、よく二歳の時の事を覺え居たりしとぞ。また四歳にして行程一里餘を歩行せり。世々大樹に奉仕して、丈山も祿五百石を食して、駿府にて御小姓役を勤め、元和の役に御使番を勤む。此の時功名ありといへども、軍令に違ふ事ありて、暇を賜り、叡山の麓一乘寺村に棲遲して、本邦歌仙三十六人に擬し、漢土の詩人三十六人を撰み、各其の像を板面に圖し、其の作る處の詩を其の上に書して、壁にかよけ、詩仙堂と號す。六々山人の號はこれに縁れり。これより都て文筆をもて樂みとし、藤惺窩、林羅山、堀杏庵、埜士苞、また僧元政等と風流の游事を專とす。尤詩に長じ、隸書に工なり。韓使賞して日本の李杜と稱す。寛文十二年五月二十三日卒す。其の地に葬る。享年九十。

岐嶽—幼者の卓異なること
大樹—將軍御小姓役—殿中近侍の侍

肥遁—終をよくして退隱する
瀬見の小川—鴨川

紈素—白きれりぎぬ

行藏—進退縮褐—寬き衣服—年八十—遁世逸民—遁世隱居の民

○丈山肥遁して後は、和歌を詠じて、京師に入らじと誓ふ。夫より洛陽に來らざる二十餘年なりとぞ。其の歌に、

渡らじな瀬見の小川の淺くとも老の波そふ影ぞ恥かし

また詩集を覆髻集と云ふ。開卷に富士山の詩あり、人口に膾炙すれば、こよに記す。詩中白扇の文字に難あるよしは、予が會祖父の過庭紀談に辯あり。其の詩に、

仙客來遊雲外巔、神龍栖老洞中淵、雪如紈素烟如柄、白扇倒懸東海天。

實に富山の形容見るごとし。また集中に秀吉關白扇銘。應前田卜牛之求。後陽成院御製書扇。賜秀吉公爲伐韓餞。と按ずるに達意の文これよりよきはなしと南畝云へり

けにもと思はる。

○丈山、任某に與ふる掟書と云ふ七箇條の中に、武士の道日夜に忘れ候はで何時も人の跡になり候はぬ様にと心掛可申事、また萬事につき欲すくなく、清廉を心に持可申事とあり。これ丈山生涯の行藏此の二ツにかなへり。空言にあらす。

○此の肖像は丈山の壽像、畫者は狩野探幽なり。上に丈山自題あり、其の語に、如意隱几。縮褐烏巾。默々霄貌。昭々精神。交游造物。涵養道真。八秩頑老。三陽逸民。

斬馘—敵の首をきる
募縁—喜捨を求む

自竄—自身を隠す
嬰城—城を守る
驅扇—煽動

逸民爲誰。六々山人。

○愛日樓集に丈山を夢むる詩竝に敍あり。尤も確論と云ふべし。

參人石川丈山晩屏居洛東。琴書自託。蓋若與世相忘者。余嘗疑。君初從浪速之役。私出斬馘犯律見黜。是時年既三十有三。宜不效血氣者之爲。又與其生平不相類。是必有故也。余久畜之未釋。今茲文政庚辰之春。其故居詩仙堂主尼別宗將修堂宇。來江戶募縁。以明年值君百五十年忌辰也。季秋二十三日尼偶過。余慮是夜余夢見一偉人。厖眉白鬚骨相不凡。自云六々山人。余乃以前疑質之。翁笑而不答。第曰。「自効耳」。余難之曰。「迹疑乎貪小功。其爲自効也奚若」。翁憮然。既而曰。「今則吾語汝。昔者泰伯以民無稱爲至德。吾雖所不敢企。而志則有在焉。彼其叛逆孤城衆志不一。其不勞智力而下之誰不知。而必恃此匹夫小勇乎。吾但欲負微罪以去之耳。蓋參河動舊何限。率知求封侯極富貴。而無復一人爲國自竄。以幾察兇賊者。汝不知乎。嬰城之衆不獨豐公之遺臣。而兇奸不逞之徒爲多。雖在統一之後。而保無餘孽殘黨驅扇唱亂者乎。吾之所爲自竄竊欲陰察之以効涓埃。而其有無亦不可度也。不幸或有變。則吾將先赴告爲之防禦。幸而無事。則高尙其蹤以超於埃壙之外。其官西州居洛東。皆爲此。而凡欲爲人之所不爲以自効。吾不效。夫徒斬榮達以爲子孫計。而況人之知不知惡足問焉哉」。言畢而夢則覺矣。噫嘻君之靈格於夢寐。以誘吾之衷者乎。雖然夢焉耳。烏得憑焉以爲證乎。但以其事極奇。覺而記之。且詩以言其略。詩曰。

時維文政歲庚辰。秋夜讀書剔寒燈。忽然夢遊洛水表。有堂傲然倚峻嶂。中有九十皓眉叟。撫琴長嘯超凡塵。顧我一笑相延晤。自言六々舊山人。試舉疑案相叩問。翁敍衷曲。廻云々。旃蒙單闕征小腆。蕞爾孤城豈足爭。犯律獻馘負微罪。欲爲國家作游偵。眞忠自甘人不諒。無心利達與聲名。一朝有變吾先識。無則清高終此身。心事生前曾不道。今吾肝膽爲君傾。須臾風來吹短鬢。夢斷茫然夜五更。嗟乎夢乎非夢乎。眞乎非眞乎。嗟乎。世道遞變化。古今幾廢興。竟是寄在榻々頃。醒後人間猶未醒。

○丈山著書目錄

詩仙
詩法正義

朝鮮筆語集
覆醬集

本朝詩仙注
覆醬全集

峻嶂—高く大どかなる山の貌
旃蒙單闕—乙卯小腆—小さき團鉢
榻々頃—少時の會心をいふ、莊子に、夢爲蝴蝶、榻々然

東溪翁隸法

祝壽長篇

○野間三竹撰す、墓誌銘に、

公姓源氏石川諱重之始號嘉右衛門後改左親衛一諱四字丈山六々山人其別稱而世三州人也清和帝七世孫源義家第六子左兵衛尉義時號石川是廼石川之所自出者也義時十五世孫大炊助信貞仕源長親君君者東照大神君之高祖而信貞者公之五世之祖也信貞生信治信治仕神君之藝祖清康君攻尾州熊谷城而有軍功矣子正信仕神君之皇考贈亞相廣忠君與今川義元攻三州安城而拔焉正信先登君賞之賜長吉之佩刀而後奉仕東照大神君戰死長久手其子信定屬石川長門守攻駿州田中城被衝左股奪其槍矣信定有三男二女長乃公也公幼而岐嶷四歲而健步行道里餘穎敏過人能知二歲之時事十六歲而奉仕神君常陪侍左右恩遇異常元和乙卯夏五月秀賴反神君至難波自帥師征之公至戰伐之日而獨犯軍令竊出營中而先登矣岡山之戰交松被創又至城門與敵人佐々某者及從者力戰遂獲二人首班師之後屏居洛河與羅浮子杏庵立同等爲騷雅之交而后親炙北肉藤先生得聞聖賢道學之風始學禪教後

藝祖—祖父

騷—夢詩文の風流

濫觴—原始

粉黛—婦人

芻豢—牛羊豕の類

私淑—竊に慕ひ摸ふ
浣花—杜甫

儋石—少しの儲蓄

捨異學而醇如誠卓乎非文武雙才邪母老家貧遊宦西州其臨將行謂羅浮子立同子曰此行也豈素志宿心哉母終天年則身將退不敢食言矣公事老母至孝居有年老母歿居喪盡哀服闋而後捨官歸洛遍尋名山而遂肥遯臺嶺之麓一乘之邑凹凸窩中築詩仙堂於其中撰漢晉唐宋作者三十六人而畫之揭之蓋擬諸我邦之歌仙是廼詩仙之濫觴也羅浮子爲之記園中境有十景有十二羅浮子洎向陽讀耕賦之詩而後公詠和歌而再不渡鴨河再不入京師頗彷彿律指門前之桑況又一生不近粉黛亦無有妻孥人以比諸元魯山三逕塵除半夜燈閑淡泊寡欲一裘一葛未敢取于人其行己也剛而直廉而潔其嗜學也如食芻豢四十年來杜門養痾未嘗接俗士未嘗問俗事所交遊者僅六七人余亦在其列洽聞博記搜討無遺特巧詩律而筆端高妙私淑唐體而得浣花之髓奚翅當世之宗工鉅匠而已我邦自有一皇子咏以降言詩者數十百家之中不見出公之右者矣寬永丁丑韓客來朝與學士權儀筆語試一讀其詩爲日本之李杜有是哉外國之人之賞之也厚好之也深圖書堆案家無儋石胸宇廓然無所得安貧樂道俯仰無愧誠飄々淳靜好古之隱君子也素能隸書羅浮子曰一如隸書也者

貴介達官—
貴人高官
不佞—卑自
の稱

本邦所_レ未_ニ嘗_テ見_ル者也_ト其平生吟稿曰_ニ覆醫集_ト行_ニ于世_ニ今茲春夏之交_ニ臥_{シテ}床而不_レ起_タ臨_テ終_ニ謂_ニ其左右_ニ曰_ク結_ビ纓_ヲ易_シ簪_之志未_ニ嘗_テ忘_ル焉_ト端正如此_ニ嗚呼悲哉_イ西山之日已迫_ニ寬文壬子夏五月二十三日_ニ日將_ニ晡_ニ而端坐而逝_{シテ}享年九十歲_ト貴介達官識與_ル不_レ識_ラ無_シ不_ニ哀_惜焉_ト歛_{シテ}葬_ニ其處_ニ其地_ニ村民會葬者百有餘人_ト其平生之惠之所_レ及_ニ不_レ言_ハ可_シ以_テ知_ル焉_ト門生等來告而請_フ誌_及銘_ヲ不_レ佞_ニ不_レ佞忘年之交數十年所_ト何敢辭_ハ涕泣筆_ス之_ヲ且係之以銘_ヲ銘曰_ク
有_ニ器識_ト居_ニ林巒_ニ安_ニ義節_ト泥_ニ蟬冠_ト
懿_{ナル}哉_{ナル}德_ト天地寬_シ

詩云
綠臺
黃鳥
止
隅
之
名

中江藤樹肖像



中江藤樹

藤樹中江氏、名は原、字は惟命、通稱は與右衛門といふ、江州高島郡小川村の人なり。藤樹と號し、また願軒、嘿軒ともいふ。慶長十三年に生れ、幼より書を好み、十一歳大學を讀みて、發明する事あり。それより勤學怠ることなく、遂に我が國に初て陽明王氏の學を倡へ、篤學修行をもて、其の名海内に著る。弱冠にして豫州侯に仕へたりしが、後に母の故をもて致仕して、家に歸り、講學して孝養を盡す。世俗その德行を崇んで近江聖人と稱す。熊澤蕃山も此の門に出づ。其の外英才の人多く諸國より聚り、別に居を構へて、學びたる處、今に某々の所は誰某の居のあとなど言ひて、名所故跡の様に言なせりとぞ。藤樹歿後、門人三年の際、心喪を勤めんとせしかども、領主の許なく、各悲歎して、吾々の誠のたらぬより、許されざりしとて、泣々其の地去りしとぞ。弟子の心醉はさらなり、馬卒の廉直に化せし話東遊記にも載す。郷里の風俗は、道路にて遺物を拾はざるに至りしとぞ。慶安元年秋八月、病んで卒す、其の地に葬る。享年四十一。

○藤樹の歌

降ると見れば積らぬ先に拂へたど風吹く松に雪折はなし

また門人熊澤蕃山の歳晚備前に還るを送れる詩に、

舊年無幾日、何意上旗亭。送汝雲霄器、羞吾犬馬齡。梅花鬢邊白、楊柳眼中青。惆悵滄江上、西風教客醒。

蕃山後に師説に背く事多し。よりに藤樹の門人清水氏これを辯じて、集義和書顯非を著し、熊澤が言行學術著述にひがこと多きをことくくのべて刻行す。

○近江小川書院は十七間四方領主分部侯よりの除地にて、月六回程づつ講書あり。領主の儒臣これを勤むるよし山田氏筆記に見ゆ。また講堂に藤樹の深衣の像あるよし東遊記に載す。今こゝに出す肖像は京師某の珍藏にて、其の先人は藤樹に親炙せし者の圖せしよし、却て講堂の像に優れりとぞ。

○藤樹著書目

學庸解
論語鄉黨翼
藤樹規

翁問答
大學啓蒙
持敬圖說

鑑草
大學考
原人

孝經啓蒙
論語解
文錄

雲霄器—大なる才能
惆悵—うらみいたむ

除地—除きて年貢を取らぬ地
深衣—支那の儒者の服

書翰

日用要方

捷徑醫筌

知止歌小解

詠草

小醫南針

藤樹先生遺稿

心學文集

春風

神方奇術

藤樹先生行狀

江西文集

大乙神經

醫筌

藤樹先生學術旨趣大略

○藤樹の事歴は年譜其の外藤井臧撰傳に詳なり。今松崎堯臣撰す記事を記す。

中江原字惟命。號西江。又號藤樹。江州高島郡小川人也。自少讀書頗有所發明。

世以德行稱焉。其學宗王伯安。凡海內之王學原倡之事。母至孝。弱冠初仕大洲

侯。侯信道德特登庸。於是欲迎母以就養。母曰。吾聞婦人不越疆願守之。原乃

上書侯。請歸田里。終奉養不許。喟然歎曰。嗟忠孝不能兩全。吾雖不肖。豈一

日曠定省乎。即爲書。白不忍之情。忽行歸。小川事母能盡其力。无所不至

矣。其心謂莫百爾德行不本於孝。日先讀孝經。而後涉他書。大洲士庶不遠千里

來學。他自遠方來游者不可勝計。鄉人親之如親。尊之如神。一鄉皆誦論語孝

經。勉事孝悌。小川市橋君采邑有一民連坐繫獄者。親裁來原許。悲傷請達。寃邑宰

宥焉。原曰。若狀不死然予爲汝明旨。夜抵邑宰。邑宰倒履迎之。設宴飲酒

王伯安王陽明

定省昏に父母の祚席を定め、長にその安否を省ること

采邑領地連坐まきぞへ

先塋祖先の墓々々恭敬の貌

仰止仰ぎ見ること
色愉顔色を愉快にして仕ふ

樂甚。夜半乃還。歐明邑宰免鄉民。小吏問曰。何以急免鄉民。對曰。以昨先生來也。

吏曰。先生前夜賞風月已未嘗及彼。曰。先生无至官舍。而夜間來閑談。余謂必此

事而終席不及之鄙心感慨知必爲此故也。彼本小罪。它日出之。則無報先生。故

爾。人尊崇如此云。著孝經啓蒙。翁問答。又有書簡一卷。慶安元年秋八月卒。年四十

一。鄉人如喪父母。葬于先塋之側。題曰藤樹先生之墓。造祠廟。邨老主之。四時祭

祀。一諸侯駐駕門外。令村老闢門。不肯曰。凡謁。庶者違。庶門數百步。下輿。蹙々

入拜堂下。無貴賤一矣。今接肩輿石砌。曰闢戶甚倨。非交神道。不奉命。侯

謝。過請入。曰。晚矣。願再卜日。急去不顧。鄉人仰止如此云。

○藤井懶齋撰傳銘曰。

淡海吹起。

爲母顛祿。

陸王儒風。

旋鄉色愉。

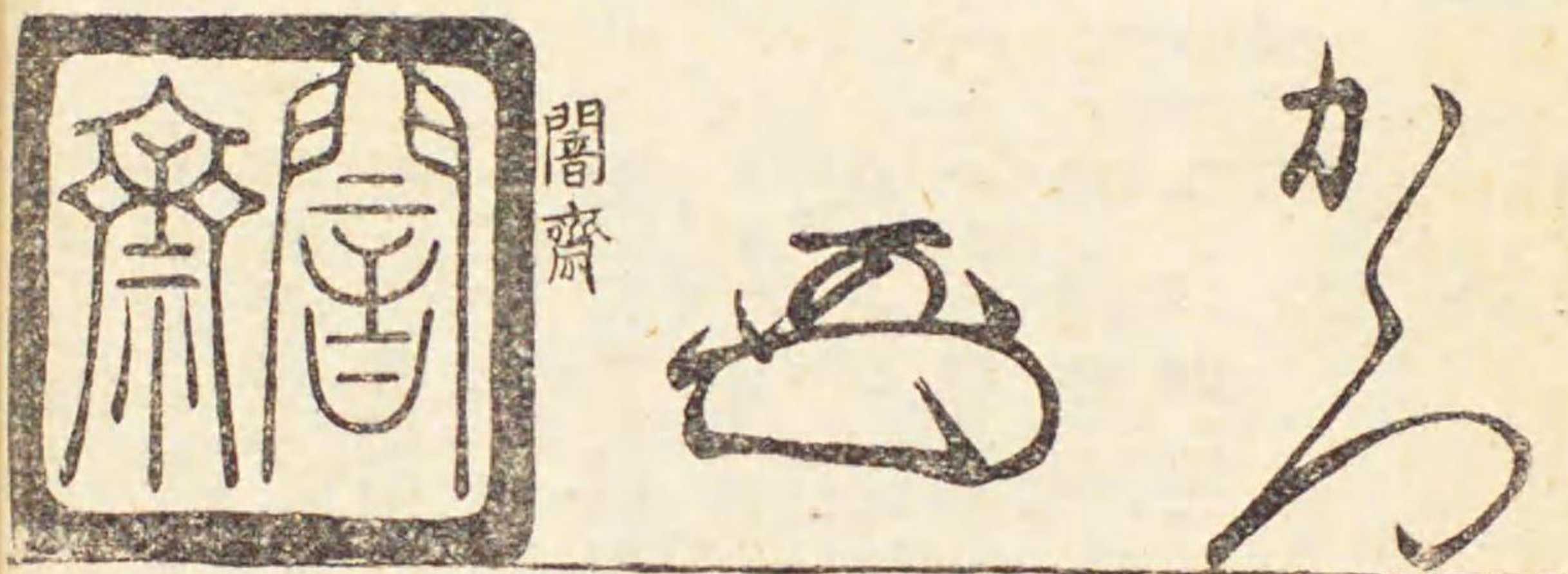
豈翅善身。

于嗟篤孝。

誨人有忠。

性乎學乎。

山崎闇齋肖像



山崎闇齋

闇齋山崎氏、名は嘉、字は敬義、闇齋と號す。後垂加と號す。俗稱嘉右衛門といふ。其の先は播州宍粟郡山崎に住む、よりて氏とす。父を山崎淨因といひ、醫をもて京師に住す。母佐久間氏嘗て比叡山の神に祈りて闇齋を産む。元和四年に生れ、幼にして狡猾無頼なりしかば、父うとんじて、妙心寺に遣りて、僧とす。絶藏主と號す。或日、佛堂に在りて、看經し、俄に起つて、大に笑ふ。師駭きて其のよしを問ふ。答へて云ふ、釋迦の虚談を笑ふといへり。長ずるに及び、四方に遊び、土州吸江寺に寓す。時に谷時中儒經を講ず。遂に兼山、三省の兩先達に就て儒を學び、忽珠子を擲つて鬪異と云ふ一書を著す。土州の太守其の浮屠を詆る甚しきを見て、これを憎む。此に於て、闇齋洛に歸る。後加藤侯、井上侯、また會津侯に游事す。晚年また神道に歸し、これを弘む。これより垂加の號あり。垂加の文字は神道より出づるとぞ。學ぶ處其の奥義を極めざるなし。遂に此の道中興の祖となる。天和二年卒す、享年六十五。其の門人私謚して垂加靈社長命と稱す。葬墓は黒谷にありて、山崎嘉右衛門敬義墓と題す。

看經—經文を默讀する

浮屠—佛

伴天連—基督教の宣教師

○闇齋初め佛に入り、後儒となり、最後に神道を修す。されば伊藤仁齋嘗て云ふ、「闇齋僧を厭ひ、儒に歸し、晩年神道を主張す。もし此の人長壽ならば、つひには伴天連とならん」と評せしとぞ。此の論は春臺も云へり。いかなる深味あるかは知らねども、大儒に似合す特操なきやうに思はる。

○闇齋門人に接しては少しのあやまちも許す事なし。講談の折から鵜飼金平はさみもてあそびつゝ爪を切る。闇齋是を見て、聲を勵し、「師席にて爪を切る、何の禮ぞ」と、金平はさらなり、有あふ人々色をうしなへりとぞ。

○闇齋五六歳の時群童と遊ぶ。あるひと菓子を出し、「兒輩吾ために藝盡しせよ」と云ひければ、何れも或はうたひ、または舞ひなどして其の菓子を請ひ得たり。闇齋獨り大いに泣きけるのみ。よりにて其の人諭して云ふ、「兒とどまれ、汝にも與ふべし」とて菓子を出しければ、首を掉りて云ふやう、「吾はこれが爲ならず、人みなその能する藝あり、吾獨りなし、こゝをもて泣く」とありしかば、其の人歎異して、「これ凡童にあらず」と云ひしとぞ。

○闇齋著書目録に

同 續集

關異

孟子要略

小學蒙養集

中和集說

大家商量集

刑經

程書抄略

冲莫無朕說

大和小學

溫泉遊艸

江府紀行

會津風土記

中臣祓風水草

同 拾遺

四書序考

朱易衍義

孝經外傳

逐錄

讀書要

武銘

明備錄

本朝改元考

孝經刊誤附考

敬齋箴

遠遊紀行

責沈文

日本書紀注

垂加文集

文會筆錄

大學啓發集

仁說

孝經詳略

逐鹿評

夜寐箴

帳書抄略

朱書抄略

經名考

雲谷記

不自棄文

再遊紀行

朱子輯要

神代卷風葉集

本朝事蹟異稱考

○此の外訓點の書目

四書

近思錄

周子書

社會法

朱子訓子帖

神代卷

城南雜錄

感興詩注

白鹿洞書院揭示集注

喪禮儀略
自從抄

孝經

周易本義

論孟精義

拘幽操

朱子訓蒙詩

古語拾遺

五友詩

小學

大極圖說

學規

朱子奏劄

山北紀行

洪範全書

○閣齋の事歴は山崎家譜 自記 また大高坂季明の撰傳 水足安直の撰行實 何れも長文の略す。角田簡の略傳に、

山崎閣齋名嘉 字敬義 京師人 其先播磨宍粟郡山崎邑人 因以氏焉 父清兵衛 臣木下家 後致仕 號淨因 來家京師 以醫爲業 母佐久間氏有娠 祈比叡山神 一

夜夢拜神時 老翁携梅花一枝 來納左袖 遂生男 卽閣齋也 閣齋幼狡悍無賴 淨因患之 因度爲僧 籍於妙心寺 號絕藏主 天資豪邁卓犖 一意修禪 無懈怠 然性行猶不悛 嘗與倫輩論議 閣齋詞理塞 卽其夜竊就彼寢 火紙帳 衆議欲逐之 當是時 土佐公子某居妙心寺 公子聰明有藻鑑 歎曰 此兒神姿非常 後當有爲 乃遣之學于土佐吸江寺 是時土佐有谷時中 野中兼山 與俱切劇儒學 一見閣齋 亦深器之 而惜其陷異端 勸讀經籍 閣齋乃讀四書及朱子文集 語類等書 大悅之 盡棄其學而學焉 著闢異一卷 貼著寺門而去 遂復髮爲儒 時年二十五 土佐侯乃責其不陳乞 輒還初服 閣齋恐遂出奔京師 下帷延徒講習道學 從者日衆 履盈戶外 閣齋師道至嚴 如君臣 然雖貴卿巨子 不置之眼底 雖小過 不少假色 善罵焉 其講書音吐如鐘 面容如怒 弟子震慄莫敢仰視焉 佐藤直方嘗云 師事閣齋 每入戶 心惴々焉 如下獄 然及退出戶 則洋洋焉 似脫虎口 其見憚類此也 後閣齋如江都 時寒凄如洗 特鄰書商賃居 以借閱其書 當是時 井上河內侯好學 下士書商亦數謁見 一日侯謂商曰 寡人將學 爾之所知 有足爲人師者 請爲介 商曰 近有一儒生山崎嘉者 自京師來 住小人東家 視其所以

切劇—研究

假色—許容
の顔色

寒窶—赤貧

措大書生

狂率氣違
じみ輕々し
きこと
杳嗟歎賞

臺閣大臣
畛域經界
咆哮大聲
叱呼
膠泥拘泥
支離條理
まよとまよらず

度越尋常閣下而召之其得不虞之幸福也。豈不感奮思答恩乎。侯大喜乃延致。商歸告閻齋。閻齋毅然曰。侯欲問道。則先來見。商鄂然以爲。措大不通時勢。若薦若人。必陵上無上。累自及。不若不薦也。他日侯復問曰。疇昔所告山崎先生如何。商曰。小人非情也。前日既傳命於渠。渠曰侯先來見余。是非頑愚不可曉。即狂率邀名也。請別選通儒。侯咨嗟良久曰。方今自稱師儒者多無意行道。東奔西走。欲其技易售。寡人聞之。禮聞來學。不聞往教。山崎先生能守之。此乃真儒也。即日命駕訪其居。會津肥後侯。加藤美作侯。亦厚禮師事閻齋。而會津侯敬信最深。終始如一。閻齋亦感奮思答恩。知莫不言焉。會津侯卒後。又歸京師。上自臺閣。公卿諸侯而下。至布衣閻閣之士。入其門者無慮數千人矣。閻齋治程朱學。孤峻編隘。峭設畛域。不喜博覽。不好詩文。以爲玩物喪志。每有片言犯程朱者。輒咆哮勃怒。不肯就同異。而究指趣。是以其弊往々膠泥而不融。至淪于支離墜於固陋。若晚年大倡神道。君子甚譏之。高足弟子佐藤直方。淺見綱齋。其餘反之者亦甚多矣。天和二年。年六十五沒。門人私謚垂加。著有朱易衍義。孟子要略。文會筆錄。大學啓蒙集。中和集說。孟浩錄。孝經刊誤附考。冲莫無朕記。中臣被風水鈔。神代風葉。

集。垂加文集。著四十餘種。

熊澤蕃山肖像

伯繼 字は了介 通稱次郎八 後に助右衛門と改む 蕃山と號す 父を野尻一利といひ 加藤左馬助に仕へ 後致仕して 京師五條にて蕃山を生めり 熊澤は外祖父守久なる者養うて子とす よつて其の姓を冒す 蕃山元和五年に生る 幼より深智衆に超え 十六歳にて岡山烈公に仕へ 後京師に遊學して 徳を成し 材を達し また備藩に仕へて 祿三千石を賜り 刑政に與り 國中の舊典を改革して 流弊を一新し 海内の耳目を驚し 徳澤下に及ぶ 故あつて備藩を去り 京師に居り 又播州等に隠れ 息遊軒と號し 和歌など吟し 樂みとせしが 後又明石侯に仕へ 移封に従ひ 下總古河に徙り 上表建言せし事にて 罪を 幕府より被り 其の地に幽蝨せられ 後元祿四年八月十七日卒す 年七十三 古河大堤邑鮎延寺中に葬る 其の傍に妻矢部氏の墓もあり

○蕃山學は藤樹に出づるといへども 後や異同あり 實に經世有用の學識なりとぞ 又多藝に涉り 樂を好み畫をよくし 和歌に通ず 其の詠歌一二首をここに記す



熊澤蕃山

移封—國替

熊澤蕃山

寛文七未の年さはることありて、吉野の山深くすみ侍る比、

此の春は吉野の山のやまとなりてこそ見れ花の色香を

おなじ申の年閑居にて、

つたへ来て春は神代にかはらぬを人のこころぞむかしにもにぬ

おなじ江にねぶるかもめの心をもしらで千鳥のたちるなくらん

蕃山罪を被りしは貞享四年の冬なり。其の翌春歸鴈を見て、

老の身の見んことかたき故里に春待得てや歸る雁がね

たとひ蘇武にならへる鴈がねに玉章をつたふる事ありとも、人の知らざるがため

に、おほやけの命をそむくべからず。

ゆく鴈に關はなくともおほやけのいましめあれば文もつたへじ

また蕃山備前にて、今様を作り、童子に教へ歌はせしとて今に残る。此の歌越天樂に合

りとぞ。

人はとがむともとがめじ。人はいかるともいからじ。いかりとよくとをすてよこそ、

つねなこころは樂しめ。

蘇武—李白
の詩、蘇武
在—匈奴、十
年持—漢節、
白鴈—上林
飛、空傳—
書札—云々
越天樂—雅
樂の曲名
つねな—つ
ねにの誤か

○蕃山京師遊學の時、加賀の飛脚の話に、危急の難儀ありしも、馬卒の篤實により再生の恩を受けたるは藤樹先生の徳化の然らしむるよしを聞きて、夫こそ適従すべき良師なりとて、江州小川に尋ねて隨従を請ひしに、人に教ふべき程の學文なしとて許されず。蕃山ひたすら願ひて二日の間藤樹の門にたよすてみ歸らず。此の時藤樹の母のとり持にて、漸く内へ入りてつひに師弟の約をなせしよし、東遊記に見ゆ。學を成就せんには立志の堅固ならざれば得難し。蕃山の超凡此の一事にて萬事はしらると思はるのみ。

○蕃山小倉少將と元政の稱心庵にて樂を奏して樂しめり。蕃山嘗て云ふ、笙は舌にて調子定り、絃も笙を聞きて調べ、箏も笙を聞きて舌をしらぶるなり、笛ばかり調ぶる事はなく、笙箏樂を聞きて、それに應じて吹くものなり、ことに絃に笛一管は吹にくし、調子さよからでは、絃にあはずして和せざるもの也、笛よければ面白きものなりといはれしよし。その音樂に巧なるを見るべし。また木がらしといへる笛を某へかへしおくる時の歌あり。

音も高く吹つたへたる木がらしの昔にかへるしらべたがふな

○此の肖像は蕃山みづから己の小照を畫きたるよし、今河洲の民家に藏す。原圖は被甲

乘馬の姿なれど、今衣服を改めて此に加ふ。

○蕃山著書目左に記す。

集義和書
論語小解
宇佐問答
五倫書
女子訓
葬祭辨論

集義外書
二十四孝評
三社託解
大學或問
易解

大學小解
夜會記
神道大義
孝經小解
源氏外傳

中庸小解
三輪物語
繫辭解
孝經外傳或問
紫女物語

○蕃山の履歴は、門人巨勢直幹の實記、草加定環の行狀、菱川大觀の傳記あり。今定環撰の行狀ことに擧ぐ。

勝國亡國
豐臣氏の滅亡をいふ
神祖一家康

先生姓熊澤諱伯繼字次郎八。後更助右衛門。其先紀人。中世關左人。祖考熊澤某字喜三郎。與其父居尾州。勝國之時事。神祖後仕水戸侯。考某字藤兵衛野尻娶喜三郎女。生先生於平安維元和己未也。此時祖考未事神祖。居平安五條。遂育其家。爲喜三郎嗣云。略注寬永十一年甲戌。先生歲十有六仕備前侯。是板倉内膳正京極

考一亡父

庠序學校

猷廟大猷
院徳川家光

主膳等之所薦。十五年戊寅先生歲二十。辭退其官。寓江州桐原。十八年辛巳秋八月。適江西書院。請受教於藤樹先生。藤樹先生固辭不許。故空歸矣。冬十一月再往江西。寓邑人淵田氏之家。而經日。於是藤樹先生感其志。而始謁之。得其所志。隨居江州。數年其考野尻君。其弟仲愛君。流憩君。女弟三人。俱居此。正保乙酉。備前侯依京極主膳再求以祿之。于時先生歲二十七。備前國政大革。承應甲午。備之前中二州大飢窘迫及九萬人。國老不知計爲。乃委事於先生。先生出命。施政民大賑。尋修隄池。蓄瘠磽。上下得所安。遂設庠序之教。其舉皆出先生。及其家弟與焉。制減佛寺。壞淫祠。慶安己丑。先生歲三十一。從侯於東武。侯伯大夫。士大欣慕其道。不可勝數。猷廟聞而寵之。侯伯之稱。門弟子者。紀伊大納言頼宣卿。大小路伊豆守信綱。板倉周防守重宗。久世大和守廣之。板倉内膳正重矩。松平日向守信之。堀田筑後守正俊。板倉内膳正重道。松平備前守某。淺野因幡守長治。中川山城守久清。松平備後守恆元。織田内匠頭信房。久世三四郎廣也。板倉市正重元。荒尾平八某。水野周防守忠增。本多下野守忠泰。松平若狹守直明等云。明曆三年丁酉。先生歲三十九。病辭。備前。居京洛。前是先生狩轉山中。手足傷。故辭武事云。備前侯令其季子池田輝祿

資敬一大切
にして敬ふ

先哲像傳

爲先生之後。自是先生更名稱了介。居京師。學雅樂。習國典。一日微服吹笛。有安倍飛驒者聽之曰。非常人。其心情之正。即發音聲。云。先生嘗發揮紫女物語。得其微旨。後傳中院通茂卿。洛之公卿。大夫願事先生者。一條右大臣教輔公。久我右大臣廣道公。油小路大納言隆貞卿。中御門大納言資照卿。伏原三位宣幸卿。中院宰相通躬卿。野宮中納言定綠卿。野宮中將定基卿。清水谷大納言實業卿。押小路三位公起卿。久世中納言定清卿諸君云。寬文丁未。先生歲四十九。京令尹某信。誣逐先生。先生遷居城州鹿背山。己酉。先生歲五十一。播州明石侯松平日向守受縣官之命。待先生於其封內。於是居明石太山寺之側。名其軒曰息游。門人遂稱之。延寶己未。從侯移和州矢田。同州郡山侯本多下野守資敬先生。不減於矢田侯。貞享四年丁卯。又從侯移總州古河。冬十月。上表演政事。忤旨。乃禁錮。元祿四年辛未。秋八月十七日。殞。古河壽得七十有三。正室矢部氏者元祿元年八月廿一日先殞。共買其地邑大隄鮮延寺之土。以儒禮葬之。諡曰蕃山先生。先生之在備前。以食邑蕃山故。爲諡字也。先生生四男七女。其所出矢部氏也。一女厚。二女載各適播州人。伯某字右七郎氏。蕃山。仕備前侯。仲某字左七郎氏。野尻。仕明石侯。三女留適江州人。四女咲適備前人。五女房適江州人。叔某

武三郎仕本多下野守。季某字左四郎仕。明石侯。六女俊適播州人。七女某也。

伊藤仁齋肖像



伊藤仁齋

仁齋伊藤氏名は維楨、字は源祐、初の名は源吉と云ふ。仁齋と號し、また古義堂と稱す。外に棠隱、櫻隱の號あり。京師の人、その先は泉州の住なり、家もと商賈なり。仁齋は寛永四年七月廿日に生れ、幼時句讀を習ふ時、すでに儒をもて一世に鳴らんと志す。親戚醫を勸むる者あれども隨はず、自ら刻苦して性理學を修む。年三十七八の頃より、宋儒の説を疑ひ、是より程朱を排斥して、古學を倡へ、門戸を開き、堀川に住して、堀川學と稱するに至り、生徒刺を投じて、來學する者數をしらす。肥後侯その名行を欽慕して、祿千石をもて聘すといへども、老母の侍養人なきをもて、辭して仕へず。生涯處士をもて終る。利祿に移されざる斯の如し。故をもて年五十八の頃まで家道甚薄かりしとぞ。然れども遂に一代の儒宗となり、國として門人あらざるはなく、たゞ飛驒、佐渡、壹岐この三國の人來學せざるのみとぞ。其の盛んなる比類なし。寶永二年三月十二日卒す、享年七十九。小倉山に葬る、私諡して古學先生といふ。

○仁齋は世儒の異様を好むに似ず。節分の夜は禮服を著して、鬪聲にて豆をまき、また

性理學—宋
儒の性命理
氣の學

節分—立春
の前夜、邦
俗追儺豆打
を行ふ

義井 共用の井

佛の地を過れば、必其の本尊を拜し。また近隣の人義井を浚ふ事あれば、同じく出でてこれを助けなどせし。すべて其の人となり物やはらかに、愛相よく、謙退深く有りしとぞ。

○仁齋の歌に、

前庭を眺めて

風わたる竹の枯葉をそのまよにこするに止むるさよがにの絲

七夕

さかしらに誰がいひ初めて七夕の今宵なき名の空にみつらん

月をながめて

代々を経てながめし人のかすにまた我をもゆるせ秋の夜の月

戒愼恐懼の意を

思ひとれば此の身の外に道もなし身を守るこそ道をしるなれ

○仁齋の性質は酒を好まず。故に新年の詩句に、平生不善酒。一盞即醺然と作れり。また義士小野寺十内と交り厚く、其の母九十の壽を賀する詩あり。其の詩に、

蜘蛛 七夕 烏鵲翼を延べて橋とし、織女天河を渡りて牽牛と交會すとの傳説 さかしらに賢だてし

母氏年高九十疆。無憂無病又無傷。老萊孝思誰能識。膝下猶呼爲小郎。

また大石良雄も仁齋の門に學ぶ。

○仁齋著書目に

孟子古義 中庸發揮 大學定本 論語古義 古學先生集 童子問 語孟字義 大極論

大學非孔氏之遺書辨 春秋經傳通解 讀近思錄鈔 仁齋日札 送水野侯國字序 周易乾坤古義

性善論 心學原論 和歌集

文式

性善論

心學原論

○仁齋の事歴は、東涯撰する古學先生行狀記、其の外諸事に委し。北村可昌撰べる墓碑銘に、

先生諱維楨。字源佐。號仁齋。姓伊藤。洛陽人。自幼不凡。既長好宋儒理性之學。後疑宋儒學非聖人正統。大學書非孔氏遺書。及明鏡止水。冲漠無朕等說皆出於老佛。直以論孟教授。最善講說。發揮聖意。勸誘學者。詳悉審明親切著實。如尋常語。聽者驚動多所奮厲。從遊者繼于門。其文也思致確實。議論深長。不用綺字。不見艱

老萊 楚の孝にして、七十二歳の時父母猶存す、常に斑爛の衣を服し、嬰兒の戲をせりといふ

明鏡止水 心の虚明なるに喩ふ 冲漠無朕 萬象森然に續き、無中に有、靜中の意となる

匡幅一裝飾
妣孺人一亡
母
服莽一服す
ること一年
考府君一亡
父
洙泗一孔孟
の學

澁^ヲ每^ニ一篇出^ル四方爭傳^フ對州醫生齋歸流^シ傳朝鮮^ニ慶州府尹見^テ而歎曰^ク「旨新文佳^{ナル}不^レ意^ハ日本有^ニ斯人^ニ其性也寬厚和緩^ト不^レ見^レ慣怒^ヲ剪^テ徹匡幅^ヲ於^レ物無^レ抵^ル無^レ貴賤少長^ト愛而周^レ之^ヲ雖^シ粗鄙暴悍者^ト一再相見^レ則未^ラ有^レ不^レ薰然而心醉^セ焉^ト家又屢空^シ而處^ル之^ト恬然未^ダ嘗覺^ス其不^レ足也^ト先^ニ丁^ニ妣孺人憂^ニ服莽^ヲ尋服^ス考府君喪^ニ三年^ヲ著^ス論孟古義十^ニ七卷^ト中庸發揮^ト大學定本共^ニ一卷^ト論孟字義^ニ一卷^ト童字問^ニ三卷^ト文集^ニ三卷^ト詩集^ニ一卷^ト娶^テ緒方氏^ヲ後娶^テ瀨崎氏^ヲ五男三女皆能^ク研^ク家學^ヲ嫡長胤最明穎^ト善^ク文^ヲ寬永丁卯七月二十^ニ日生^ル寶永乙酉三月十二日卒^ス年七十九^ト葬^ル于小倉山先塋^ノ次^ニ私謚曰^ク古學先生^ト嗚呼悲哉^ト銘曰^ク

先生高尙
無^キ一時^ノ用^ヲ

不^レ近^ク利名^ヲ
有^リ千載^ノ榮^ヲ

洙泗^ノ正統^ト
學^カ耶德^カ耶^ト

本邦^ノ主盟^ト
日月^ノ雙明^ト

伊藤
長胤
持志
志切

長胤之印
元藏

伊藤東涯肖像



伊藤東涯

東涯伊藤氏、名は長胤、字は源藏、また通稱に用ゐる。慥々齋と號す。仁齋の長子なり。よく家學を修して、遺書を校刻して、孝志を表す。其の居堀川の東涯にあり、よつて自號とす。東涯は寛文十年四月二十八日生れ、母は緒方氏、餘弟四人は皆、繼母瀬崎氏の生ところにて、よく愛弟を守り、かつ兄弟ともに家學を主張す。世人歎賞して、伊藤の五藏といふ。殊に東涯および季子才藏學力優る。よつてまた伊藤の首尾藏と云ひしとぞ。東涯の人となり恭儉謹慎、まことに篤行の君子儒なり。人他を非謗する事を語れば、悪しきことなりと答へ、人の他を美譽することを語れば、それは善き事なりと答へたるのみにて、何の言葉も出さず。すべて訥々然として、言ふ事の能はざるごとくありしとぞ。父の業を守り、終身官途に就かず、家居して、天下の英才を教育し、他の嗜好なく、手暫も書を釋つる事なかりしとぞ。門下の授徒豪傑多く出づる。元文元年七月十七日卒す、享年六十七。小倉山に葬る。私諡して紹述先生といふ。

○東涯の學識比敵の者なし。江戸には徂徠あり、東西藝園の主盟たり。此の二人の右に

比敵一雙ぶ

出づる者さりになかりし。東海談に云ふ。ある國君當世の名人を問ふ。答へて、「儒者に伊藤源藏、號東、秋生惣右衛門、號祖、歷算は中根丈右衛門、伯理、久留島喜内、筆道は細井次郎太夫、廣官職、裝束は壺井安右衛門、名義知、神道は加茂の梨木氏、之、俳諧は松木次郎右衛門、下りて戲臺狂言は市川團十郎、號才、とあり。其の頃一時有名の尤轟きたるさま見るべし。

○東涯途中にて、藥袋を書生に拾はせ見れば、數の金あり。こよなき物を拾ひしとて、其の年の暮、伊勢の御師に屬して、大神宮に納めしよし、畸人傳に見ゆ。用意のほどいと尊し。またある夜途中往來せしとき、誤りて人家の用心水の桶にいばりして、翌日それと悟りて、人を遣し洗ひ淨めて、再三わびするとぞ。闇を欺かざるともいふべきか。

○東涯書籍を檢閲するに誠むべき詩あり。

童幼奴僕蟲鼠邊、燈下煙中梅雨天。醉後睡前竝忙裏、切戒書生謹繙編。

また仁齋と同じく、小野寺の母を賀する詩に、

小野寺氏十内、母某氏九十壽、候京邸官。

義君官政不違時、慈母九旬絲髮垂。況復一堂不違養、更無晨夕依門思。

晨夕依門思
戰國策に

「王孫買の母買に謂つて曰く、汝朝に出で、晩に來れば、吾則ち門に倚りて暮らさむ。暮らさずれば、吾則ち望む。」
また萱野三平の傳文あり、この戲場にて、扮名早野勘平なるものなり。ともに紹述集に見ゆ。

○東涯著書目に、

- 唐官鈔
- 古學指要
- 經學文衡
- 名物六帖
- 通書管見
- 天命或問
- 刊謬正俗
- 三奇一覽
- 周易義例卦變考
- 大極管見
- 歷代官制沿革圖
- 學問關鍵
- 訓幼字義
- 制度通
- 讀易私說
- 鄒魯大旨
- 助字考
- 蓋簪錄
- 經史論苑
- 四書集注標釋
- 本朝官制圖
- 沿革圖考
- 用字格
- 勢遊志
- 辨疑錄
- 異學辨
- 釋親考
- 復性辨
- 同餘錄
- 秉燭談
- 帝王譜略
- 後漢官制
- 東涯漫筆
- 童子問標釋
- 古今學變
- 經史博論
- 語孟字義標注
- 大學定本釋義
- 中庸發揮標注
- 古學先生行狀
- 周易經翼通解
- 和漢紀元錄
- 明官制圖
- 問居筆錄

輜軒小錄

三韓紀略

此の寫本、家藏する者いと多しとぞ。

○東涯の墓碑文は内大臣藤原常雅公撰す。篆額は權中納言藤原俊將卿、筆者は右中將藤原英朝卿なり。人みなこれを榮とす。太辛春臺も賞歎して、匹夫而受是尊寵、何其榮也と云ふ。

嗚乎東涯先生已矣。先生名長胤。字元藏。號慥々齋。東涯亦其所自號。竟以號行。海內皆知有伊藤東涯者。而今已矣。嗟乎。蓋自孟子歿。遺經僅存。而聞而知之者世無其人。西方之傑遂投間隙。舉世傾動。靡然從之。碩儒巨師雖痛排之。然浸淫其說。以解說聖經。我古學先生勃興於本邦。得不傳之學於遺經。以倡天下。而升堂觀奧。稱高弟者又不鮮矣。先生其家子而緒方氏之出也。生長膝下。趨庭之訓異聞居多。故校訂遺書。公諸世。至以回人之視聽。蓋不有繼志與述事。則曷能障川迴瀾耶。資稟甚異。三四歲能知字。長而博學強記。最善屬文。爲世所稱。孳屹種學。淳澹涵浸。莫能測。沈靜寡默。恭儉謹慎。口不言人過。不事表襮。不設防畛。終身不仕。

冢子一嗣子
資稟一得
の材幹
孳屹一勉強
種學一學問
の増殖をは
かる
淳澹一たま
ること
涵浸一ひた
すこと
表襮一表面
をかざる事

補袞—宰相
同上臺—上
回臺閣の誤
か
昏頑—理に
暗く愚なる
こと
堅珉—堅き
こと玉に次
げる一種の
美石

講學於家。剖析經義。蠶絲牛毛。然未嘗強以語人。而就問者日衆。遠近尊之。無他嗜好。祁寒暑雨未嘗手釋卷。每有所得。則輒筆之。故其書滿家。既稍登梓。文集三十卷。周易通解等未刊布。生於寬文庚戌四月二十八日。死於元文紀元七月十七日己酉。享年六十有七。娶加藤氏。子男二人。曰世俊曰世倫。俱夭。曰善韶今纔八歲。女一人其弟。門生經紀喪事。遂葬于先塋之次。私謚曰紹述先生云。其存日令季弟長堅需。余序其集。頃長堅再拜謹泣以告曰。集序亡兄在日既蒙見允。誌其墓。願亦藉補袞之手。地下若有知拜辱有餘。回上臺之光。下耀草莽巖穴。仰公之德。永世罔極。且曰吾家兄弟八人。先人死日坐食在家。人或勸其出贅爲人之後者。亡兄一不省。與俱啖苦攻淡。日勵學行。以要似續。昏頑之質稍有成就。皆出就仕。女嫁有室。生我者父母。而長我者我者皆亡兄也。今獲鴻文。而使吾言與行之不朽。我報亡兄亦稍足矣。吾祖公會知其父之業文。余亦景慕先生。則豈可孤其請耶。遂系之銘曰。淳謹之質。汪々巨量。耿潔甘節。休聲遠揚。克纘先志。篤崇聖賢。文辭純正。典籍精研。居家孝友。厥德惟馨。遺名千祀。堅珉勒銘。

仲村惕齋肖像

傳
爲
書
齋
敬
甫



中村惕齋

中村 惕齋

閉戸先生一
三國時代孫
敬、閉戸讀
書せる故事
(張方賢の
楚國先賢
傳)
濫輿一輿義

惕齋中村氏名は之欽、字は敬甫、通稱仲二郎と云ふ、惕齋と號す。もと京師吳服屋の子なり。寛永六年二月九日に生れ、七八歳初めて句讀を郷師に受け、長ずるに隨ひ看書を好み、遂に市中の喧囂を厭ひ、閉戸先生のご事に擬し、世の交を絶つ。商家に生長して財利を顧みず、管家の手代、某引負の事ありて、親戚の人々其の罪を官に訟へんと議る。惕齋獨許さず、從容として諭して云ふ、「吾が財をもて人を死地に陥る、甚不慈なり」と、また意とせし。これより家産雲落に及ぶといへども、志いよく高く、性理の學を修め、禮義を踐行して、篤行先生と稱せらる。かつ學ぶ處其の濫輿を究めざるなしと。こよをもて天文、地理、尺度量衡より音律の技に至るまで、よく通曉して多能の美譽を取る。伊藤仁齋と名を齊うして、兄たりがたく弟たり難しと人評せりとぞ。元祿十五年七月二十

六日卒す、享年七十四。浴外、一乘寺村、圓光寺に葬る。
○惕齋ある時、程近き家に火を失しけるに、をりふし惕齋の家風下なりしかば、親戚、門人驚きてはせ聚りしに、忽風ふきかはり、風上になり、今は類焼のうれへなしとを衆皆心

安んじ相賀するに、惕齋ひとりかへつて愁ふる色甚し。其の故をとふに、「其の火もとの人々今まで風上なりとて、心を安んじゆだんの所、にはかに風かはりし事なれば、喜び忽引かはりて周章措所を失はるべしとおもひやりてうれふるなり」と答へられしに、寄り聚れる人々感じて、いそぎ火もとはせゆき、防ぎ助けしとなり。君子はかくありたし。

上木—出版

○惕齋著書四十五部ありて、上木の者十六部、多くは惕齋歿後に至り、後の人は是を鐫む。自ら著書を刻行して名を求る者恥づべしと、先人は云はれたり。因に云ふ自身の詩文集を自身に板行して世に行ひしは、漢土にては五代の和凝より始まり、時の人は是を非れりとぞ。

○惕齋著書目

入學紀綱
孟子筆記
春秋筆記
孝經集解

大學筆記
詩經筆記
禮記筆記
通書筆記

中庸筆記
書經筆記
讀易要領
西銘筆記

論語筆記
周易筆記
四書鈔說
三器通考

慎終疏節

追遠疏節

姬鏡

近思錄鈔說

近思錄示蒙句解

孝經示蒙句解

家禮訓蒙疏

四書示蒙句解

小學示蒙句解

詩經示蒙句解

頭書訓蒙圖彙

大極圖說筆記

○惕齋自像の詩に

利名雙字胡爲者。億萬民生俱策驅。耆耄棄材憐世計。考槃林曲永言娛。

○增謙益夫の撰める行狀は數千言下略して、此に記す。

先生姓仲邨氏。諱之欽。字敬甫。小字阿七。以子女通。次在第七也。既長曰七次。交名七左衛門。號惕齋。其先河州石川郡仲邨邑人也。因以爲氏。會祖交名甚左衛門。祝髮曰道金。始遷居泉州堺津。於是爲泉界人。祖諱正次。交名新右衛門。祝髮曰常喜。妣岡本氏。會慶長大坂之兵。避居京師。此後遂爲平安人。考諱定次。交名甚左衛門。法諱常怡。妣鹽屋氏。以寬永六年己巳歲二月九日乙未生。先生于室町通街二條第一間。先生幼而穎悟。未能言。乳婢抱之。往其社會。先生乃能識其衣服及僕從列舍。林木人群來往之類。後婢與人語。及赴社之事。先生曰。我亦記得之。婢不信曰。此時君方一歲何能識之。先生證以事。聞者奇之。四五歲令尊見其能言而識字。乃帖

耆耄一とし
よりたる者
考槃一曲を
奏して樂む
交名一俗稱

穎悟一さと
し
社會一町民
の集會

局戲一圍碁
すころくな
ど

木主一位牌
保甲一組頭

紙書雜字數十。而教之。既識得。則隨問而應。含乳指之。八歲學書計。鄉有道流。讀儒書者。乃就授讀四書。漸長。尙儉素。以學字讀書爲務。後遂成性。不好繁華。不羨逸樂。至於局戲雜伎。無一所嗜。崇信儒術。而不溺異教。生長市肆。而不識物價。凡治生營利之事。澹然無入其心者。二十七歲厭市肆之囂。欲居清閑之地。於是買宅於衣店街二條第一間西畔。而經營之。一隅設祠堂。假設三世之木主。薦之。鄉人將以保甲屬先生。先生不欲之。又買宅於小川街二條第三間西畔。新建祠堂。修繕居室。而徙焉。後又遷居本間東畔。天和三年先生年五十五。營隱宅于伏見鄉。京町南八間。既成。徙之。改交名爲仲二郎。仲氏也。二郎第也。乃拒絕外人通交。惟京師舊知來訪。則延入。論學耳。自茲不剃鬚髮。以表不出世不交禮。專以著述爲事。諸生漸衆。既而暫寓京師。遂遷居東九條字賀辻村。時年七十。生事益衰。而其操益固。諸生來者益衆。一日嬰厲瘧疾。入京治療于男之淑之宅。更數醫皆不驗。遂逝于其室。享年七十有四矣。元祿十有五年七月二十六日丙午初昏也。本月己酉葬于洛之良隅一乘寺村圓光寺後山。

貝原益軒肖像



貝原益軒

益軒姓は貝原、名は篤信、字は子誠、俗稱を久兵衛といひ、號は益軒また損軒ともいふ。易語の損益にとる。初め柔軒ともいひしとぞ。筑前の人、その國侯に仕ふ。父を寛齋といひて、藩醫なり。益軒は寛永七年、福岡の官舎に生る。六歳の時、母緒方氏に別る。九歳の時、兄存齋に就て、書を読み、幼より群兒の遊を好まず。たゞ讀書を嗜み、中年に及び京師に講學す。十九歳、武州河崎宿にて祝髮し、柔齋と號し、醫とならんとての事なり。後寛文八年三十九歳の時、束髮して久兵衛といふ。初め陸王二氏の説を喜びしが、後朱學に歸す。心術後世に裨益あらんを欲し、いさよか名利に馳せず。故をもて著書數百部、假名書多し。其の見識、尤人の及ばざる處なりとぞ。妻江崎氏も婦徳ありて、和歌を能し、書を工にし、益軒と共に諸州を経歴して、内助ありとぞ。然れども遂に子を設けず、六十二歳にして益軒にさきだちて死す。益軒實子なき故をもて兄の子を養うて嗣とす。正徳四年八月二十七日卒す、年八十五。荒津金龍寺に葬る。

○益軒謝世の詩歌あり、こよに歌のみ記す。益軒平生詩は好まず。無用の閑言語と云ふ

螟子—螟蛉子、養子のこと

論等—僭越
西山公—徳川光圀
朱舜水—明末の學者、遁れて水戸に仕ふ

折にふれては和歌を樂しめりとなん。

こしかたは一夜ばかりの心地して八十あまりの夢を見しかな

また益軒の螟子好古の辭世因に記す。

出る日の入るが如くにおもほえて浮世に残ることの葉もなし

好古は益軒の姪なり、養うて子とせるに、先立つて死す。學識ありて益軒の年譜も元祿九年まで好古撰む。此の年卒す。十年よりは後の事は可久の文なり。是も益軒兄存齋の子なり。

○益軒嘗湊川を過ぎ楠公の昔を追想し、公の梗概を片石に記し、遺跡をながく存せしめんと、兵庫の富商に議して、すでに楠公の碑文を撰みて與へければ、富商喜びて、やや石工にも謀ることろなりけるに、俄に使用して其の稿をとりこしけるに、文章の改削もやと附屬して返ししかば、やがてまた使して言傳せるは、「我等思ふに、楠公の勳功日月をも比すべきに、予が如き淺學の筆もて記したらんは踰等の事なれば、此の事やみぬ。貴殿へ寵忽の約を申たり、許し給へ」とありしゆゑ、富商も本意なしとて悔みけるとぞ。其の後、西山公、朱舜水の文をもて楠公の碑は建ちぬ。益軒の篤實謙遜これにても尊む

べし、慕ふべし。

○愛日樓集に益軒の像贊あり

自損者能益人。忘譽者能遠毀。小言之詹々。人不厭其俚。細物之瑣々。人不謂其鄙。仰藹然之遺影。和而介。溫而理。於戲不愧乎有道之士矣。

○貝原の著書目因に記す。

- 小學備考
- 慎思錄
- 初學訓
- 和漢名數
- 鄙事記
- 岐蘇路記
- 京廻
- 本朝詩仙鈔
- 和字解
- 近思錄備考
- 家道訓
- 農業全書附錄
- 續名數
- 和爾雅
- 初學詩法
- 吾妻路記
- 大和廻
- 點例
- 自娛集
- 大和俗訓
- 樂訓
- 童子訓
- 初學知要
- 諸州廻
- 日光名所記
- 日本釋名
- 五常訓

詹々—多言する貌
瑣々—細小卑賤

三禮口訣
 筑前名寄
 松島之圖
 日用良法
 吉野山之圖
 心畫軌範
 養生訓
 頤生輯要
 筑前續風土記

菜譜
 有馬名所記
 天橋立之圖
 和學一步
 女大學
 大和本草
 大疑錄
 自警篇
 天滿宮實記

文武訓
 嚴島之圖
 神祇訓
 扶桑記勝
 花譜
 歷代詩選
 日本歲時記
 三記聞

訓點を附したる書は。小學、孝經大義、四書五經、朱子文範、古文前集、同後集等ありと。

○益軒年譜は姪好古、可久二人の手に成る。墓誌は門人竹田定直撰文なり、此に掲ぐ。先生姓貝原、諱篤信、字子誠。以寛永庚午十一月十四日、生于筑前州福岡城内。其先備中州人。大父某來豐州。仕黒田先公。從來筑州。世爲家臣。先考寛齋、諱利貞。娶

采地 領地

洋溢 滿ちあふるること

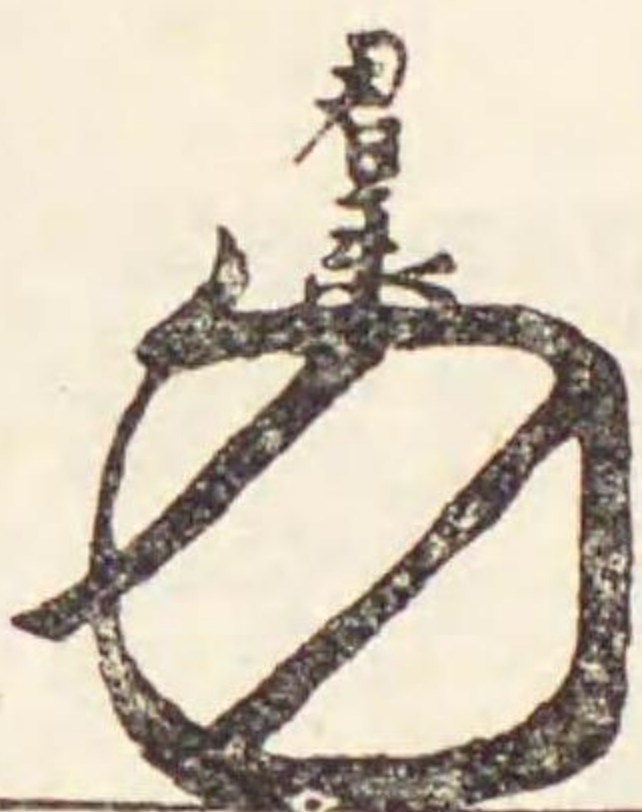
韜藏 才徳をくらしかくす

緒方氏女。生先生兄弟。先生於兄弟爲季。先生事邦君三世。爲儒學教授。禮遇彌厚。累加賜采地。元祿庚辰年七十一。告老致事。猶賜月俸。優其老焉。先生稟性純厚。幼而志聖人之道。學極博洽。所操至要。以忠信不欺爲主本。愛人濟物爲要務。昔曾在京師。講程朱之書。聞者靡然來焉。近世興性理之學者。先生爲始。然其性甚謙。只恐躬之不逮。而不喜近名。常言吾無長人者。但恭默思道而已。然一時老師宿儒。悉推服焉。名門右族各敬屈焉。聲名洋溢。聞清朝。恭達台廷。嗚呼盛哉。晚年家居清閑自娛。手不釋卷。所著之書至百餘種。其志在於務作有益以報皇天。極之洪恩。以正德甲午八月二十七日。病卒於家。享年八十有五。葬荒津金龍寺内。先生娶河崎氏女。有賢行。而無子。取仲兄存齋之次子重春爲嗣。今仕在本州。爲監司。有一男二女。皆幼矣。重春託銘於小子。乃銘曰。

恭默思道 極精造微 愛物爲務 事天不欺
 韜藏增顯 謙容愈輝 遺訓存策 後學久依

白石

後守



新井白石肖像



新井白石

白石新井氏名は瓊、後に君美と改む。字は在中、通稱勘解由と云ふ。號を白石と稱ふ。又錦屏山人とも云ふ。本姓荒居なり。其の先は新田氏より出る。父を正濟といふ。常陸の人、後江戸に來り、土屋侯に仕ふ。其の後致仕して淺草に住む。白石明曆三年二月十一日に生れ、康熙帝と同日支干なりとぞ。三歳の時より大字を書し、十歳の頃は侯の左右にありて、よく書札往復の事を勤めしとなん。父と共に浪遊し、後木下順庵に從學して高足弟子となる。

高足弟子一
すぐれたる
弟子
文廟—文照
公、徳川家
宣
閻羅—閻魔
王
文廟潛邸の時仕へ奉る。書記となり、繼統の後、追々登庸せられて、恩遇他に異り、遂に爵五品を賜はり、祿千石を食む、筑後守と稱す。其の才經濟に長じ、著述の書は盡く國家の典刑、有用の具となる。詩文も藝苑の魁首、一時流傳して異邦に至る。白石常に云ふ、「生前封侯を得ずんば、死後閻羅となるべし」と。其の豪邁つひに素志にかなへり。享保十年五月十九日卒す、年六十九。淺草報恩寺中、高德寺に葬る。法諡を慈清院釋淨覺といふ。

○白石七歳の時芝居見に行きて、始より終まで一々記憶して歸られたりとなん。此の兒あしくなるか善くなるかなみくならず、と父のいはれたりとぞ。又白石の號は深き意あるにあらす、たゞ古人姜白石、黃白石、沈白石などを見て名付しものと自云はれたり。また常に書を見るに三几を設けて、一は已に讀みたる書を置き、一はいまだ讀まざる書を置き、一は今讀む書を置かれたりとぞ。

○白石 自肖像に題す詩に。

蒼顔如鐵髮如銀。紫石稜々電射人。五尺小身渾是膽。明時何用畫麒麟。壯年朋友に與するに死をもてせんとする事折燒柴にあり。又非常の用とて五十金の賜をもて甲冑を求めしなど見れば、詩意空言にあらざるを知るべし。

○白石著書目に

- 白石餘稿
- 白石詩草
- 白石遺文
- 經濟典例
- 車輿考
- 聖像考
- 問田歩
- 日本紀論
- 冠服考
- 新井家系
- 田制考
- 俳優考
- 樂舞考
- 玉考

木瓜考

文字考

東雅

復號紀事

藩翰譜

南島志

珊瑚網鈔

西洋圖說

樂考

朝鮮聘禮事

講義進呈案

○白石の墓碣文は室守禮撰べり。然れども鳩巢文集にのみ載せて、墓碑に彫る處にあらず。

人名考

軍器考

五事略

奉命教諭

同系圖

北島志

鷄肋稿

百家編

采覽異言

地名河川兩字通考

朝鮮信書式

天爵堂漫鈔

岩松家系

同文通考

讀史餘論

癸巳三月儀

黃白問答

停雲集

折燒柴記

集古圖說

倭地形類

觀樂江關筆談

將軍宣下儀

決獄考

古史通

鬼神論

新安手簡

畫工便覽

西洋紀聞

議訴父女罪

起請文考證

孫武兵法擇

朝散大夫
從五位下の
唐名

怙恃—父母

先哲像傳

九二

朝散大夫筑後守新井源公。諱君美。字在中。初名瓊。白石其號也。其先上野人。爲新田族。新田大炊助義重曾孫。新田二郎某。削髮爲僧。因其所居稱荒居禪師覺義。其子孫遂以荒居號其家。後又易新井。蓋我邦方言與荒井同訓也。覺義之後世仕南朝。南朝既亡。荒居族流寓上下兩野之間。元龜之初有圖書允某。據有上野勢多郡女淵城。公其後也。祖勘解由某方遭世屯亡土地。卒往常陸。從多賀谷修理大夫平宣家。多賀家敗去。隱河內郡。其宅門前有古橋。里人號爲古橋殿。父與次右衛門正濟。母藤原氏坂井某女。正濟幼喪怙恃。年十三來江府。爲武州人。及壯。爲土屋家臣。甚爲民部君所任用。民部君卒後。有故而去。公生而岐嶷穎悟夙成。三歲時。能書大字。民部君愛其幼慧。召置膝下。比及十歲。常在民部君側。代書殆若老成。云。延寶三年。從家君辭去。天和二年。公仕於堀田筑前侯。會朝鮮來聘。迺詣客館。與其學士等唱和。韓人序其陶情集。是歲丁家君憂。居無何辭仕。去隱居府下。元祿六年冬十二月。起就甲府之辟。始至以儒職。召侍講筵。優待日渥。後數年。特旨進公資格。列爲寄合衆。寶永六年夏四月。文廟始繼大統。秋七月。賜采地歲租五百石。七年冬十一月。以事使京師。八年春二月。還報稱旨。冬十月。朝鮮來聘先期。命公掌其事。

劃切—よく
當てはまる
旨察—肯察

頤頰—力相
上下—大に
鴻漸—大に
進む—出仕
羽儀—威儀
の狀—威儀
巖廊—威儀
あり—威儀
豹隱—豹變
退隱—豹變
一老—一賢
人—一賢
愁遺—強ひ
と—強ひ
佳城—墓地

多有所建白。皆施行。是月。叙從五位下。拜筑後守。十一月。倍賜采地。與前所食并爲千石。公以職在顧問。每出入風議必論事。劃切動中旨察。將順匡救所裨益不少。正德中。國家不幸。仍遇大喪。而公漸老。無意當世。廼杜門謝客。日夜以典籍爲樂。卒以此終焉。公以明曆三年丁酉二月十一日生。享保十年乙巳五月十九日疾卒。享年六十九。娶日下氏朝倉長治女。生二男。長明卿。今克家。次宣卿。先卒。二女長適市岡正軌。次適石谷清資。公少時自負膽氣不羈。旣而折節讀書。通經史百家之編。中歲始遊於順庵木先生之門。以該博見稱。最善唐詩。其詩豐腴剛雅。直與開元諸名家相頡頏。由是四方爭傳以逮海外之國。而公之詩名擅天下。其所著書藏於家。後世必有傳之者。銘曰。

公昔鴻漸。羽儀巖廊。晚節約隱。蔚乎其章。
國有一老。天不愁遺。朝野共慨。若亡著龜。
佳城新卜。山阿環周。旣安且固。何啻千秋。

三輪執齋

三輪執齋肖像



三輪執齋

壽藏一生存
中に立つる
墳

執齋姓は三輪、名は希^き、字は善藏^{ぜんざう}、執齋と號し、また躬耕廬と號す。平安の人なり。寛文九年に生る。その先祖は大和三輪明神の社家なり。父を澤村自三^{みづむらじさん}といひ、醫をもて平安に住す。母は箸尾氏、執齋六歳の時、母を亡^{うしな}ひ、十四歳にて父を失ひ、市人大村氏に養はれ、人となりて後、眞野氏^{まのうぢ}を嗣ぐ。後又本姓三輪となる。はじめ佐藤直方^{さとうなほかた}に従ひ、性理の學儒たり。後王陽明の學に歸す。初め酒井侯に仕へ、後致仕して、講説をもて業とす。京、大坂、江戸に居住して、生徒を教育す。また和歌を能^{よく}せり。其の集にある歌凡六百餘首あり。儒にして和歌の道を悟る比すべきなしとぞ。さればこそ元文四年七十一歳の時、壽藏を立て、和歌二首をもて自書す。これより五年を隔て、寛保四年改元ありて、延享元年と成る。その年正月二十五日、京師にて卒す、年七十六。すなはち壽藏の地、建仁寺の中兩足院に葬る。

○執齋病に寢るは寛保三年の冬十二月半比より翌正月にいたり、いよと革^{つよく}なりしに、正月二十三日髭を剃りて祠堂を拜して、永訣を告げ、二十三日、二十四日兩日には、親族ま

た年來舊識の輩日來家門出入のもの、及び家僕に至るまで悉く永訣し畢り、二十四日晝未の刻に、筆紙を請ひて、寛保四年子正月二十五日、三輪希賢死と自書し、翌二十五日朝寅の刻易筮しよし、喪記紀事に見ゆ。さすが名儒のこころえさも有りたきことならんかし。

○執齋 先師佐藤直方の死する時、其の靈前へ手向る和歌八首あり。いま一二をこよにしるす。

今年八月望、佐藤先生俄に病し給ふと聞くより、やがてまゐりけれど、はやこと切れ給ひぬ。永きわかれにも及ばざりしかなしさよ。終夜むなしき御からのかたはらに侍りて、すぎこしかたをおもひつゞけ侍る。今宵は十五夜なりけれど、雨いたく降りて、名高き月も見えず。

名に高き最中の月のかくれしや世にたぐひなき恨なるらん

希賢十九になり侍る年、始めてまみえけるよりことし三十三年になりぬ。

けふまでと契りやかけしつかへしも三十ち三とせの秋の夕露

此のごろ先生ともなはん人しなればたどり行く千代のふる道あとをたづねて

最中の月
中秋の月

古本大學
陽明學派の
用ゐる大學

雄琴川田
雄琴

茂叔周濂
溪、宋の大
儒

とよみ給ひて、希賢に見せ給ひしも、四日、五日のほどなり。

たづねけん千代の古道あとかへてひとりや苔の下に行くらん

外五首略す。これは享保四年の事なり。また同十二年春の歌に、

去秋明倫堂を開きけるによりて、古本大學の復の心を春のはじめによめる。

古にかへすをしへの道ひろみまもる仁のはるは來にけり

うづもれし道の深雪のやとけて昔にかへる春も見えけり

明倫堂は執齋の講堂、江戸下谷に住む時に翹む。歿後門人雄琴なるもの、君公に請うて

大洲に移すとぞ、執齋四言教の歌崎人傳にあり。

○執齋七絶詩一二を摘みて、此に記す。

漫興

黃鳥聲々檐外暮。杏花陰裏獨倚欄。光風霽月滿天地。洒落自知茂叔看。

三月游道灌山

道灌相宅一丘岳。徒有空名身受殘。不識當時築成處。却令游士爲游歡。

東叡見花思京

曳杖尋花到赤城。鳥啼日暖晚湖清。白櫻似有還鄉約。亦是皇州叡嶽名。

讀大學

孔言會意三王道。程拔朱輯萬世規。聖教不求民彝外。明新善盡自窮知。

明新善三綱領明明德、新民、止於至善

○執齋著書目因に記す。

周易進講手記

全六冊

孝經小解

四卷

合一冊

大學俗解上下

合一冊

四教講義

合一冊

神道臆說十三條

合一冊

日用心法并跋顧誕論

合一冊

○生財有大道說

合一冊

學校說

合一冊

十二孝子好人錄

合一冊

正享問答○救餓大意○社倉大意

合一冊

格物辨義○程子春秋序解○井田經界說

合一冊

合一冊

拔本塞源論抄○訓蒙大意解○教約和解

合一冊

合一冊

論語中庸諦嘗考上加茂步射之次第并競馬之事○含翠堂記○先致堂記○祠堂考○平野學問所之事○淡齋記○祭誠齋記○積善堂記○居喪諦○臍噬○祭薦卷○士心論○治教論○四言コトカキ

合一冊

○養子辯之辯○會約序

合一冊

答佐藤先生書并答論教條○答或人晚年定論之論佐藤先生跋批○王殿書○答酒井彈正忠

貫書○答河崎氏書○答原田平八疑問○答鈴木貞齋先生書○事成編○詩二十六首○邪正說并知士說○呈佐藤先生并策答○雜文述二十五條

合一冊

合一冊

曾禰之記并和歌○獻策記○古稀之賀和歌并序○祭土地文○會津孝子傳序○送藤使君辭并和歌○享保壬子春述文○芥川小野寺歌集之跋○藤樹先生全書序○拔本塞源論抄序○大學講義序○書篆字論語後○蘭相如贊○諱說○字渡部子之男文○明倫堂成祭王文成公文○祈水文○大久保忠喬朝臣碑文○醉露英覺菅雄碑文○孝女子於以麻碑文○猪兵翁碑文○貞婦栗女碑文○祖戶田還五郎碑文○西江一水居士碑文○拙庵今井君之碑文

合一冊

合一冊

執齋先生和歌詠艸○先生喪記記事追善詩歌

合一冊

合一冊

○五井蘭洲撰する執齋父澤村自三の碣文もて此に擧ぐ。



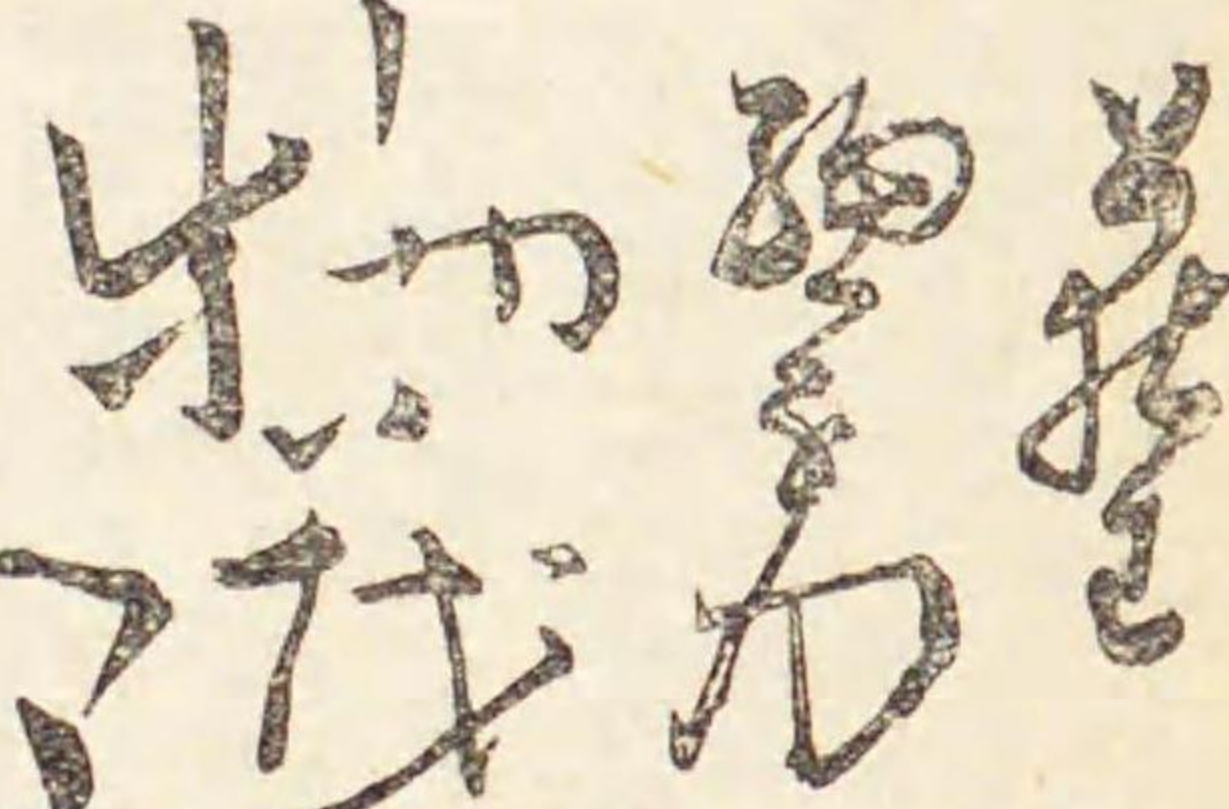
要叟居士澤村自三君墓記

君諱親重。童名乙若。俗稱次郎三郎。號自三。姓三輪。假以澤村相川爲氏。家世住濃州關原。祖考道悅居士。有參子。長曰藤大夫。坐越前一伯公事。歿。次爲僧。稱林藏主。關原之役生擒小西行長。獻轅門。因賞賜黃金及茶器。次則次郎左衛門。稱道祐居士。妻江州長濱。大村道與妹。生四子。伯曰刑部大郎。稱道時。後爲僧。稱無難。仲曰刑部次郎。又稱與之助。叔曰仁左衛門。蚤歿。季則君也。大村孺人先卒。道祐居士遂携君遷居京師。再娶宮崎氏。生男道意。女某。俱有癡疾。特鍾愛焉。道祐

轅門陣門

居士卒。享年九十三。葬妙心寺聖澤院。君夙有四方之志。服闋。讓家道意。遊歷諸州。學醫鍼及劍。皆通其術。遊事松平大和守源直矩公于越于播。後歸京師。家居。始娶某氏。尋出之。舉一子。爲僧。稱東溟。繼室箬尾氏生一子。希賢是也。妾生一女。名乙女。箬尾氏先卒。釋號花岳妙榮。葬建仁寺兩足院。天和二年辛酉九月十九日。君以病卒。享年六十。釋號要叟。亦葬兩足院。君之將終也。二子尙幼。乃託諸大村道慈。道慈卽道與嗣子。待二子齊己子。恩義兼至。爲嫁乙於左衛門尉戶田久寬。而生參子。早世。希賢娶小野氏。以无子去。繼室久住氏生六男二女。曰孝。俗稱新二郎。曰友。俗稱文之丞。曰睦。俗稱爲之丞。曰盛基。俗稱伊織。曰勝全。會道慈孫道節歿无後。其母及主管等請勝全繼其家。遂冒姓大村。俗稱彥太郎。曰廣全。俗稱彥左衛門。長女適細井安之。次女適渡邊正英。俱無恙。元文四年己未十一月。三輪希賢建。五井純禎誌。

261320

萩生祖徠肖像



荻生徂徠

原本混じて徂徠を—徂來に作る 憲廟—常憲公綱吉

大城—江戸城 風靡—草木の風靡する如く従ふ

象胥—譯官

徂徠荻生氏、本姓は物部なり、名は雙松、字は茂卿といふ。通稱惣右衛門、徂徠と號す又護園、赤城翁とも號す。名は避る事あり、字をもて行はる。父を方庵といひ、憲廟の侍醫なりし。徂徠寛文六年に生れ、五歳にして能く字を識り、十四歳の時、父方庵事に坐して、南總に竄せらる。徂徠從ひて移る。然れども僻地にありて、苦學し、十五歳の頃より文を屬し、二十五歳の時、赦に値ひて、江戸に歸るを得たり。遂に大儒となり、甲斐侯に聘せられ、祿五百石を賜はり、編修總裁となり、後大城にも屢々めされしなり。我が邦慶元以來の儒風ことに於て一變し、復古の學を唱へて、一時を風靡す。文章は李王の修辭を宗とす。英才多く其の門に輻湊して、其の學風を補翼す。太宰春臺、服部南郭をはじめ、其の他東野周南、金華澗水數ふるに暇なし。徂徠才學共に富みて、尤經濟に長じ、また雅樂、象胥、軍旅、法律、すべて百家のこと精覈せざるなし。然れども好奇の癖ありて、後世誹議するものまた多し。實に東方の一人、享保十三年正月十九日卒す、年六十三。箕田長松寺に葬る。法諡を清淨院根與知專居士といふ。

宇子—宇佐美瀧水

○徂徠嘗て庫一の書物を拂ふものありしを、金六拾兩程家財を賣拂ひ買はれしとなり。古文矩宇子の序にもいへり。誠に豪傑の所爲なり。また書を見るに少しも止む時なし。薄暮燈を點する時は戸の外に出でて是を見る、家人燈を點じ終れば、直様燈の下に就きて讀みたりとぞ。

○徂徠常に云ふ、「人に得手不得手あり、予は楷書に短なり」とて、草書のみ書きたりとぞ。草書韻會を几上に置きて學びしよし。また算用は八さんを覺えられたるのみなるに、度量考を作らる時は、紙の端に筆にて數とりを書付けて、殊の外骨ををられ、其の後中根丈右衛門に見せて正し、猶また春臺は極めて算の上手にて、改めて字をも直せりとぞ。古人の苦學常儒の及ぶ處にあらぬを見るべし。

○春臺始めて徂徠に對面するとき、其の才を窺はん爲、扇面へ釋迦老子并立つて、孔子半伏の貌を圖して、徂徠に贊を請ひければ、筆を取りて、「釋迦釋空老子談、虛孔子伏笑」と書けり。春臺、徂翁の才窺ふべからざるを喜び、遂に弟子となりしとぞ。

○徂徠の一生一首の和歌とて、我が門の五もと柳枝たれて長き日あかぬうぐひすのなく

○また高師直 鹽冶の妻に貽る歌の意を譯せしに、

我思美人貽之書 美人不見棄庭除 吾拾吾書歸十襲 心謂美人手所觸

もし韻あらば翻詩といはんも可ならんと、詩徹にいへり。

○徂徠著書目

辨道

中庸解

孫子國字解

譯則

井地解

孟子刪

草堂客話

度量考

樂制篇

廣象基譜

辨名

讀荀子

吳子國字解

明律考

西洋火攻神器說國字解

譯文筌蹄

南留別志

葬禮考

論語徵

歌題集

大學解

讀韓非子

素書國字解

紀効新書抄

譯筌後編

經子史要覽

滿文考

幽蘭譜抄

明十三省考定圖

論語解

讀呂氏春秋

明律國字解

射書類聚解

素問評

孟浪之篇

答問書

樂律考

琴學大意抄

琉球聘使記

太平策

古文矩

唐後詩

皇朝正聲

詩題苑

藝園錄稿

樂語瑣言

鈴錄

經濟總論

文變

絕句解

徂徠外書

文考

同遺編

翰墨事略

此の外點付し書目

晉書

陳書

同外書

憲廟實錄

文野

絕句解拾遺

徂徠集

管子考

同隨筆

論語辨書

政談

四家雋

韻槩

栢梁餘林

詩語自在抄

晏子考

弁髦編

甲州府志

射學正宗

梁書

射學正宗指迷集

○龜田鵬齋徂徠の贊に

先生智襟豁達。氣象卓犖。毅然以先王之道爲己任。爰唱復古之學。拊擊程朱之理。學排五百年之新義。擬議李王之脩辭。徵二千載之古言。東方文辭於是乎美矣。漢

憲廟—五代
將軍綱吉諡
號常憲院
德廟—八代
將軍吉宗諡
號有德院

蟹戸—あま
の住處
齒丁—齧は
齧の誤なる
べし齧丁は
搥やき
舌耕—講説
をもつて生
計をなす

侏離鳩舌—
不明なる
蠻人の語、
詞藻雅馴な
らぬと
戎機—戦法
鋒—鋒は蜂
の誤か

猗蘭侯—本
多忠統
摸搨—うつ
す

家之古訓於_レ是乎存焉。前調_ニ 憲廟講筵說_ク經。後見_ニ 德廟談笑驚_ス聽_ヲ此服_ハ則_レ上之所賜也。其人則一時之英靈也。其名茂卿。號曰_ニ徂徠_ト。天下學士誰人不知_ラ。若欲_シ晰_{セント}先生之家學。則須_ク再探_ニ西漢以上之書_ヲ而熟讀_ス之爾。
于時寛政十一年庚申冬十二月十二日
後學鵬齋龜田與敬題

日本國徂徠先生小傳

金匱 錢 泳 撰

徂徠先生物茂卿。名雙松。有所避。以字行。國之江戸人。其先爲_ニ荻生氏_ト。物部守屋後也。父方庵以_ニ醫術_ヲ官_ス於_ニ大府_ニ。延寶中。坐_ニ事_ニ貶_ニ上總_ニ。時茂卿年十四。亦隨_ニ父_ニ行。而喜_ニ讀書_ヲ。穎敏不_レ群。有_ニ遠志_ト。上總_ニ三面皆海。雜_ニ處_ニ于田父野老_ト。蟹戸。齧丁中。既乏_ニ書籍_ヲ。又無_ニ師友_ト。偶_ニ繙_ニ舊篋_ヲ。得_ニ其大父仲山府君手鈔大學諺解一冊_ヲ。熟讀_ス。深思_ニ之_ヲ。從此該_ニ貫群籍_ヲ。博識洽聞。每_ニ讀_ニ一書_ヲ。輒爲_ニ標註_ヲ。見者莫不_レ異_ニ之_ヲ。越_ニ十年_ヲ。值_ニ父以_ニ恩澤_ヲ赦_ニ還_ニ東都_ト。卜_ニ居于芝街_ニ。父母亦旋沒。一貧如_ニ洗_ト。舌耕自給。遇_ニ柳澤氏_ヲ以_ニ功封_ニ侯_ト。知_ニ茂卿名_ヲ。召_ニ爲_ニ掌書記_ト。始解_ニ褐_ヲ。侯愛_ニ敬_ス之。然其祿尙

微_{ナリ}。迨_ニ侯益受_ニ封_ニ。茂卿亦益_ニ其秩_ヲ。至_ニ宦五百石_ニ。非_ニ其好_ニ也_ト。茂卿初服_ニ程朱理學_ヲ。嘗著_ニ葑園隨筆_ヲ。自娛。既而翻_ニ然改_ニ。遂痛駁_ニ性理_ヲ。又倣_ニ李于鱗_ト。脩_ニ古文辭_ヲ。并將_ニ唐宋以來諸儒之說_ヲ。一切排_ニ斥_ニ之_ヲ。不_レ免_ニ爲_ニ侏離鳩舌_ト。然其豪邁卓識。激昂慷慨。宏文鉅著。已足_ニ籠_ニ蓋_ニ一世_ト。而尤好_ニ兵家言_ヲ。著_ニ孫子解及韜鈴錄_ヲ。涉獵殆盡。遂視_ニ七書_ヲ爲_ニ空談_ト。而謂_ニ戚繼光有_ニ實用_ト。又創_ニ造_ニ一家象棋_ト。以寓_ニ戎機_ヲ。名_ニ廣象棋_ト。矣。子凡百八十。而局則仍用_ニ碁局_ト。其陣列軍伍攻擊守禦無_レ不_レ備焉。一日門下諸生會_ニ講_ニ韓非子_ヲ。議論鋒_ニ生_ト。茂卿在_ニ坐_ニ。獨筭_ニ口不言_ト。諸生不_レ悅。曰_ニ「先生何無_ニ折衷_ト耶」。茂卿屏_ニ氣_ト曰_ニ「此書余嘗有_ニ成說_ト。將_ニ待_ニ明日_ト示_ニ之_ト」。而是夜始_ニ下_ニ筆_ト。疊_ニ夕數千言_ト。滿座爲_ニ之_ト傾倒。生平無_レ他嗜好。而重_ニ養生法_ト。以爲_ニ人生飲食居處_ヲ以至_ニ出入_ト。動止。應接。賓朋之事。苟可_ニ以傷_ニ生者_ト。吾弗_レ爲_ニ也。頗自負。嘗謂_ニ人曰_ト「吾死後所_ニ有_ニ遺文逸事_ト。必當_ニ傳_ニ遠_ト。然海內無_レ真知_ニ我者_ト。知_ニ我者_ト其唯_ニ聖人_ト乎」。以_ニ享保戊申正月十九日_ト卒_ニ於_ニ家_ト。年六十三。門下諸生爲_ニ之_ト發_ニ喪_ト。葬_ニ于芝三田長松寺之壽命山_ト。猗蘭侯爲_ニ撰_ニ墓志_ト。葛島石書_ニ之_ト。刻甫畢。遠近爭_ニ傳_ト。往來摸搨者日以_ニ千數_ト。其爲_ニ當時所_ニ重_ト如此。所_ニ著_ニ有_ニ論語微_ニ二十卷_ト。辨道一卷。辨名四卷。初茂卿生時其母夢_ニ有_ニ人以_ニ兩松_ト插_ニ簪_ト

管隙のきの間

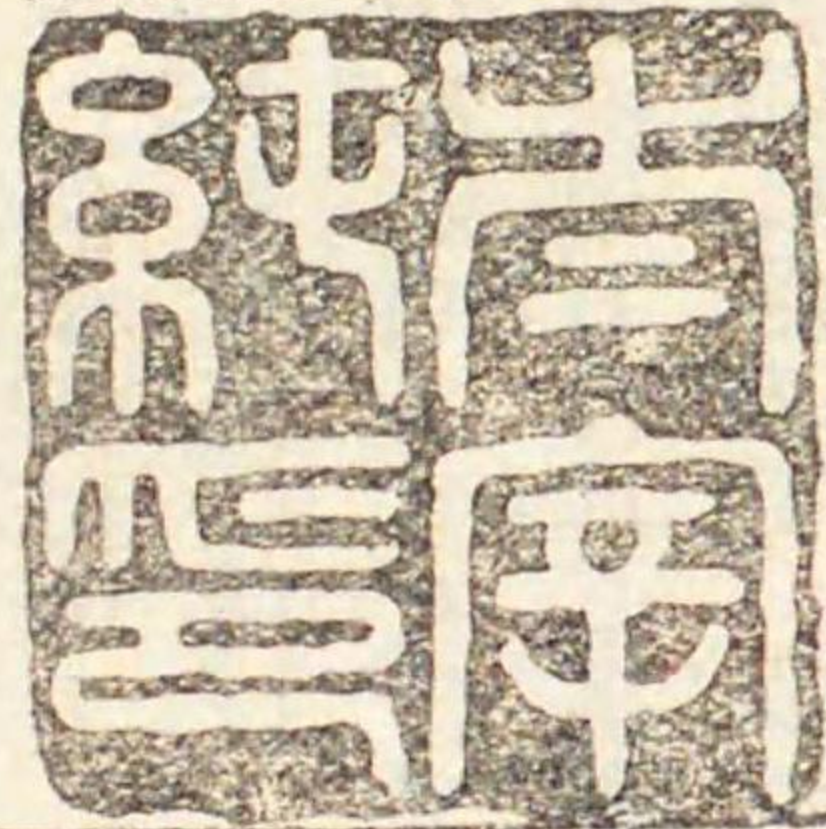
隙_ニ而生_ル。故名_ク雙松_ト。及_レ長_{スル}。自稱_ニ徂徠_ト。取_ル魯頌徂徠之松之義_ニ也。國學者太宰純。服元喬皆其弟子。咸稱爲_ニ徂徠先生_ト云_フ。

右梅溪先生所撰。物茂卿小傳一編。是據_{リテ}日本原善公道所著先哲叢談_ニ爲_{シテ}之損益_ヲ成_ス文_ヲ。非_ズ先生臆說_ニ也。因附_テ刻于辨道_ニ。辨名之前_ニ。所謂誦_ニ其詩_ヲ。讀_ミ其書_ヲ。不知_ラ其人_ヲ可乎。後之覽者幸諒_ニ之_ヲ。秀水鄭照識_ス。

太宰

純

太宰純印



水壺秋月



太宰春臺肖像



太宰春臺

處士一仕へ
すして家
ある士

會業一輯講

春臺太宰氏、名は純、字は徳夫、俗稱彌右衛門と云ふ。春臺と號し、また紫芝園とも號す。信州飯田の人にて、平手政秀の後なり。父の時より太宰氏となる。延寶八年に生れ、幼き時父に隨ひ、江戸に移る。初め中野橋謙に學び、性理の學を修む。後、徂徠復古の學を唱ふに及びて、就て業を受け、遂に其の説を主張す。晩年やう一家の見識をもて、徂徠の右に出る事あり。始終經學をもて任とし、禮法をもて教ふ。古文孝經孔傳久しく異邦に絶えて、我が邦にのみ遺る。春臺校して上木す。後に鮑廷博翻刻して、知不足齋叢書第一集に收む。實に藝園の一大功にして、孔氏の忠臣なり。初め或二侯に仕へ、意を得ずして致仕す。後諸侯に喜寵せらるるといへども、肯て游官せず、處士をもて門戸を開く。延享四年五月晦日卒す、年六十八。江戸谷中天眼寺に葬むる。

○春臺は物を極むる事すきなり。人と會釋にも、初めて逢ひし時より、是は此の位の會釋にすべき人といふ格を定め置かれしとぞ。また書を讀むには朝早く起きて、先假名書などを見、又は人の見せ置きたる詩文をよみ、又校正の書をなし、また會業の下見などし、

いろくせらるゝゆゑ、倦つかるゝことなし。夜はかならず四ツ時に寐られたりと。其の言行きはめて方正にして、小學の嘉言善行に入るべき人物なりしと、松崎君脩云はれたりとなん。

○春臺常に立關に鎗を掛置き、常の奉公人の武士の如し。死近きに至りても、浪人の葬禮に鎗を持たる例あらば持せたきよしにて聞合せたるに、浪人葬禮にも皆鎗を持するよしにて、春臺葬の時に鎗を持たせしとぞ。また病氣大切に及びし時、原芸澤脈を診して、「もはや後事を計り給へ」と云ければ、春臺も「尤なる事、餘人にはさは宣はじ」とて大に喜び、夫より遺言多く有りしとぞ。會葬の人三四百人にて、毎日の見廻も四五十人づつ有りしとぞ。尤盛んならずや。

○春臺著書目に、

論語古訓
易道撥亂
律呂通考
文論詩論

同外傳
周易反正
聖學問答
近體詩韻

家語增註
易占要略
和讀要領
論語正文

詩書古傳
六經略說
和楷正訛
親族正名

太宰春臺

朱氏詩傳膏肓

辨道書

孝經正文校

獨語

斥非

古文孝經校

産語

春臺文集 芝園稿

春秋曆

和漢帝王年表

新撰六體集

經濟錄

考一亡父

骸骨を乞ふ

辭職を乞ふ

藤東壁一安

縣次公一山

○春臺の事歴は松崎觀海の撰、行狀あり。服部南郭の墓記こゝに記す。太宰先生諱純、字德夫。號春臺。物夫子嘗爲其考栢樹翁、作墓碑、載在集。考以上具焉。先生生于信陽飯田、幼隨考東、稍長仕、出石侯、數年疾乞骸骨、三不許、乃自去藩、藩以輒去、錮之。西遊京畿、十年、是時物夫子唱復古學于東都、滕東壁、縣次公相助修業、而次公西歸、東壁乃願、夫子之門從游日多、然俊傑可與適、夫子道者猶未至、東壁幼嘗已同先生、受書、攝謙野先生者、服其敏學、因思先生、數書招之、會錮亦解、先生遂東至、則見物夫子、說其學、以爲得所、歸、乃事夫子、與東壁二三子講習古學、博文約禮、敦尚經典、物夫子歿、益詳究先王之道、孔氏之書、鬱爲大師、弟子諸侯大夫至、草野士日益進、先生既勵己行、以直方自居、從遊之徒莫不奉名教、唯謹、爾畏如大府、前後所見諸侯甚多、未嘗枉己而求見焉、進退必以禮、安貧樂道、終不復仕、然其志則曰、儒者之學折中孔子、孔子所祖述先王、歷聖政治之道、具存焉、用之則行、如有用我者、何以哉、故未嘗忘經世之用、故沼田侯好學愛賢、禮遇先生、先生亦深相得焉、侯在政府、嘗從容語、侯曰、方今遭不諱之朝、然時制所闕、無路居下、上疏陳事、純雖微賤、幸因侯而若得言、一二得失、或又觸聞、以賤人妄犯上、被嚴刑、萬一以身有補於濟衆、亦志所願已、不識可否、侯曰、一試乃可也、遂上封事、不報、然世已異、其特立而益敬、仰其非記、聞浮華之學、先生幼受孝經、論語於大翁、及學成、益尊尙焉、漢孔氏傳古文孝經久亡、彼方而獨存、吾邦因校訂諸博士家所傳、作音注、而刊之、復因沼田侯獻諸朝、政府諸公聞之、爭求於侯、侯爲竝貽焉、又本師說、更加所見、作論語古訓及外傳、又作家語增注、以爲此三者庶見孔子遺則、故用意特勤焉、先生強記且於事精詳、其考究書籍、一字不苟、過必歸正、然後止、他所著書凡數十、亦皆學者傳尙焉、書題併平日規行門人稻垣長章爲誌、松崎維時狀行、詳于二文、延享丁卯五月晦逝、年六十八、葬東都北谷中天眼寺栢樹翁之兆、初娶末松氏、無子、再娶前川氏、亦無子、子養阿武家之子名定保、元喬以同盟相識、三十餘年、乃願夙昔物夫子、二三子已先逝矣、天復不

封事一意見書

○春臺の事歴は松崎觀海の撰、行狀あり。服部南郭の墓記こゝに記す。太宰先生諱純、字德夫。號春臺。物夫子嘗爲其考栢樹翁、作墓碑、載在集。考以上具焉。先生生于信陽飯田、幼隨考東、稍長仕、出石侯、數年疾乞骸骨、三不許、乃自去藩、藩以輒去、錮之。西遊京畿、十年、是時物夫子唱復古學于東都、滕東壁、縣次公相助修業、而次公西歸、東壁乃願、夫子之門從游日多、然俊傑可與適、夫子道者猶未至、東壁幼嘗已同先生、受書、攝謙野先生者、服其敏學、因思先生、數書招之、會錮亦解、先生遂東至、則見物夫子、說其學、以爲得所、歸、乃事夫子、與東壁二三子講習古學、博文約禮、敦尚經典、物夫子歿、益詳究先王之道、孔氏之書、鬱爲大師、弟子諸侯大夫至、草野士日益進、先生既勵己行、以直方自居、從遊之徒莫不奉名教、唯謹、爾畏如大府、前後所見諸侯甚多、未嘗枉己而求見焉、進退必以禮、安貧樂道、終不復仕、然其志則曰、儒者之學折中孔子、孔子所祖述先王、歷聖政治之道、具存焉、用之則行、如有用我者、何以哉、故未嘗忘經世之用、故沼田侯好學愛賢、禮遇先生、先生亦深相得焉、侯在政府、嘗從容語、侯曰、方今遭不諱之朝、然時制所闕、無路居下、上疏陳事、純雖微賤、幸因侯而若得言、一二得失、或又觸聞、以賤人妄犯上、被嚴刑、萬一以身有補於濟衆、亦志所願已、不識可否、侯曰、一試乃可也、遂上封事、不報、然世已異、其特立而益敬、仰其非記、聞浮華之學、先生幼受孝經、論語於大翁、及學成、益尊尙焉、漢孔氏傳古文孝經久亡、彼方而獨存、吾邦因校訂諸博士家所傳、作音注、而刊之、復因沼田侯獻諸朝、政府諸公聞之、爭求於侯、侯爲竝貽焉、又本師說、更加所見、作論語古訓及外傳、又作家語增注、以爲此三者庶見孔子遺則、故用意特勤焉、先生強記且於事精詳、其考究書籍、一字不苟、過必歸正、然後止、他所著書凡數十、亦皆學者傳尙焉、書題併平日規行門人稻垣長章爲誌、松崎維時狀行、詳于二文、延享丁卯五月晦逝、年六十八、葬東都北谷中天眼寺栢樹翁之兆、初娶末松氏、無子、再娶前川氏、亦無子、子養阿武家之子名定保、元喬以同盟相識、三十餘年、乃願夙昔物夫子、二三子已先逝矣、天復不

先哲像傳

學之道
學立道存

師嚴然後道尊

先生之敬教成人

服部南郭肖像

服部南郭肖像
 服元孟
 元喬 子邊次
 南郭



服部南郭

服部南郭

謝安一字は安石陳國陽夏の人晉書に傳あり

南郭服部氏、名は元喬、字は子遷、俗稱は小右衛門と云ふ、南郭と號す。又不忍池の邊に住みてより、芙蓉館とも號す。其の先祖は尾州津島七黨の一なりといふ。曾祖に至り越中に移り、父を元矩といひ、北村季吟の門人にて、和歌を善す。南郭も此の道を究む。天和三年京師に生れ、年十四にして江戸に來り、十六にして柳澤侯に仕へ、繪事と和歌をもて出づるとなり。三十四の時致仕す。是より儒をもて生理をなす。徂徠に學びて、古文辭を修し殊に詩に長ず。門人の束脩、およそ年分に金百五十兩餘に及ぶとぞ。其の盛んなるたぐひなし。徂徠歿して後は、經義は太宰春臺を推し、詩文は南郭を稱す。自も又肯て講説を事とせず、また經濟を言はず、獨詩文にのがれ、雅致をもて生涯とす。嘗て唐詩選を校刻して、作家の模範をひらき、折に觸れては、繪の事を樂みとし、寶曆九年卒す、年七十七。品川、東海寺中、少林院に葬る。

○南郭は謝安に似たる人にて、喜怒色にあらはさず。人に構はず、我がもの好を立てられし人なりと高子式の評なり。又近來の學者皆酒量あり、仁齋のみ下戸、東涯も上戸、闇齋、淺見も上戸、徂徠は下戸、南郭春臺上戸なりと、松君脩云はれたりと。

別業一別莊

○南郭ある日、猗蘭侯の別業うきすやしきにて、數十年歌よまざるにふと詠じたりとて、

靜なる池の心を水鳥のうきすの波の立つとしもなし。

また檜垣寺古瓦の記、假名文めづらしと南畝莠言に載する、其の記に、

ひがきのおうな一檜垣の老女平安時代の人若き時は京都の妓女にて盛名あり老いて肥後に下り熊本附近白川に往す其歌「年ふればわが黒髪も白川のみつはぐむまで老いにけるかな」

ひがきのおうなのうた、その事をあはせて、後撰集大和物語にあらはれたれば、人みなしる處なり。今はその跡寺となりてなんあるといひ傳ふめり。肥後の曇龍上人ふる里よりふたよび東に向はんとて、ふるきを忍ぶかたくななる翁が心くせを思ひばかりて、かの寺の瓦を以て傳へあたへ給へり。朝夕なづさひみんに、硯になしてんとて、そのみちのたくみにことづけてこころむるに、いとかたしとて、いなびたれば、とどめにけり。さはれひくとはなしに琴を手まさぐりて、過せしためしもあらざらめやは。さるはことがらのいみじうむかしおほえて、もてあそぶばかりも、こころひとつにをかしきわざなりや。おのれめでたしと見るのみかは、上人のはるく、ふりはへたづさへたまへりし、こころづくしの海ふかき情もすてがたまよに、ならばぬ女もじして、かきつくれば、にけなくこそをこがましけれ。かつはかの白川のみ

づから思へば、老にける身の、今はた硯の墨の黒髪にたちかへるべきすぢもあらずか
し。硯ならでも、世をもてかぞふるものこそあれ、はかなきいのち毛の筆のすさみ
は、ながきもよしなしとて、かきさしてやみつ。

寶曆八年

七十六 翁 花押

むかしおぼえて古風に
ころづくし
親切
ふりはへ
わざく
をこがまし
馬鹿げた
硯ならでも
唐庚古硯
銘「硯之壽
以世數」

○南郭門下の諸生あつまりて、狂詩を作るといふ。「何の題ぞ」と問へば、夜發を詠ずといふに、南郭微笑して、「二十四文明月夜」と朗吟して過ぎられしとぞ。また常に語りて云ふ、「日本の畫は古法眼雪舟を最上とすべし、異國より來るとて人の賞する八種畫譜は、いはゆる町繪にして、見るに足らず、畫論は津速祕書中にあるにておすべし」と。南郭畫風は雪舟より出づる、周雪と號せり。今小林院に二三幅ありと。

○南郭著書目

大東世話

文筌小言

また校刻せる書は

左傳白文

南郭文集

燈下書

同絶句

儀禮圖抄

遺契

郭注莊子

張注列子

新刻蒙求

十八史略

唐詩事略

唐詩品彙七律

明詩選

同絶句

唐詩選

○南郭墓石には南郭先生墓の五字を鐫るのみなり。源頼順といふ卿の撰す墓誌を此に記す。

虚左之遇
優待
就木一死す
伯嗜一伯嗜
は後漢の蔡邕
邕の字、蔡邕
邕文名一時
に高し強ひ
られて董卓
に仕へ之を
匡救せんと
して行はれ
ず遂に卓の
黨と目せら
れて誅せら
る

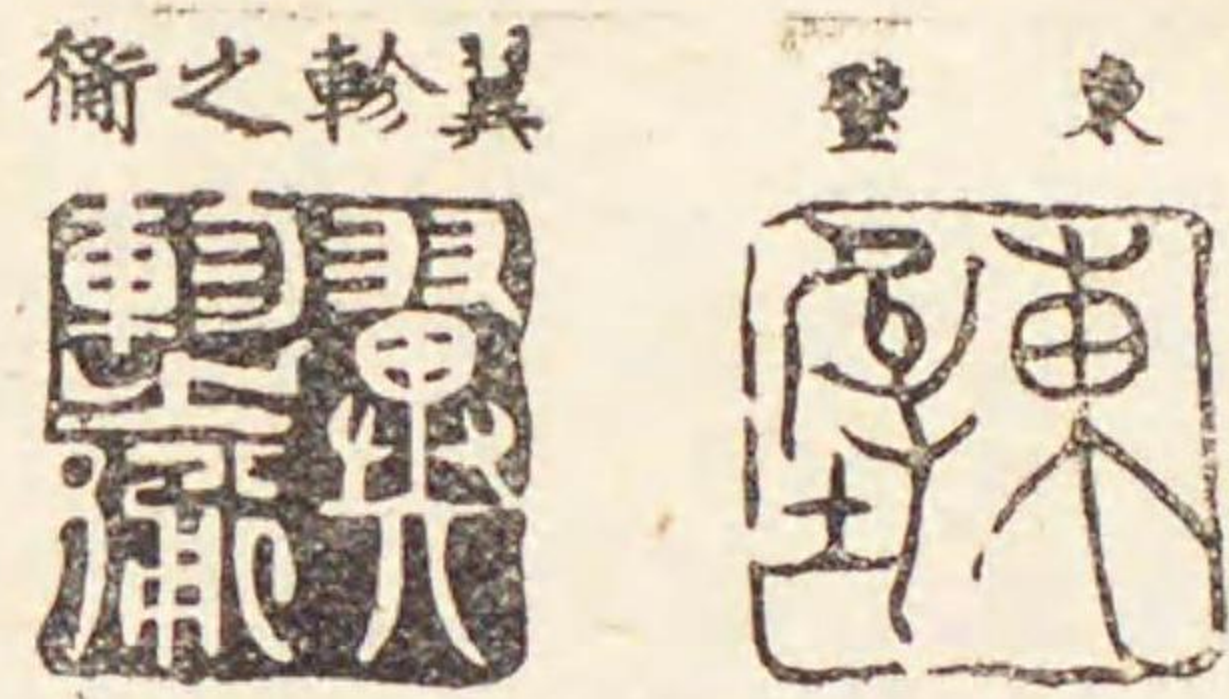
於戲是歲何歲。寶曆己卯夏六月二十一日。故處士南郭服夫子卒。壽七十七。門人ト某
月日。葬于萬松山中少林院。哀哉。其嗣名雄者赴余。且屬之誌銘。曰。「先人蒙公子虚
左之遇。久矣。今也就木焉。而先人常命孤曰。吾圖人後事。多矣。每臨筆硯。有伯嗜
之慚。一分腐生至微至賤。無咎無譽。固分爲世棄物。吾歿之日。爾慎勿貽伊慚於
人。幸有集之遺。千百歲而知者知我。於我足矣。雖然。豈使彼輩知者不知。爲何人。
於孤意。安而從之乎。欲狀之事。先人爲人。凡百行事。未嘗一言對妻子家人。語之。
自少而然。往歲雄舉一女。先人曰。先我之生。若干日。家人始知。生日九月念四。他豈
得。知而狀乎。唯其尾州津島七黨之一。曾祖父某徙越中高島。父諱元矩者。又移京師。
山本氏爲母。生于天和癸亥之歲。生而十四。來于東都。後二年。事柳澤侯。後十八年。
致爲臣而退。爲雄也。母者云之。孤不肖。不知所裁。伏乞公子遇吾先人。有終。爲

擁篲—掃除
 して人を迎
 ふること
 掘趨—衣を
 かいげ堂に
 おもむくこ
 と
 韶音—德音
 に同じ
 縫掖—儒生
 塞人—あし
 なへの人
 左契—典據
 文宗—文章
 の大家

孤圖之。余慘然對之曰。「孝子雄以吾從。縣官肺腑之末。爲制所拘。不得負笈門下。幸時蒙眷顧之惠。擁篲掘趨。韶音在耳。何日忘之。今聞吾子言。追憶高風。夫子誠其然乎。夫子於經術。述而不論。曰吾受業。徠翁。今日所授。則昔日所受也。遵奉唯謹。或問之以當世之事。則晒曰。縫掖之徒。不知事務。沾々對人。以空談自喜。何異塞人謀道。吾不敢。是所謂善易者不。論易者歟。蓋其奧所蘊。終世雖從遊者。不能測之。宜妻子家人。昧其平日之狀也。夫子德業。不可得而稱。余不佞。豈敢置一辭乎。且夫子待他人言。以顯于後者哉。物門之學風。驛天下。夫子與有大造。固無論矣。以余視之。我邦自有斯文。立言之業。能執其左契。經緯橫出。煥乎洋洋。具體而大莫盛於夫子。願隆世氣運所釀。天實成之。以華大東百世軌于斯文乎。率土之濱。問南郭服夫子何爲者。雖五尺之童。答以天下文宗。口碑莫尙焉。而吾子所屬亦有不可已者。姑記與吾子言者。係之以銘可乎。」雄唯々。夫子姓服部氏。諱元喬。字子遷。南郭其號也。娶井出氏。生三男五女。今唯三女存焉。其所著作。皆行于世。雄字仲英。弱冠師事夫子。夫子晚配其季女。承後能傳家學。文采頗有。夫子之風。亦歡于余云。銘曰。

鳳於飛。毛羽翼。翔千仞。德亦至。吁。夫子秀而粹。邈于古。出其類。若嶽立。盛斯事。仰彌高。功之次。鳳兮章。可以比。斯約者。參天地。

安藤東野肖像



安藤東野

東野安藤氏、名は煥圖、字は東壁、俗稱仁右衛門と云ふ、東野と號す。本姓は瀧田氏、その先は下野那須の一族なり。父を玄佐といひ、醫をもて黒羽侯に仕ふ。東野は天和三年下野に生る。服南郭と同年に生る。幼にして父母に別れ、孤身となり、安藤氏に養はる。よりて其の姓を冒す。また安を省きて藤東野と號す。初め春臺と同じく、中野搗謙に學び、寶永中柳澤侯に仕へ、書記となる。物徠徠に師事して、詩文ともに弁州を追暮して、護園中の能文なりと釋大典も褒稱す。初め徠徠復古の學、古文辭を唱ふるに當りて、世の學者猶舊聞に牽かれ、これを信ぜず。然るに東野并に山縣周南の二人早く徠徠の説に歸服し、是を贊翼せりとぞ。故をもて、徠徠も始終此の二子を遇する事他に異れり。東野詩文はさらなり。書を工みにし、また音律を善せり。年二十九の時致仕して駒籠白山に隱居す。是より自ら商丘丈人と稱せり。致仕の後も、柳澤侯よりなほ粟を送り優待せり。又猗蘭侯も是を殊に憐みたり。享保四年卒す。三十七。淺草淺茅が原福壽院に葬る。

弁州明の
王弁州
追暮—追慕
か

○東野は文藝の暇に音律を學び、よく笛を吹きたりとぞ。又此の肖像を見るに、容顏清らかに、鬚もなく、殆ほごんじび美少年に類せり。尤鬚なきことは徂徠の猗蘭侯に呈する書中に、且之子無鬚豈容俾ニシヤム字有鬚乎の語あり、證とすべし。

○東野遺稿三卷あり。是は徂徠其の名の終に朽ちんを恐れ、二三子に命じて、四方に散佚せるを集録せる者なり。歿後二十年にして始めて成れりとなん。

○東野は子なし、死後同盟の人々合贊して、墓石を營みしなり。墓石に其のよしを記す。誠に才學衆に超え、徂徠も稱して假これにかすに之以しをもつて年豈不佞之所能及哉と云はれし程にて、生涯貧寒にてありしは、護園徒中の不遇なる人物惜むべし。

○東野の墓碑文は服南郭撰す。又誌銘は秋澹園撰す。澹園文に、

贅一入智と
なる

先生姓藤、諱煥圖、字東壁、其先瀧田氏、爲奈須著族、父立佐君、贅而冒大沼氏、以醫仕、黑羽侯。先生以天和癸亥正月廿八日、生東野州、故學者稱之云爾、幼孤、養於安藤氏、遂籍東都、冒其姓、後見物夫子、更業儒、猶不忍復初、曰猶之藤氏也、寶永中、仕甲侯、進講經、憲廟于邸之宴、正徳元年、病免家居、猶且甲之廩致粟、如仕時、辭則又值西臺侯喜士也、廩乃繼自西臺、初家叡麓著園、後移

商丘、罹災寓西臺邸、以卒、享保己亥四月十三日也、葬淺茅原、春秋三十有七、無子、初遊物夫子之門、者殆盡乎海内之俊矣、而莫不推先生具體焉、語具諸君碑傳集序中、以不佞以正生同鄉、辱命志銘、銘曰、
盜勿發兮、先生之藏無金、牛羊勿踐兮、先生雖無後乎、悲夫友人之心、

山縣周南肖像



長門國明倫館祭酒章



源孝瑞印



山縣周南

周南山縣氏 名は孝瑞 字は次公 俗稱は少助と云ふ。周防の南鄙に生る、よりて周南と號す。父を良齋と云ふ。萩府の文學にて、濂洛の學をもて士大夫に唱ふ。周南は貞享四年に生れ、母は松村氏にて、第二子なりし。兄歿すをもて嗣となる。幼より穎敏常兒に異なり。殊に父良齋 周南を教諭して箕裘の業を續がしめんを欲し、毎日書を樓上に登せ、讀誦せしむ。その間は梯子を去りて下る事を許さず。年十九のとき携へて江戸に來り、徂徠に師事せしむ。居ること三年、業成りて國に歸る。其の頃徂徠の學業いまだ大いに振はず、たゞ東野、周南の二子のみ、互に羽翼となりて、是を補く。故をもて後徂徠大家を成すに至りても、二子をあつかふこと群弟子に異れりと。周南國に歸り、韓使李東郭、洪鏡湖等の學士來聘することあり、筆語唱酬して大いに國光を觀すとぞ。又國學明倫館の學規等を議し、祭酒となる。後病に臥す事前後八年。寶曆二年八月十二日卒す、年六十六。府城の北古萩里保福寺に葬る。

○原田東岳嘗て諸子を評して云ふ。「徂徠、東涯二先生は匹なり、然れども徂徠は堂にあ

なりし一なりきの誤本
書この類の語法多し
歿すをもて
歿するをもての誤、
また存す
箕裘の業
父祖の業
祭酒—學政
を司る長

稱首—中間
に傑出せる
もの

長涯—長愷
の誤

亂—齒のぬ
けかはる年
頃、七八歳

り、東涯は室にあり、これその別なり、南郭、春臺二子は匹なり、しかれども南郭は戸にあり、春臺は門にあり、蘭嶠、周南は匹なり、然れどもみな廊廡の下にあり。金華、士新二子は匹なり、しかれども皆門牆を望んで其の中に入るに能はず、宇氏最劣等なり、其の才の適當大抵如此」と筆疇に見ゆ。優劣はしらず、何れも稱首たる事見るべし。

○周南の詩、金華が參州にゆくを送るに、
休唱陽關三疊詞、陽關三疊不勝悲、送君多馬河邊柳、折自南枝至北枝。

○周南著書目に

周南文集

同詩集

爲學初問

養子説

講學日記

作文初問

○周南の事歴は服南郭の撰ぶ碑文、瀧長涯の撰ぶ行狀等に悉し。碑文に、

周南先生諱孝儒、字次公、一字少助、山縣氏、生于周南海北邑。因號周南。考良齋君諱長白、嘗以邑人、事長門公、族海北君。初長門先侯青雲公爲海北君嗣子、良齋君以師儒侍焉。及公繼封長門侯、從升公朝、移入萩府、時以碩儒、在公左右如初、有三男、長文興君早卒、先生以次子繼考業、天性穎悟、年甫亂、受句讀、輒誦如

兩伯陽—雨
森芳洲
朝勤—江戸
に參勤する
類宮—諸侯
の學宮

流、稍長通、四子五經大義、良齋君課子弟學、頗嚴、常戒讀書樓上、無故不得下、先生強力專精、日夜在樓、手不釋卷、於是四部群籍、百家雜說、涉覽之功殆遍、年十九、東遊、師事物夫子、夫子以修古爲本、經義文章皆由是出、時方始唱、和者蓋寡、獨有藤東壁從焉、先生至則大說其學、與東壁相視切劘、夫子亦自稱得其人、爾後物家之學日興、從者益盛、遂至海內靡然鄉風、吾黨至今以二子羽翼傳爲稱首、居東三年、業成而歸、正德三年、韓使來聘、朝命其所經群國、例當饗賓使、舟至長門封疆赤馬關館焉、侯乃遣諸文學待接、先生與焉、先生年尙少、而與韓諸書記、應酬敏捷、文才僑逸、韓人大賞異之、對州兩伯陽亦擯賓、坐次交歡、先生目以海西無雙、韓三使嗜先生所作、至因伯陽格外請見先生、詳見問答、崎賞及先生集中、於是聲名籍々、著聞海內、是後侍侯、及東侍世子讀、侯朝勤、則從東、就國、則從西、侯不欲先生離其側、享保十三年、良齋君卒、先生居喪極哀、是歲亦當從東、時喪期既闋、然至哀之情不能已、乞假願竟志一年、不許、強起從焉、歷仕泰桓公觀光公、間年西東蓋多歲矣、寵待益隆、先是先侯命創建類宮、使國人士弟游處、設師導、稟諸生、釋菜養老之禮、以時大聚群書、且六

倉尙齋—小倉尙齋

愷悌—やはらぎたのしみ
問燕—問暇
安息—安息の際
啓沃—心に思ふ所を開説して主君の心に注ぎ入るること

藝武技諸當_ニ教習_ス者悉備_ル其中_ニ事皆稽_ヘ古據_ル式_ニ雜_{フル}以_テ今制_ヲ乃既巍_ニ然中國_ニ而成_ル名曰_ク明倫館_ト先生先已爲_ニ侯獎_シ順其事_ヲ與議其制_ヲ於是崇化厲賢_ノ之道大行矣_ニ元文二年館祭酒倉尙齋卒_ス先生代督_テ館事_ヲ乃不復東_セ既爲_ニ祭酒_ト益立_ツ學規_ヲ訓厲有_レ方_ヲ育英之效日月益進_ム講誦習學絃歌之音不_レ斷_エ若_キ山子濯_ル田望之_ニ津士雅_ニ倉彦平_ニ縣子萼_ニ田子恭_ニ仲子路_ニ曾子泉_ニ林義卿_ニ瀧彌八_ニ縣會彦_ニ秦貞文_ニ彬々輩出_シ咸潤_ニ色_ニ先生之業_ヲ以_テ學顯_ル於世_ニ其餘士大夫不_レ必專_ニ學職_ヲ而傑然成_シ才_ヲ知_ル名者不_レ可_レ勝_テ計_ヲ長門好_レ學之俗_ヲ雖_ニ其天性_ト蓋先生教化之力_ノ亦多云_ニ先生爲_ニ人愷悌易事_ヘ其教諭也_ニ道而不_レ牽_カ開而弗_レ達_セ循々誘掖使_ム其自己_ヲ以_テ故生徒樂_ニ群親_ム師_ヲ遂致_ニ濟濟_ノ之盛_ヲ先生博聞之餘歷_ニ練時事_ヲ其執_レ經_ヲ陪_シ侯講筵_ニ或侍_ニ問燕_ニ啓沃_ニ諷諭_ニ陰盡_ニ匡濟_ノ之益_ヲ或與_ニ大夫有司_ト出_レ謀發_シ慮_ヲ忠告裨益_ス臨斷_ニ大義_ヲ則據_ル獨見之明_ニ侃々不_レ可_レ奪焉_ト人盡敬服_ス以_テ喬所視_ル其數東也_ニ同社之交固弘矣_ニ先生溫厚不_レ以_テ所長加_ヘ人_ニ毫無_ニ忌克_ト遊驩之際_ニ恢宏賞會_ヲ言談怡々如也_ニ皆無_ニ不推_シ尙其爲_ニ長者_ト先生嘗奉_ニ侯命_ヲ選_ス公室譜牒諸臣系譜_ヲ他所著行_ニ于世_ニ者有_レ文集_ヲ爲_ニ學初問_ノ作文初問_ノ若干卷_ト延享二年得_レ病_ヲ經_テ歲_ヲ不_レ已_ニ凡在_ニ榻_ニ八年_ト自_リ國相_ト憂_ル之者百方

矜式—敬ひて法らしむ

求_テ治_ヲ不_レ驗_ヲ以_テ寶曆二年八月十一日_ヲ終_ス年六十六_ト舉_ゲ國莫_シ不_レ悼惜_セ焉_ト葬_ニ國城_ノ北古萩里保福寺_ニ初配_ニ松村氏_ト生_ニ泰恒_ト元恒_ト卒_ス再娶_ニ長嶺氏_ト生_ニ允升_ト卒_ス又娶_ニ小野氏_ト生_ニ子天_ト小野氏卒_ス最後娶_ニ綿貫氏_ト生_ニ政恒_ト忠恒_ト長泰恒_ト字伯恒嗣_ト餘皆出_テ繼_ニ他族_ト既而伯恒具_ニ其狀_ヲ遠寄_ス余_ニ託_シ以_テ銘墓事_ヲ長門固富_ニ學士大夫_ト余不_レ可_レ敢奪_ニ其權_ト且耄夫廢業不能_レ文_ス奚足_ニ爲_ニ重_ト然既命矣_ニ願_ニ久辱_ニ兄弟之誼_ヲ親好匪_レ他_ト今不_レ可_レ辭_ス乃承_ク其狀_ヲ略叙_シ始末_ヲ敢係_ニ以_テ銘辭_ヲ其辭曰_ク致_ス君_ヲ以_テ道_ヲ師_ニ儒_ノ之得_ヲ興_シ學_ヲ化_シ民_ヲ不_レ有_ニ君子_ト焉_ト大_ニ其國_ト德_ノ之不_レ朽_チ維_シ誰_ガ之力_ヲ永_ク言_ニ矜式_ス

平野金華肖像



平野金華

金華平野氏、名は玄仲、字は子和、俗稱は源右衛門といふ。金華と號せしは、もと東奥の人ゆゑ、金華山を表徳せるなり。元祿元年に生れ、幼にして孤となり、才鋒人に勝れ、初め東都に來り、醫を學びしが、素より其の志にあらず。後徂徠に見ゆるに及びて、忽刀圭を擲ちて、儒生となり、修辭復古ををさむ。其の人となり豪飲を好み、劉伯倫のごとく、家産是が爲に乏しけれども、聊意とせず、頗る任俠の義氣ありしとぞ。儒生といへども、架上には唯僅に左傳、禮記、莊子、通鑑等の抄録數冊ありしのみにて、文章を撰べるに及んでは先此の書冊を數篇閱して、後一時に筆を下して、人を驚すの語を吐出せりとぞ。後に守山侯の記室となり、享保十七年七月二十三日卒す、年四十五。駒籠蓮光寺に葬る。私諡して文莊先生といふ。

○金華は尤奇を好む人にて、其の家に一妾一僕ありて、妾の名を月小夜といひ、僕の名を染之助といひよし。又猫を好みて十八疋ありしとぞ。又妻の衣服を著して君に見え佳節の賀を述べしことありしとぞ。實に世を傲弄する一奇人なり。されば南郭の送る序

傲弄する
馬鹿にする

にも、子和者東奥一奇士也といひ、また滑稽不窮。人々不能屈之などいへり。春臺の送る序にも、子和狂生也。又助以酒など見えたり。

○金華の著書、金華文集、是は守山侯の集録して上木せりとぞ。金華訓點の劉向新序あり。猶此の外も有るべし。金華嘗得意の文章一篇を持ちて、室鳩巢に調し、強て改正を乞ふ、鳩巢よりて其の中二十字を除き、五字を加へたり。金華喜ばず、南郭に質す。又決定の評なし。二通に寫し徂徠に示す。徂徠何様十五字餘れりとて嘆賞す。これより南郭、金華、室氏を稱美せしむ。

○金華早に深川を發する詩、

月落人烟曙色分、長橋一半限星文。連天忽下深川水、直向總州爲白雲。

徂徠自、此の詩ならびに南郭の墨水を下る詩、蘭亭の又江に泛ぶ詩と三首を寫し、壁に貼して、鏘然たる玉振の聲得易からざるものなりと稱せしとぞ。

○金華の碑文は服元喬の撰なり。

先生姓平、諱立中、字子和、奥人也。因號金華。早孤。既冠族人謀令學醫東都。數年非所。其志更爲儒。初從徂徠物先生、問修辭物先生、亦視一隅已未幾。出其

狂簡志大にして事に疎略なり

搯擊一奮激

所爲所未嘗聞、如探諸懷、是時物先生方誘進英才、乃大寄之、顧謂喬等曰、未嘗見進取如斯人、古狂簡哉、吾無所裁、乃日夜益憤勵、所著必機軸於己、遂稱大著作、云、爲人磊落、好倣儻瑰璋之事、故其結撰每欲驚人、又滑稽多端、傲弄一世、以故或見謂狂好、奇、然性喜善疾、惡、視人善不啻自己、若將加諸膝、不置、飲酒恍惚時或激烈至泣下、一有惡聲及其所善、搯擊欲反之、甚於己私、後乃稍々折節、然其義氣著於心本、時發於感慨、有似而非者、盡害君子、乃曰、彼何人、斯爾居徒幾何、嘻笑耳、然亦微示其絕、作文恆稱、獨不見斗量乎、人非不容而出之二參、我即一斗亦用、一石亦用、不知其他、卒後探其家、素貧不藏一書、所抄數卷已、人始服其才量、後爲守山侯儒童、年四十五卒、享保十七年七月廿三日也、葬東都城北蓮光寺、配神田氏、生三男二女、長元幹、字國禮、女甫十一、餘皆未亂歿、先生貧甚、而其所善者至擊鮮極、未嘗以寒爲辭、每至令有急不得去、其愛人亦出天性、及卒、知與不知皆爲流涕、既客死無親、則姻家諸友爭義營葬、遂立石、守山世子好學、師重先生、先是刪其稿、行于世、於是世子即謚文莊先生、命喬作碑、喬已爲友、二十餘年、先生率不可人、而推喬居

一日長^ニ亦其義氣所^ノ許^ス乃爾^リ皆謂如^ク眞兄弟^ニ至^ル素服受^ケ弔^ヲ遂不^ニ敢辭^セ作^リ銘曰^ク
 天假^シ其文^ヲ不^レ假^サ齒^ヲ千載慄^ト神不^レ死^セ神不^レ死^セ兮安^セ其理^ヲ
 先生之墓觀^ニ此里^ニ

宇佐美瀧水
 中
 美
 瀧
 水

宇佐美瀧水肖像



宇佐美瀧水

瀧水字佐美氏、名は惠、字は子迪、俗稱惠助と云ふ。上總夷瀧郡の人、よりて瀧水と號す。其の先祖は越後の勇士にして、謙信に従ひ、數度軍功をあらはす。中葉南總に移り、世々豪富をもて聞ゆとぞ。瀧水は寶永七年に生れ、十七歳の時、江戸に來りて、祖徠に師事し、その塾に居る事僅に三年、師祖徠歿す。夫より社友と共に切磋して、その學を修めたり。江戸に在る事六年にて、古郷に歸り、その後再江戸に出でて、遂に儒をもて出雲侯に仕ふ。かく瀧水、祖徠の教諭を受くる淺しといへども、師恩を報いんをもて任とし、その遺書を校刻して世に廣むる志厚く、遂に祖徠の四家雋、古文矩、文變考、絶句解、南留別志等の書みな其の手に成りて、刻行す。祖徠高足の弟子も、其の功には遙に及ばすとぞ。其の厚義尤賞嘆すべし。瀧水一男ありといへども、多病にて家學を繼ぐ能はず。ゆゑをもて嘗て片山兼山を養うて子とせんとす。然るに兼山も祖徠の説を喜ばず、こゝをもて終に不諧に及び、後姪徳修を養うて嗣とす。安永五年六月十六日卒す、年六十四。四谷戒行寺に葬る。

不諧—不調

物故—死す

○瀧水雲州侯に仕へて、一時に名高く、從遊する者も多く、中岡豊州等の門人も出來たり。此の節力士嵯峨ヶ嶽同じく雲州侯にありて、角抵場に名高し。されは嵯峨ヶ嶽と御同藩故かめつたに名は高けれど、元の出が一農夫などの誹謗もありしなり。また此の比は護園の徒みなく物故して、瀧水のみ生残りて、よく物氏の遺訓を守れば、人の尊尙も又多し。彦根の野公臺、會て物門の徒の追々下世せるを傷みて、瀧水に贈る詩あり、因に記す。

感述贈宇瀧水

仰慕護園夫子尊、生來不速遊其門。室家之美雖難見、私淑於人飽受恩。信陽已歿周南逃、二子風流不可觀。會見南郭服先生、夫子道存于目擊。又就高生問作詩、後從餘子論屬辭。高生服生相繼逝、今年餘子忽然萎。龜山松子我畏友、切磋問難交已久。往歲倏爲地下郎、天假之才不假壽。斯文寥々長已矣。耆德唯餘宇瀧水、此翁七十矍鑠哉。躬任斯文力未弭、家藏萬卷積如山。考索群書手自刪、斷簡殘編日就緒。護園遺草出人間、梁壞以來五十年。典刑獨有此翁傳、酒間且說牛門事。享保風流在目前、君不見世儒紛々知道希。各持門戶

譽鏢—老健
人間—世間
社會—
梁壞—こゝろ
死、禮記檀弓—泰山其頽乎、梁木其壞乎、哲人其萎乎—
牛門—江戸牛込

餘子の熊耳
大内熊耳
姓は餘

争^フ是非^ニ。物換星移人代改^ル。微^{セバ}君吾輩與^ニ誰歸^{ラン}。
と見えたり。

詩中に云へる護園の祖徠は享保十三年に死す。信陽の春臺は延享四年死す。南郭の元喬は寶曆五年死す。高生の蘭亭は寶曆七年死す。餘子の熊耳は安永五年死す。此の年瀧水も死せり。

○瀧水歿せる安永五年には、有名の人多く謝世す。餘熊耳を初め、鹿門大雅堂、藤益道、鷗士寧、田村元雄、物道濟、鈴木煥卿、蘆東山等なり。されば濫井太室が知己五人を悼む五哀の詩あり、字瀧水を哭する詩あり。

有^リ松爰在^ニ高山雲^ニ。企^テ不^ラ可^ク及^ビ唯^ニ同^ク。開^テ蹊^ヲ終^ラ身^子是^レ勤^ム。呼^ビ子^ヲ不^レ應^ジ且^ニ何^レ去^ル。
心腸苑結迂哉紛^{ナル}。

○瀧水著書目に

絶句解考證

補編

○校點の書は

辨道考

護園錄

辨名考

訓點千字文

古文矩文變考

絶句解

同拾遺

南留別志

王注老子

○瀧水墓碑銘は服元立の撰文なり。

瀧水先生諱惠。字子迪。南總人也。其郷有瀧水。因號焉。安永五年丙申六月十六日。罹疾。八月九日逝矣。享年六十七。葬^ル東都城西四谷戒行寺域。於是門人岡伯固。本文卿。造^リ余且致^ス孤子業辭。相與謂^フ。將^ニ石^ニ彼^ノ輩如^ク者。請^フ爲^シ誌焉。余辭^ス不^レ文。一子曰。願^シ當^レ今與^ニ我師^ニ爲^ル通家^者。與^ニ有^ル幾^カ。子有^ニ三^ニ世交誼^也。其可^ク爲^シ辭哉。余因按^テ其譜。南總岩熊縣。字佐美八左衛門者爲^ル先生五世祖。其先字佐美定行之族也。相傳天正中。自^レ北越^ニ徙^ル南總。以^テ勇聞^矣。定行者稱^ス駿河守。祐茂十二世孫祐孝。生^シ道盛孝忠。孝忠生^シ定行。仕^テ北越謙信。數^ニ有^リ功。爲^シ謙信。誘^フ信州上田城主長尾政景。隙^ニ舟^ヲ沈^メ之湖中。而共^ニ死者也。詳存^ニ古記^ニ。其族者名稱^不錄。不^レ可^ク得^テ而知^ル焉。自^レ岩熊字佐美氏。世々稱^ス八左衛門。至^リ考千里君。稱^ス七左衛門。娶^テ吉野氏。生^シ先生。君一號^ス習翁。性英敏好學。始^テ教^ル總人。以^テ桔槔^ヲ搵^シ水。又見^テ南總之東海多^ク颶。漕粟船時々覆没。謂^フ海口闢^キ港容^ニ船^ヲ瀧水。則^レ有^リ所^ニ泊^ル。可^ク以^テ無^ク患。是非^ニ私利^ニ聞^ク之。官^ニ而事^不成。居民到^リ于^レ今。惜^ム之。履歷詳^ニ先生所^ニ著^ル君行狀^ニ。先生以^テ寶永七年庚寅正月二十三日。生^ル。十一歲受^テ句讀

桔槔はれ
つるべ

同縣利倉壽仙氏。十七歲。千里君命至東都。事物子。時平竹溪先生在塾。乃意獨識。忠於物家者。必先生也。相與日厚。因留二年。而物子歿。尙與社友講習。凡六年而歸。於是築一室。號陽谷。讀書其中。其歸也。携倉美中。養之五年。蓋以爲切磋之友也。享保中。官命物叔達。校七經孟子考文。先生與而有功。賜金。先生在鄉。經十餘年。會西遊探名山古寺。多求遺書。而再遊東都。居麴坊。亡何遷芝三島街。學益精勤。從游甚多。後仕雲藩。爲儒官。恩遇殊渥。數上言爲政之要。每見嘉納。及與諸大夫論經濟。亦依其說而行。大有補助。寶曆中。侯奉命繕修比叡山諸堂。侯所獻銅燈。使先生作銘。有賞。又使著酒色論。以爲監戒。初配金綱氏。生一男一女。而卒。男名時敏。女幼歿。再配中山氏。無子。亦先卒。以時敏多病不能繼業。養姪德修。字子業。爲嗣。先生爲人。忠臣嚴整。視人善。若惟已。既爲一世儒宗。是以自諸侯大夫士。以至庶人。受業者日盈。然而不執師禮。請之。雖諸侯而不復答。小泉侯禮待尤厚。且用先生策。至早歲得水不乏。若夫燕飲。則曰。學者各苦任重道遠。息於是游。於是唯何戚々。溫顏接物。申々如。因是人畏而愛焉。先生嘗以爲物子著作治博。已布海內。而漸歷年所。觀者或昧典故。則有不合其義。於是悉取其書。

訓詁—註解
丹青—彩色
畫

儒夫—心の
おちけた
る者、孟子
「聞伯夷
風者、頑夫
廉、懦夫有
立志」によ
る

重校定之。研精訓詁。炳如丹青。已有刊行者。其未脫稿者。將嗣梓焉。他所自編著。有詩書。小序。絕句解考證。補備編。絕句解遺考證。行于世。晚搜於護園。得物子著述書目所。不載遺稿數十冊。大喜曰。一加我數年。以卒業。猶可以繼夫子志。可謂物家之忠臣焉。而先生逝矣。惜哉。雖然。既已爲儒宗。遺厚於後進。使有所矜式者。豈獨忠於物家而已。銘曰。

非周何成。不勤誰倚。先生言行。儒夫立志。

先哲像傳終

近世畸人傳序

鶉居穀食以頤志。牆東竈北。不與藪澤二其趣。而不以高逸自處。椎拍斲斷。與物宛轉。肆情坦率。不自檢括。而非所謂任誕也。冥外以護內。雖不爲同異。亦有所不爲。而非所謂狷介也。或才藝絕人。而不求售於世。土木形骸。樸野如愚。或經術吏才。取仕於封君。而行藏不拘。以規矩夫。謂之獨行乎。曰非也。稱之卓行乎。曰非也。其人固非四科之屬。其行不可以一端指名。不得已而強題之曰畸人。畸者何。曰畸者奇也。其間有儒而奇者。有禪而奇者。有武弁而醫流。而詩歌書畫雜伎家。而奇者。要皆爲一奇所掩。人不復知本分爲何人。故概以畸人目之云。熊生世純。好奇之士也。從近世上邇勝國。得所謂畸人者數十員。欲狀而傳之。自歉于聞見不廣。詢諸伴蒿溪氏。蒿溪氏曰。余之素志也。余既衰次。至若干人。請合而一之。熊生善畫。乃冥搜貌神。其於服飾

器用亦皆原其代所尚。而一筆不苟下。高蹊氏以國語爲文。宏贍簡遠。妙盡情態。頗似臨川王形容晉人。夫其人既以畸稱之。固弗求聞達於當時。豈復屑屑乎自圖不朽者耶。大約年代浸遠。聲迹湮晦者十七八。二子其奚自而得之也。蓋就其宦地鄉閭跡之。或訪之耳孫遺友。或得片言隻事于敗冊蠹簡。百方蒐羅。鑽燧屢改。而纔就緒。且其事必覈實。其言必有根。至於好事者。自後附益增長者。概乎無取焉。視之彼顯人名流之宗系言行。粲然可臚列者。則勞逸爲何如也。一日。高蹊氏以首簡授余調序。余曰。此範世矯俗之書也。請急傳之。或難曰。若人之畸也。是惟性分所至。固非學而可企矣。詎可以爲範乎。曰不然。以余觀之。凡此諸人。率性而動。各求其志。其迹雖或失中行乎。至乎其不屑於當世之名利。則一揆耳。故雷霹之琴。火成之鑠。自然成趣。非待繩削而然也。夫經藝文綵。足以黼黻治具者。一技一能。通乎精微之蘊。

幅巾塵尾。經笈幡屨。談性理而折天人之際者。曲肱拄杖。講經論據。巨利者。世固不乏其人。而大抵與古之聖賢。其骨格終不相類者何也。唯名之與利。爲之崇也。嗚乎。此數者。皆人之所甚難能。而遺名利之難。又有甚焉。則名利之累人也。豈特焚車攫金之類而已哉。莊周有言曰。彼其所殉仁義也。則俗謂之君子。其所殉貨財也。則俗謂之小人。有味乎其言之也。今觀傳中之人。其於古之人也。未知如何。然已有典刑存焉。故其流風餘韻。猶足以使夫貪婪躁進之士。一披其卷。赧然自省。幡然易摻矣。謂之範世矯俗之書。亦不爲過也。若夫樞其貌。蠟其言。外遺名利。而內以爲名利之鈎者。乃此書之罪人也。寶鑑旣懸。而妖魅無遁形焉。序而勸其傳。不亦宜乎。

峇

序

寛政二年歲集庚戌春三月六如散衲慈周敍於峨阜無著菴

近世畸人傳

題言

○此の記は、はじめ花顛三熊ぬしの勸によりて草す。其のことはぬしの跋に書ければ再びいはず。畸人をもて目すといへども、其のはじめ隠士を集むるの志に出づれば、世に知られぬ人、又名は聞えても、其の傳つばらかならぬを探りもとめて録せるが多し。

○吾が黨の人、此の草案を見て曰はく、莊子に所謂る畸人も、自畸人の一家也。此の記は始に藤樹益軒二先生をあけ、次々にも徳行の人多し、こは畸人をもて目まべからず、人のなすべき常の道ならずや、いかにと。予曰はく、然りしかれどもおのれが録せるところの意、子が思へる所に、少しく異也、唯廣く心得られよ、此の中たとへば、賣茶翁、大雅堂の類は、子がいはゆる一家の畸人也、仁義を任とせる諸老、忠孝の數子のごときは、世の人にたくらべて行ふ處を奇とせるなり、是をたとへば、長夜の飲をなして、時日甲子を忘れたる儕の間に、獨おほえたる人あらむには、奇とい

ふべし。さればおのれが沈湎ちんべんし眼には、常の道を盡せるが奇と見ゆれば、又おのがごとき人にも見せばやと、聊か人の爲の志をもてあぐるなり。たとひ題名に負くの諷を負ふも又辭せざる所なり。又詰りて曰はく、しかはあれど、此の中産を破りて風狂し、家を忘れて放蕩せるもあり、徳行の奇にたぐひがたしといはまし。曰はく、風狂放蕩かくのごとしといへども、その中、趣味あり、取るべき所あるを擧ぐるなり、玉石混淆に似たれど、彼も一奇なり、此も一奇なり、しひて繩墨を引きて咎むべからず、唯風流に漂ひ、不拘まじに蕩けて、不孝不慈なると、功利に基し、世智に走りて、不忠不信なるは、奇話の一笑に附すべきあるも、こよに收めざるのみ。

○高僧宿儒及び詩歌書畫の名家に、一奇のいふべきなきはあらじ。しかも盡くこれをつとへば、高僧傳儒林傳のごとく各一家をもて號なづべくして、此の書の本意にはあらず。はた一道に勝れぬる人は、吾が擧ぐるを待たずして、不朽に聞ゆべければ必ずとせず。又廣く求めなば、なほ隠れたる人も得ぬべけれど、或は此の撰みの事をほのめかせば、さらばかゝる人を收め給はれとことごとく語りなすを、其の筋につきてことかたよりよく聞き正せば、小笹を執りて千尋の竹ともいひ

なせるあり、あるは、生けるを亡きになしてこふもあり。是に懲りて此の事をば大やうは語らず、只おのれ年比よく聞きしめたる古人、又相知る人の、哀ともをかしとも心にとどめしを、こたびの私に追慕せるのみ。またもとより三熊ぬしの聞正せる人も多し。尙出すべき人の、其の傳を知らざると、今ある人の世を見はてむのちにはと思へるなどは、三熊ぬし此の後年を積みて拾遺の志あれば委ぬ。おのれは今六十にとり桑榆かけせまれば、再びの撰は期せざるところなり。

○當時生存の人は此の撰にもらず。なべて人の一生は棺をおほうて後定むべければ也。又貴人は奇のいふべきあるも憚りて洩す。また仕官の人の、尠きは、奇は大やう窮厄の間に聞えて、得意の人に稀なればなり。

○其の傳つばらかなると、略けるとあり。唯聞くまよにす。はた文體も一樣ならず、雅俗其の事に従ふといへども、大やう心得やすきを旨として、詞華を莊たからず。唯筆拙きからに、達せざること多からむはいかゞはせむ。

○傳の後、傳の中にも、愚按をもて議論し、是非せるものあるは、大やう私云、按とのみ記す。されども、若前もに他人の評あるは、是に混ぜざらむが爲め、蒿蹊云と愚名を

擧げて別つ。固よりかく思ふがまゝに評せるは、或はあたらす、或は刻薄なることも交るべければ、憚なきにしもあらねど、思ふ事言はでえあらぬは、心狭きの疾なり。願くは見ゆるされなむ。

○假名遣は、大かたの歌よみの思へるにはたがひて、いにしへが正しければ、契沖阿闍梨、和字正濫を著して、つばらに例を擧げらる。今おのれがそらにおほえしひとつをいはず、梅は今のかなむめなれば、あなうめに常なるべくも見えぬ哉といふ古今集の歌を見て、これは物の名なれば、まけてかく用ひられしといふは、絶えて昔を知らぬ人也。萬葉集の文字假名に、みな「烏梅」「字米」など書るに、順和名抄にも「字女」と訓を付けたり。凡古き假名は古事記、日本紀より、延喜式を經、和名抄まで、久しき世を重ねみなひとし。此の間新撰字鏡、靈異記のごとき古書皆たがはずされば、おのれは常に古き假名にしたがへば、今も亦これを用ふ。今にのみなれたる人恠しむべければ、わきていふ。

○諸儒は號をもて題す。號を知らざる人は字をもてす。僧家はすべて字をもて通稱とすれば、是に従ふ。其の他氏名連ねあぐるも、通用に従ふなり。あるは國を冠り

し、郷名里名を冠らせるも、いひならはせるまゝにて、差別に意なし。固より是は姓氏知られざる程の人なり。

○草本は、傳を追うて畫を附すといへども、其の事實は奇にして、畫に興なきものは是を除く。また傳のうへには、さのみ用なきも、畫様をとどめて人に知らしめむと思へることは、圖す。是三熊氏の志なり。ぬしが跋に洩せるをもてこゝにいふ。

天明八戊申歲水無月

閑田子蒿蹊 自述

目錄

卷之一

序 中 江 僧 長 若 伊 駿 河 近
 藤 桃 山 狹 藤 府 內 江
 樹 水 宵 子 子 介 義 清 新
 附 水 子 子 亭 奴 七 六
 蕃 樹 水 子 子 亭 奴 七 六
 山 附 水 子 子 亭 奴 七 六
 氏 附 水 子 子 亭 奴 七 六

題 貝 僧 甲 樵 同 宮 木 大 龜
 原 無 斐 者 筠 揚 和 田
 益 能 栗 七 久 久 利 伊 和 田
 軒 能 子 兵 兵 兵 兵 麻 伊 和 田
 言 能 子 衛 衛 衛 衛 子 麻 伊 和 田

卷之二

荷田	隱士	中倉	僧	岡	北村	賣	同	石	遊	小野	寺	米屋	三宅
賀茂真淵	長流	忠宣	別首座	周防守	篤所	茶翁	市兵衛	野權兵衛	女大橋	秀和妻	井立溪	與右衛門	尙齋
滿附	姪在滿	山中奇人								秀和妻			附妻女
桃山	僧			青木	西生	江村	隱士	遊女	尼	大石	內藤	僧	
今井似閑	契			長廣	永濟	專齋	石臥	某尼	破鏡	氏僕	平左衛門	鐵眼	
海北若沖	沖附			圓空		附剛齋		附曲翠					
野田忠齋	門人			僧俊乘									
高倉街乞丐													

卷之三

位田	山科	小西	文展	相者	太田	僧	僧	僧	柳澤	求大	苗村	高橋	久隅
儀兵衛	農夫	來山	狂女	龍袋	見良	佛行坊	蓮	洪園	雅僧	雅僧	介洞	圖南	守景
評中五名									附妻女		附妻女		
手車翁	金蘭齋	加島宗叔	長崎餓人	森金吾	猩猩	僧		池大	澤村	澤村	手島	北村	土肥
				吾	々	日		雅附	琴所	堵庵	堵庵	祐庵	二三
				附僧覺芝	庵附	初		妻玉瀾					
				佃房									

卷之四

廣澤長孝
 僧 惠潭
 祇園 梶子附 百合子
 惟 然 房 太

僧 似雲
 矢部正子
 室町宗甫
 淡海狂僧

卷之五

並河天民附 馬杉亭安
 北山友松子
 隱家茂睡
 安藤年山附 朴翁
 有馬涼及
 北村雪山
 龜田窮樂
 松本 馱堂
 白幽子
 美濃 隱僧
 山村通庵
 僧 圓通
 甲斐 德本
 井上通女
 僧 丈艸
 戶田旭山
 並河天民附

近世畸人傳

卷之一

中江藤樹 附蕃山氏

江西琵琶湖の西

轉封—國替

藤樹中江氏、諱は原、字は惟命、通名與右衛門、江西高島郡小川邑の人なり。藤樹下に産れ、後藤樹下に學を講ずるをもて、門人此號を稱す。又夢中人ありて光嘿軒の號を授くると見て、光の字を、謙遜し省きて嘿軒と稱す。僻地に生るといへども、兒として野鄙のならひに染まず。九歳の時、祖父吉長嗣とせむと請ひて、その在所伯耆に伴ふ。祖父手筆に拙きを悔いて、勉めて此の子に學ばしむるに、其の書、人驚くばかりなりき。十歳の時、伯耆の太守加藤侯伊豫大洲に轉封せらるゝ故に彼所に移りぬ。十三歳の時、祖父賊をうつ事あるに、少も恐るゝ氣色なく、祖父の命をうけて賊を捕へむとす。志氣幼

遺受—物の
やりとり事

四書大全—
三十六卷、
明の胡廣等
奉勅撰
聖學—聖人
の學
致仕し—官
辭し

江陽—其郷
里小川村

くして既に此のごとし。はた一物の遺受も甚謹みて、羞惡の心深く、一食を喫しても君父の恩を思惟す。十七歳の時、京より禪僧來て論語を講ず。その地の士風、武を專にし、文學の業を弱とし、敢て聽く者なし。唯先生獨り往いて聽受す。論語上篇を終へて僧京に歸りし後、又師とすべき人の無きを憂へて、四書大全を購ひ得て熟讀す。然れども他の誹謗を憚り、晝は終日諸士と應接し、毎夜深更に及び二十枚を見るを業とす。已後も師なくして、困學年を経、ひとへに聖學をもて己が任とす。然るに、其の母氏老いて故郷に獨りあるを悲しび、再回暇を乞うて歸省し、直に是を倡ひて伊豫に歸らむとせしに、はるけき波濤をしのぎ他國にうつる事を欲せず。故に致仕して歸らむと乞ひ、且つ二君に仕へ出身の意あるにあらざる事を天に誓ひけれども、其の才徳を惜みて許されず。二十七歳の冬十月終に逃げざる。(このことをとりて本朝孝子傳に出す)その時、今年の祿米悉く倉に積み置き、郷に友人に假貸し米穀あるをば、器物を賣りて是を償ふ。江陽に至るとき、銀纒三百錢有りしを、祖父の時より使ふ者、よる所なからむを憐みて貳百錢を與ふ。そのもの賜ふ事の過半なるを痛み、敢て請くる志なく、只從ひて艱難を共にせむといへども、先生強ひて與へて歸せり。此の後かの誓のごとく終身出仕へず。其

格法に泥む
—儒教に三
十にて室あ
りと云へる
事
五更—正子
十二時
格套に云々
—規則に拘
泥する事
圭角を持つ
—角だつ

の志を高尙にす。初僕に與へし殘の銀百錢をもて酒を買ひ、また農家へ賣りてその聞のもて母氏を養ふ。後又刀を賣りて銀十枚を得て、是をもて米を買ひ、農家に借す。息を取る事世人より甚減する故にや、其の債を責めずして皆是をかへす。三十初て娶る。格法に泥む故とぞ。其の女容貌甚醜ければ、母氏憂へて出さむと欲すれども、先生固く辭す。此の婦容貌醜しといへども、性質甚聰明にして、心を用ゐること正し。常に諸門人會して、夜半或は五更に及べども、終に先生に先達ちて寝ねず。居常小事といへども、命を受けざれば行はず。先生從來朱學を尊信し、門人に示すに小學の法をもてす。故に門人格套に落在し、拘擥日々に長じ、氣象漸く迫りて圭角を持す。先生三十有餘、陽明全書を見しより、その非を覺りて門人に示して曰く、「格套を受用するの志は、名利を求むるの志と、日を同じうして語るべからずといへども、眞性活潑の體を失ふ事は均し。只吾人拘擥の心を放去し、自の本心を信じて、其の跡に泥むことなかれ」と、門人大に觸發興起す。又語りて曰く、「予嘗て山田氏に贈るに、三綱領の解をもてす。其の至善の解に曰く、事善にして心善ならざる者は至善にあらず、心善にして事善ならざる者もまた至善にあらずと。此の時予未だ支離の病を免れず。故に誤りて此の如く解す」と。門人問ひ

破綻ある
不完全な
郷原—地方
に評判よき
小人
狂者云々—
論語子路篇
に出づ

孝經—孔子
が曾子と孝
道を論じた
る書、古文
今文の二種
あり

ていはく、「此の解甚親切明當なるを覺ゆ、如何ぞ支離とする」先生云はく、「心事元是一也。故に事善にして心不善なるものいまだあらず、心善にして事善からぬ者もまた未だこれ有らず」門人曰く、「狂者の如きは其の心高大なれども、其の事破綻ある事を免かれず。郷原のごときは事は君子に似て、其の心汚る。是分明に心と事と二つなるにあらずや」先生曰く、「狂者未だ入らざる精微中庸」故に斯のごとし。郷原は世に媚び許容を求むるの穢れし腸より顯はるゝ事爲なれば、もとより善とすべからず。跡の似たるをもて善とするは、功利の意也。然るに、或は曰く、大なる哉、此の道、盗人も亦是を得ざれば功をなす事能はず。入る事を先とするは勇なり、出づる時後るゝは義也、分つ事均しきは仁也、此の三つを得ざれば大盗を成す事能はずなどいふ説は、笑ふべし。悲しむべきものなり」といへり。又近年専ら孝經を講明し、常に愛敬の二字を掲出し、心體を體認せしむ。曰く、「心の本體原本愛敬的、猶水の濕ひに従ひ、火の燥くに付るがごとし。只吾人種々の習心習氣に凝滞せられて、心體の明蔽はる。然れども、親を愛し、兄を敬するの心、且赤子を見て慈愛する心は未だ滅びず、時ありて發見す。此の心を認めて存養して失はざるときは、則聖人の心なり」以上は、先生家學を起して後の教示なり。世にしる人稀なる故



翁問答一鑑
草と共に木
文庫の一藤
樹文集一に
收む
書賈一原本
書價とあり
大成論一醫
方大成論五
卷、元彦明
公撰
食頃一少し
の間

に掲出す。およそ書を著はさむとして筆をたつるもの、大學啓蒙、孝經啓蒙、藤樹規
并に學舎坐右の銘、原人、持敬圖說の類、尙二三ありといへども、或は初の著述後の意
に愜はずして破り、又數年多病の故に、業を果さずして止む者あり。論語も郷黨の篇よ
り先進二三章に及びて業を終へすとぞ。今傳はるものすくなし。但し郷黨の解は刻本な
るを、予少年の時骨董舖にて見し事ありしが、書林も知る人少し。購はざりし事思へば
悔し。又翁問答といふものを草せられしを、書賈盗みて印行せるを聞きつけて、後の意
に愜はねば破らしむ。書賈のその費を歎くにより、是を償はむとて、女誠の爲に著され
しものを鑑草と題して授けらる。又醫書の著述は其の業にあらざれども、理を推して明
らむる所なるべし。醫筌は大野了佐といふ愚魯の人の爲に著す所也。此の人、士たるに
堪へざれば、その父賤業を營ましめむとするを憂へ、醫とならむ事を先生に乞ふ。先生
其の志をあはれみ、大成論を讀ましむるに、纔に二三句を教ふる事二百遍計、食頃忽遺
忘す。又來り讀む事百遍餘にして、始めて記得す。かくのごとく久しきを経て、後終に
醫を以て數口を養ふに至る。教へて倦まずの實を見つべし。先生人に語りて曰く、「吾了
佐において殆ど根氣を盡せり。然れども、彼れつとめずば能はず。彼愚昧といへども、

備前侯一備
前國主池田
侯
熊澤氏一了
介、蕃山と
號す、先生
の門人
時めかし
重く用ひ

筑波山一新
古今集の歌

勵勉の力は絶奇也。況や了佐ならざる者は、其の勉の驗を知るべし」と。小醫南針、神
方奇術等は、山田森村兩醫生の爲に著す處とぞ。其の書傳はるや否や未だ知らず。先生
四十一歳にして、慶安元年戊子八月廿五日病みて卒す。其の舊居の講堂今尙殘れども、
其の學を繼ぐ者なく、荒廢につくといふ。惜むべし。先生三子有り、備前侯に仕ふ。熊
澤氏の故を以てなり。長は宣伯通名太右衛門、よく父の徳を嗣ぎて、明敏豪傑しかも温
厚也。病によりて仕を致し、家に卒す。惜まざる者なしとぞ。仲は藤之丞、又致仕京師
に病死す。洛東黒谷に葬る。季彌三郎、先生歿する年に生る。是はた侯時めかしたまひ
しかども、病をもて辭して江西にかへる。後又京師に寓居し、改名江西文内といふ。病
みて死す。故郷にかへし葬る。常省先生と諡す。
○藤樹先生の門人備前に召さるゝ者五六輩に及ぶ、熊澤翁は其の魁也。翁は平安の人、
本氏は野尻、通名次郎八といひしかども、外祖父養子として熊澤助右衛門と名のらしむ。
諱は伯繼、致仕の後了介と稱し、息遊と號す。氏も亦後に蕃山と稱せしは、備前にして、
其の領地寺内といひし所を蕃山と號けて、暫くこよに隱居す。
筑波山葉山しけ山しけけれど思ひいるにはさはらざりけり

明石侯—播磨明石領主
松平家
經濟—經世
濟民、政治
琴柱に云々
—活用の才
に乏しき
上書—君に
上つる意見
書
摺紳家—公卿

福岡侯—黒田家、筑前國福岡城主
程朱の學—宋の程頤、程顥及び朱熹の學、即儒教理氣の説

といふ古歌のこころによれるとぞ。其の後京に歸り、故ありて播磨明石侯の許にあり、侯封を移さるゝに従ひ、下總古河に至り、其處にて終る。時に歲七十三。元祿四年八月十七日也。その學藤樹に出づるといへども、見所また一家をなして、ことに經濟に長ず。時、處、位の三つを知るをもて要とし、琴柱に膠する書生の説に異なり。其の著書、集義和書、同外書に見えたり。世に傳ふる所、此の人備前にして佛寺を破壊すといへり。予其の事實をよく聞き正せるに然らず。此の擧は翁致仕の後にして、然も侯に上書してこれを諫むとなむ。されども、其の著す書に、佛敎を誦ること大過せれば、その漸をなすとはいふべし。京にしては摺紳家、關東にしては諸侯の間、名ある諸君に門人多かりしとなむ。

貝原益軒

益軒貝原氏、諱は篤信、字は子誠、通名久兵衛、祖父より以來筑前福岡侯の臣にして、先生は父寬齋の季子也。邦君三世に仕へて儒學教授となる。君命によりしばしば京師に往來し、專程朱の學を講ず。其の見は慎思錄自撰集に見ゆ。その學博く和漢に互れるこ

名に近づく
云々—名聞
を欲せず
恭黙—丁寧
にして言葉
少なし

梨棗云々—
印行する事
太史公—前
漢の司馬遷
史記の作者
名寄—名所
の名を寄せ
集めたる書
采地—所領
の地
元祿庚辰—
元祿十三年
正徳甲午—
正徳四年

と等輩勲しといへども、性甚謙にして、只身の及ばざる事を恐れ、名に近づく事を喜ばず。常に言ふ吾人に長たる事なし、但恭黙道を思ふのみと。固より人を愛し物を濟ふをもて要とせる故に、其の著はす所の書多く平假名に記して、通俗の爲め教ふる事丁寧反復す。家道、養生、初學の諸訓、大和俗訓、樂訓などは尙さもありなむ。鄙事記のごとき、日用の細務にまでも及ぶは、近世諸儒、唯自己の學力を示して梨棗を費すものと、相去る事天淵なるべし。はた太史公が名山大川を探るに似て、足跡諸國にあまねく、其の國の名寄をはじめ、東海、岐嶺、日光の紀行、有馬入湯の案内、大和巡、諸州巡の類を著はされしも、自の詩文章に及ばず。唯旅客の助とせらる。年積るに従ひ、侯家の禮遇彌々厚く、頻に采地を加へらる。元祿庚辰歲七十一、老を告げて事を致すといへども、尙月俸を賜ひて、其の老を優にす。正徳甲午八月廿七日家に卒す。時に歲八十五子なき故に、其の兄存齋の次子重春をとりて家を嗣がしむ。先生の年譜は元祿九年まで姪好古撰む。好古今年卒せる故に、十年より終に及んで、姪可久次ぎて撰む。墓誌は門人竹田定直録す。其の銘に曰く、

恭黙思道

極精造微

愛物爲務

事天不欺

韜藏增顯。

謙遜愈輝。

遺訓存策。

後學永依。

此の銘三十餘字の間、よく先生を盡せりとおほしきが故にこゝに擧ぐ。生涯著書百餘種に及ぶもめづらしといふべし。書名繁多なるが故にこゝには略す。

或人の話にいふ、先生歸國の海路にて、同船數輩、各姓名を問ひ聞くにも及ばず、何となき物がたりどもをして、日を重ねしに、其中一人の若き男、人々に對して經書を講ず。先生例の恭々しく黙して是を聽きて一言是非を論ぜず、船著岸して各はじめて其の郷里をあかし、再會を契りて別るゝに臨み、先生も、吾は貝原久兵衛と申すものなりと名乗らるゝを聞きて、彼の男大きに恥ぢおそれ、速に逃げ去りしとなむ。傳には見えぬ事なれども、其の人爲の一端を見るべし。

○因に記す。姪好古は益軒の兄樂軒の子、通名市之進と稱す。著す所和事始、漢事始、日本歲時記、諺草の類、其の體裁全く先生のごとし。先生に後れてながらへば、其の志を嗣ぐ人なるべきを、惜むに堪へたり、此の人の號損軒と稱ふるよし、人はいへるを、予此の比先生の染筆を得たるが、是先生の書林柳枝軒より出でて、疑はしき物にあらず。然るに損軒七十有五書とありて印中の文字、上は貝原篤信、下は子誠の印也。思ふに易

損益の卦一
周易にて、
山澤を損卦
とし、風雷
を益卦とす
嚙矢一物の
始の稱

歸依一信仰
して我が生
命を其に托
する事
洛東一京都
の東側
乞丐一乞食

の損益の卦により、表裏の軒號とせられしにや。かゝれば好古の號といへるは傳聞の誤りか。但し其の軒をわかつて好古に讓られて後、自の號とせるも知るべからず。其の郷人に正すべくこそ。

貞享元祿の前後、儒學の名家多く、奇行奇話も又尠からねども、今は唯藤樹、益軒の二先生をあけて、徳行の卷の嚙矢とす。次に桃水、無能の二和尚を擧ぐるもまた同例なり。彼を取り是を捨つるにはあらず。

僧 桃 水

此の傳は面山和尚著せる一書有りて既に印行す。今は要を取りて擧ぐ。

僧桃水、諱は雲關、筑後國の人にして、肥前國島原禪林寺に住持す。跡を匿して後、其の行方を知るものなし。歸依の尼、國を出でてかたぐを尋ね廻りて、洛東四條河原に至る時、師菰打かづきて、同じさまなる乞丐人の病めるを介抱してあられしに、涙を流して拜す。さて和尚の爲にとて、自紡績し、年を経て織りたてたる臥具の背に負ひしを、取出して參らするに、和尚、「今の身にしては、用ふる所なし」といひてうけず。尼もさるものにて、「自用る給ふ所なくほ、御心に任せて、ともかくもし給へ。師に供養せる上

は、直に捨て給ふも恨む所なし」といふ。さらばとて請けて、やがて病める乞丐に打著せ給ふを、他の乞丐人共見て大に驚き、これは凡人にあらざといひて、俄にあがめたふとみければ、そこをもたちさり給ふ。其の此弟子の兩僧も、尋ね求むる事三年にして、安井門前にて、乞丐の集りたる中に見つけしかば、其のあとにつきて人なき所に至り、「師若し此の如くならば、われくも同じ姿となりて従はむ」と乞ふに、師肯かず。一人は師の指揮を得て、他方の知識の許へ行く。一人はしひて従ふ程に、「さらば吾がする所を見よ」とて伴ひ行く所に、乞丐の死せるあり。やがて弟子と共に是を埋めつ、さて其の死者の喰ひ餘せる食を、己まづ喫して、「汝もよく喰はむや」とあるに、止む事を得ずして喰ひたれども、臭穢に堪へず嘔吐す。師見て、「さればこそ此の境界には堪へざりけれ。これより別れむ」とて去りぬ。後其の遊ぶ所をしらず。ある時、肥後熊本^{くまもと}の寺僧國侯^{こくこう}大旦那^{だいたんな}たるをもて、勢ひ猛に儀衛を盛にして關東^{かんとう}に行く道、大津^{おほつ}の驛^{やく}に休らふ間、馬士^{まこ}查買^{ぢがい}はむとて「老父^{らうふ}」と呼ぶ。是は此の日比^{ひひ}とある家の軒^{のき}に、假初^{かりそめ}にさしかけてある翁^{おきな}が造る所の沓草鞋^{くわくぞうぢ}いとよければ、ぢいが沓とて、興夫^{かこかきうまかた}馬卒^{ばそ}もてはやしける也。時に其の沓もて來る翁を見れば、桃水和尚^{ももみづわうしやう}なり。彼の僧驚き、興をまろび出でて、手を取りて涙

國侯—細川
大旦那—第
一の施主



角倉氏—角倉了意

遷化—僧の死すること
不干—世上の評判には全然無頓着なり
大津繪—走り書の粗畫、近江の大津にて賣る

を流す。是は師の法弟なり。とかく舊を語りて別れむとする時、「汝唯諸侯に酔ふ事なかれ」と示す。かよりしかば 又去りて、京の片邊に小家を借り、僧形にかへり、行乞してあられしを 角倉氏其の徳を見知る事有りけむ 強て請じて供養せむといへども、應ぜずして曰く、「吾は人の供養を請くる事を欲せず」と。こゝにおいて、角倉氏思惟して欺きていふ、「吾が邸人多ければ、日々残餘の飯空しく腐爛す、實に惜むべし。是を師に參らせむに、酢を醸して賣り給はゞ、老脚を勞して行乞し給はむにまさらむか」と。師これを眞とし、「それこそいとよきことなれ。捨つるものは拾ふべし。いで吾は酢賣の翁とならむ」と。これより洛北鷹峰にて、酢屋道全とも通念とも自稱して、年を経。遷化は天和三年九月也。其の乞丐の時の口號を弟子琛洲といふ僧の聞きたるは、
如是生涯如是寛 弊衣破碗也閑々。
飢餐渴飲只吾識 世上是非總不干。
大津にて沓賣の時、或人其の年老いたるを憐み給ひしにや、大津繪のあみだ佛の像をあたへしかば、其のこやに掛け置き、消炭して上に書す。
せまけれど宿を貸すぞやあみだ殿後生頼むとおほしめすなよ

鷹峯にて遷化の時の遺偈。

七十餘年快哉。屎臭骨頭堪作何用。嘆。眞歸處作麼生。鷹峯月白。風清。

僧 無 能

此の傳は、或僧漢文の著述、五僧記事といふものの中より取出て其の文を假名に和していだす。

屎臭の骨—惡臭ある肉體
眞歸—眞の往生
作麼生—そも如何
淨宗—淨土宗
行脚—諸國巡行
常座不臥—常に座して臥さぬ事
念佛を授け—南無阿彌陀佛の六字の名號を信者に授けて佛縁を結びしむる事

陸奥の無能和尙は、淨宗の大徳にして、四十未滿の遷化なれども、其間自行化他の行業類なき事は、其の傳記既に世に行るれば、こゝに擧げず。中に一奇行、安きに似て、甚難き事を記す。まだ若くして行脚の折、或家に投宿有りしに、その家に好き女子あり。和尙の面貌、甚美に、傳記には地藏菩薩の化身といへり。其の美知るべし。氣韻清高なるを見て、戀慕の思ひ燒くがごとく、起居靜むるに堪へず。夜深更に及び、忍びて其の寢室に至りしに、和尙はもとより常座不臥を持すれば、屏風を巡らしたる中央に端座して、微音に念佛せり。女子やがて背より抱くに、驚くけしきなく念誦氣平かなるさま、猶蟬の樹を撼すがごとく、蚊子鐵牛を嚙むがごとし。半時ばかりをへて、女自放ちて出でたり。朝に及びて狂を發し、獨言して恥を述べ。和尙憐みて、爲に念佛を授けて後、やうやう愈ゆることを得たり。女子是より後終身嫁せず、念佛して逝せりとぞ。

一隻眼一物
を見抜く見
識

九相圖詩一
人の死後九
變して遂に
骨となる迄
の有様を畫
に合せて作
れる詩

或人曰く、子亦婆子燒庵の則をしるや。婆氏一庵主を供養す。一日二八の好女子を
して抱住していはしむ。師恧麼時如何。僧曰、寒巖枯木三冬無暖氣。女子婆に告ぐ。
婆二十年來此俗庵主を供養すといひて、終に僧を放出して庵を焚く。今此和尚の事に
似にり。是非如何。予曰く凡古則は別に一隻眼を開いて看るべし。此和尚の實徳と
相通ぜず。もし然らずといはど、誠に子に問はむ。庵主或は女子に淫せば、また婆
氏何とかせむと。或人微笑して去る。
又或人語らく、王陽明いまだ弱冠の日、及第のため京師に赴く途中、投宿せられし
家に、艶色比類なき寡婦あり。夜忍びて陽明の臥床に至りしに、猶寢ねやらず、旅装
中の書を取り出し見居りければ、驚きたれども、止め難き思ひの程を述べ、死をもて
挑む。陽明靜に九相圖詩の意を説きて、無常を示されければ、聞得て涙をながし、
教誡により操を破らざりし恩をのべ、罪を謝して退きたりといふことありとなむ。
何の書に見えたるや知らず。是は趣意全くひとし。嗚呼幾人か此に至りて一生を誤
る。白刃をも踏むべし、此の境に動されざるは難からずや。

長山宵子

此の傳は、安藤爲章の年山打聞に出
づるまゝ一語を増減せずうつせり。

宵子は水戸府城長山七平某が女にて、奉行職師岡與右衛門綱治が妻なり。夫婦のあはひ睦
しく、奴婢を顧みて恵めり。すべて内を治むるの婦徳うるはしきが中に、善助綱常は家婢の
産む所なりしを、やがてみづからの子とし、其の婢を深くいたはりて、湊村の某に嫁せし
め、綱常を愛育すること、我が生む所の如くなれば、母子の間いさよかも隔つる事なく、
綱常もまた孝行二心なく、もとより彼の家婢の生めるといふこと、十四五歳までしらす
ぞ侍りし。其の幼なかりし時病を憂へたりしに、宵子醫藥を嘗試みるあまり、人目をつ
つみて、夜に紛れ、神崎寺の觀音大士へ素足にて參詣し祈りける。感應のことわり空し
からで、その病愈えけり。是世の中の養母繼母の誠めとなり侍りけむ。更に家婢を撰び
て綱治にめさせ、其の婢をも又いとほしき者に教へ導きて、織縫何くれまで、女職をなら
はせたり。古人曰く、「凡婦人のうまれつき妬を甚しとす。もし妬なくば、百拙捨つべ
し」とぞ。嗚呼宵子や、妬薄ければ世の中の妻女の教となり侍らまし。又綱治久しく召し
使ひたる若侍、おほけなく宵子に心をかけて、さまぐいひなびけむとせしが、或時綱治

他に行きし留守に、その閨に忍び入りしを、かねて用意やしたりけむ、かねよき脇指にてかひなくしく切りければ、唯咩といふ聲ばかりにて死しけり。傍の衣裳うちかけてさりけなくものし、綱治歸りたるに、始めてしかくの趣始終を語りけるとぞ。女の密夫する事、かくれても顯はれても、たまく聞えて其の身の恥のみならず、親はらからまでの名を穢す事なるに、此の宵子の潔きころもちに、綱治手をいたはらさず、家のうちのさわぎもなきふるまひは、また例少くぞ侍る。以上の婦徳を思ふに、唐土の書には、賢女、節女、烈女などことごとくしくしるしたるには、いやまさりてぞおほえ侍る。正徳三年の春より病つきて、同じく七月二十四日に身まかる。齡四十二。江戸駒込大乘寺といふに葬りて、妙珠院月澄日冷と謚せり。まことに惜むべく尊むべき貞烈の婦人ならずや。

甲斐 栗子

栗子は、甲斐の國山梨郡の農夫某が妻なり。舅姑に孝ありてその名高し。然るに、舅姑も夫も亡せける後、山抜といふ事にあひ、(山ぬけといふは凡山國にある大塚にて、塚の



いづる類なり。大水湧き流れ、村里ほろび人死す。水に溺れ死す。その時、屍を掘り出して見れば、十二なる養子を背に負ひ、八つになりける實の子の手を引きて有りけり。幼きかたをこそ背には負ふべきに、長じたるを負へるは、此の時に臨みて遁れむとかまふるにも、養子をおもくするの義をおもふなるべし。女といひ邊鄙の産なり、何のまなぶ所もあるまじきに、天性の美此のごときは世に有り難き例なるべし。さるに思はざるに災にかより、死をよくせざるは悲し。しかはあれど、此の災によりて其の徳ますくあらはるといふべきか。國人これが爲めに碑を建て事實を記せりとなむ。

若狭子

小濱の府下
酒井若狭
守領

若狭の國小濱の府下に、病狼あれたる事ありしに、某士のうちに使はるゝ小女、十四五歳にて綱といへるが、主の幼兒を背に負ひて、そのわたりに遊びける時、彼の狼不意に走り來りてとびつきけるを、綱は急に己の裾をまくりて背の兒をおほひ、うつぶしになりたる時、狼は綱女が尻へ喰ひ付きぬ。さる間に、人々聞きつけて集まりしかば、狼は即走り去りたり。さて彼の女を物に乗せたるまでは、尙詞たしかに、主の子の故なきよし

を告げしが、後に息絶えたり。やがて其の親の許へ昇入れたるに、主の妻も聞きてかけり來れるに、綱が母、幼兒をわたして、「血にはまみれ給へど、つゆばかりあやまちせさせ奉らざりしを悦びはべる」といへり。此の母もたゞものにはあらざりけり。此の事を國の守聞し召して、二なく憐がり給ひ、大なる石碣をたて、忠烈綱女の墓と記し、銘は儒臣小野忠次郎に命じて書かせ給ひ、三日大佛事を行はれ、遠近の人々も詣で、詩歌の作、心々に手向ぬと聞えし。

樵者七兵衛妻 同 久兵衛妻

洛東蹴上
山城國愛宕
郡
息杖―物擔
く人の、天
秤棒を支
へ、息を休
むる杖

洛東蹴上に樵者七兵衛なる者、一日山に入りて歸る事遅かりしかば、其の妻迎に行きたるに、とある崖下に、菜を一荷にし、息杖にもたせながら、人は見えす。ふと見あぐれば、木の枝に、大なる蚶、首をたれて腹ふくらかに見えしかば、心きよたる女にて、是は夫を呑みたるならむと、やがて彼の荷に添へたる鎌を取りてむかへば、蚶口を開きて是をも呑みたり。呑まれながら此の鎌にて、口より腹まで切り裂きしに、夫はたして腹中にありて、己と共に地へ落ちたれば、直に肩に引かけて我が家に歸り、數十日保養を

馮婕仔前漢書外戚傳上に出づ、元帝、虎圈に幸せし時、熊逸して殿に上らむとす、婕仔直に身を以て熊に當れる故事

加へて、常に復しぬ。此の後、頭に髮露ばかりも生ひず、其の邊にて、藥罐七兵衛（頭のおかく兀けたるを俗にやくわんといふ）と異名せるが、山には懲りて畠物など賣りて歩きし。今を去る事凡四十年前、六十餘の翁なりし、と予の知る人語りぬ。其の勇其の智、漢元帝の爲に熊にむかひし馮婕仔に劣らずといふべし。また同じたぐひは、
○享保三年戊戌十一月二十八日晡時、丹波國舟井の縣に野猪傷を蒙りて怒り走り、八木村より南廣瀬村に入る。山本をめぐりて直に山室村に向ひ、鳥羽村を過ぐ。一人田かへしてありけるものを牙けて、尙荒れまさりぬ。樵者久兵衛なる者年六十四、薪を負ひて歸るさにあひて、俄に避け隠れむ所なく、其處にありつる樹を攀ぢ、地を離るゝこと僅に三尺ばかり、猪裳の端を啣へて引落しければ、詮方なく相敵すること久しうして、遂に崖下に墜つ。猪いよく、猛りて喰ひ嚙みて、あまた所やぶられしかば、頻に叫び呼ぶといへども答ふるものなし。是が妻某、年五十四、聞きつけてとみに走り來りて、袂をもて猪の首におほひ、頸に跨りて抱きとどむ。猪動く事を得ざる間に、頻に命を救へと呼ぶ。こよにして村民二人相繼ぎて來り、短刀をもて刺す。また一人來て、斧をもて、其の脚をうつ。既にしてあまた集まり、其の疲れたるに乗じて登しぬ。樵者は終に活くる

龜山の領地
—松平豊前
守領

事を得、月比を経て創も痊えたり。其の所龜山の領地なれば、その妻の烈を賞し給ひて穀を賜ひぬと、東涯先生の筆記に見ゆ。

伊藤介亭

介亭伊藤氏、諱は長衡、字は正藏、即通名とす。（是堀川の家風）仁齋先生の第三子也。性質篤實に過ぎて魯に似たり。殊に孝友ある人なり。母氏雷を懼る事人に過ぐ。故に生徒集まりて講談の半といへども、空曇れば、一直に辭して、其の本家堀川に走る事夏日の常なり。其の他も推して知るべし。兄東涯に仕ふるもまた猶父のごとし。（父には幼くて別れしゆゑ、此の兄弟皆東涯先生のをしへを受く）弟たちは尙少年にして、時々青樓に遊ぶ。或は朝に及びて歸るに、介亭同居の日なれば、早晨に起きてあらるゝに苦しむ、或時門より入りて急に呼んで曰く、何處にか火事つりと。先生即走りて屋上に登り、是を望む間に、部屋に入りて紛らはしたり。後は是をよき事にして、朝かへる毎にかくよばはるに、あやしむけしきもなく、例のごとく屋上にのほる。奥田士亨（東涯の門人にして三角と號す。通名惣次郎。伊勢の人）諫めていふ、「是は令弟達の欺かるゝなり。何ぞ常

青樓—遊女
屋

にはかられ給ふや」と。先生いふ、「吾これを知れりといへども、もしまことの失火ある時例の僞りぞと心得てたゆみではあしと思ひて、かくするなり」と。また或時住める家の板敷を引放ちて、何やらむ人を指揮す。ある書生入り来て「何事ぞ」といふに、「今誤りて鐵の火箸を落せり。故に是をもとむるなり」と。書生「それは何ばかりのものにもあらず。さながら捨て給ふがよし。騒がし」といへば、「否此のものを惜むにはあらず。此の家は人のものなれば、我にかはりて住む人あらむに、板敷を踏み落し、此の火筋にて傷けむ事を恐るゝ故に、かくするなり」と答ふ。後子を養ひて嗣とするに、既に長じたれども、小兒の思をなし、堀川の岸を過ぐる時は、後より手をあつるごとくして、是を護る。人見て怪しむばかりなりしとなむ。又をかしき事は、年比召し使はれし一奴、甚愚直なるものあり。ある日鯁を切らしむるに、「是は庖丁をねさせて切るべし」と教へたるまよに、其の日は事に紛れて、明の日「いかに昨日の鯁は切りたるや」と問はる。「奴未だ寐させたるまよにておこし侍はず」といふが、あやしさにみれば、割木を枕とし、布巾を打ちせ置きたり。又鯛の頭の切たるを炙らしむるとて、頭は角に掛くべしとありしに、やがて繩にてつなぎ、屋の角に掛けたりし。先生「奴はかくのごとくなるがよし」と

割木—細く
割りたる薪

高槻—攝津
高槻、永井
家領地

宮氏—宮崎
氏の略

身體云々—
孝經の語
蘭嶋—仁齊
の第五子、
紀藩の儒
趙子昂—名
は孟頫、子
昂は字、歸
安の人、經
史、詩文、書
畫に長ず

て、それが生涯愛して使はれしとなむ。高槻の儒臣たりしかども、京師に住みて終る。嵯峨二尊院先塋の側に葬れり。

宮 筠 圃

筠圃宮氏、諱は奇、字は子常、故に通名常之進といふ。尾張國海西郡烏地村の人。生來温厚謙遜にして、しかも聰慧強記、十歳既に詩を善くす。父是にいへらく、「勉めよや。吾が業を繼がずば我が子にあらじ」と。十三歳の時母氏背に灸す。筠圃頻りに涕泣す。母氏「熱に堪へずや」と問ふ。答へていふ、「然らず。吾聞身體髮膚敢て傷ひやぶらざるを孝の始とすと。然るに灸せざればかなはぬ病身なるを歎き侍るのみ」と。生につかへ、死を喪せる孝心、始終此のごとし。年十八父母ともに京師に來り、其の父東涯先生に學を受くるが故に、亦以て是に事ふ。東涯歿して蘭嶋に従ふ。學成りて其の名籍甚來。り學ぶもの多し。又書は趙子昂を學び、深く軌範を得、また畫を能くす。畫竹は殊に風韻一家をなせりければ、世人平安四竹の一とす。(四竹は淺井圖南、御園意濟、山科宗安、宮筠圃等なり)かゝれば其の書畫を請ふ者、月に日に絶えず。母氏此のときを見て、諫



向東疎拙之良謀身之竹在傍也竹中
 庭幽苦竹為子猷
 回風一陣冷，紫靄生。率荒多石，
 今以故宮，此不見。東家，只竹補
 若夫竹，乃第一補題。以竹，宜身。